
朱城高校 1 年 D 組 !

亥月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朱城高校1年D組！

【Nコード】

N9209F

【作者名】

亥月

【あらすじ】

どこにでもある普通の公立高校、朱城高等学校。が、その高校の1年D組の生徒と教師は、全員が全員【特異体質持ち】。それぞれの【特異体質】が引き起こす事件や、ボケまくりツッコミまくりの破天荒な学校生活。

第一話 机と椅子は投げるものではありません！

どこにでもある、普通の公立高校 あけしよこうこうがっこう 朱城高等学校。

行儀良く一列に並んだ教室が、カーテンの開放放たれた窓から覗き、制服に身を包んだ学生達がわいわいと賑やかに騒いでいる。本当に、どこにでもある光景。

そんな朱城高校校舎の三階の一番左、朝っぱらから日当たりの良い場所に、【1年D組】の教室はあった。

「おはよーございますー」

間延びした声と一緒に、がらがらと教室後方の戸が開いて一人の少女が、D組の教室に入室してきた。銀色がかった桃色の髪を黒いリボンでポニーテールにしたその少女は、窓際の席に目をやって、にっこり笑った。

「あー。おはよ、チー」

チーと呼ばれた少女の目線の先では、ショートカットの金髪に、カチューシャをした水色の髪の少女が椅子に座っていた。金髪の方は丈の長いスカートであぐらをかき、水色の髪の方は手にした分厚い文庫本から目を離していない。何こいつ等。非常識にも程がある。その二人の隣では、長身の男子生徒の首に、かなり小柄な男子生徒が腕をまきつけてぶら下がっている。金髪は、紫の切れ長の眼を二人に向けた。いや、でもね、この子がやると睨まれてるように見えるんだけど。

「総兵。チーのおでましたよ」

「あ？」

総兵と呼ばれた長身の男子生徒は、首にまきつく小柄な男子生徒の腕を振りほどくと、チーこと、万大路よろずおおじ 千歳ちとせの方を向いた。

「何だ。遅かったな、チー」

「道端で猫に構ってました！」

拳手して元気良く、遅れた原因を口走るチー。

「猫っておま……」

総兵が言い終わらない内に、先ほどの小柄な男子生徒がまた総兵の首に腕を回してぶら下がってきた。ちなみに、教卓からジャンプして。

「無視すんなよ、総兵ー！」

「何っすんだ、この山猿！」

ニット帽をかぶった山猿こと、猪野迫いの 洋司やうじは悪びれる風も無く、総兵の首にぶら下がり続けている。総兵が自らの首から洋司を引き剥がし、その頭の真上を殴ると同時に、チーが悲鳴を上げた。

「キヤー！ 何コレー！」

「は？」

瞬時に自分の机から数メートル離れたチーを見て、金髪こと、明里けいさと 沙夜さやは綺麗に整った眉をひそめてチーの机を覗き込んだ。十秒近くその姿勢を保ち続けると、沙夜はおもむろに机の中に手を突っ込んだ。

「おもちゃじゃん……」

抑揚の無い声でおもちゃのゴキブリの触覚をつまみ上げた沙夜。

「あ。俺のマイハニー」

頭を抑えた状態で、洋司がゴキブリを見て言った。

「あんだね……」

「沙夜」

は？ と沙夜が声のした方を向くと、文庫本を閉じた水色の髪の少女、鳶坂とびさか衣翠いすいが何かをつまみ上げていた。

よくよく見れば、沙夜がつまんているものとよく似ているが、衣翠のつまんでいるもののほうがリアルである。

「それ何？」

「沙夜の机から出てきた」

「オイそれ、本物なんじゃねーか？」

総兵の言葉と同時に。

「あ。俺の愛人」

と、洋司が呟いた。

その次の瞬間に、教室の真上を机が飛翔した。

「お前かアアア……」

沙夜がものすごい形相で洋司に机をぶん投げたのである。
総兵は顔色一つ変えずにひょいとかわすと、机は洋司の方にぶっ
飛んでいく。すると。

「ほいっ」と

洋司は瞬時に近くの机に飛び乗り、机を蹴って、空中で【座った】。
先ほどまで洋司のいた場所に机がぶち当たり、黒板にひびが走る。
洋司は空中に【座った】ままの状態で、沙夜を見下ろした。

「むやみやたらと怪力使うなよー。榊に叱られるぞー」

洋司が下に向かって言い放つと、沙夜はすでに椅子を洋司に向か
ってぶん投げていた。

大阪夏・冬の陣の戦場も真つ青な紛争が繰り広げられている中、
その戦いの場となる事を免れた一角で、チーと眼鏡をかけた少年、
市村^{いちむら} 裕也^{ゆきなり}は同時に大きく息を吐いた。

「こつなるって分かってたけどさ……」

「分かってましたけどね……」

二人がそう話していると、D組朝の陣が繰り広げられている教室
の前方の戸が大きく開いた。
びたりと、音が止む。

「朝っぱらからうるせーんだよ、愚民共が」

戸を開けたのは、黒いスーツを着た長身の男だった。端正な顔は気だるげで、灰色の瞳がやけに目を引く。

この時間帯にD組にやってきてスーツを着ているのだから教師には間違いないのだろうが、普通の教師が生徒を愚民と呼ぶだろうか。教室の中心で、足やらがボキ折れた椅子の背凭れを持った沙夜が、忌々しそうにその男を睨んだ。メツチャ怖い。

「普通はおはよう、だろうが！ 普通はよオ！」
「普通は席ついてるもんだろーが。普通はよオ」

スーツの男ことD組担任の数学教師、たはら さかき田原 榊は何の気なしに言い返すと、教室を見渡して眉をひそめた。

「ったく……またボロボロにしゃがって。誰に【元に戻して】もらってると思ってるんだ」

沙夜は顔を伏せ、空中で沙夜を見下ろしていた洋司も床に降りて、真顔のまま榊を見据えている。

榊は眉をひそめたまま息を吐くと、教室の後ろの方でロッカーの上に座っているチーに目を向けた。

「千歳。元に戻せ」

「ハイ」

チーがそう言うと同時に、総兵がチーの背中を突いた。ひくつ、と痙攣したような声を出してチーの身体がぐらりと傾き、総兵はすかさずチーを支えた。

すると、ぐにやりと教室の中央が歪み、渦を巻き出した。沙夜と洋司が素早く教室の端に寄ると、渦は大きくなって周りの机や椅子を巻き込み始めた。渦は五分間近く大きく渦巻くと次第に小さくな

つてゆき、渦が消えて無くなる頃には、教室のいたる所に机や椅子が散乱していた。どれも沙夜と洋司の戦いが始まる前の、いつも通りの姿。

榊は、近くにあった机の様子を確かめて、教室にいる自分の教え子を見渡した。

「俺達D組が、全員が全員【特異体質持ち】なんぞ知れたらお終いだからな。肝に銘じとけよ」

沙夜が苦々しげにチーの方を向いた。【時間を操る】チーの特異体質は、チー自身にとってかなりの負担になる。沙夜自身の持つ【怪力】や、洋司の【空気を自由自在に圧縮する】ような特異体質とは違い、何度も連発できる代物でもない。

「千歳に何度もこんな事させるのも酷だからな……」

静まり返った教室を榊はもう一度見渡すと、ま、と間延びした声で言葉を継いだ。

「さつさと机と椅子片付ける。もうすぐ一時限目だろが」

そう言った後、榊は教室から出て行くこととしたが、ふと足を止めて開口した。

「お前等、罰として数学の時間全員でグラウンド百周な」
「ふざけんなアアアア!!」

朱城高等学校1年D組。

【特異体質持ち】の生徒と教師が集合した、学級である。

第二話 演歌といえば北酒場

朝……っというか、9時と11時の間。つまり10時。
1年D組教室内。

「沙夜ちゃん、どー思います」
「何が」

大真面目な顔で沙夜に問いかけるチー。チーに目もくれずに、シャープペンの芯を補充してる沙夜。いつもの見慣れた光景である。

「タモさんとみさんの睡眠時間、どっちが短いか」

またまた真面目な顔で、意味不明な言葉を吐くチー。沙夜は無表情のまま芯の補充口に蓋をすると、かちかちとペンをノックして芯が出るのを確かめている。ちなみにその隣では総兵が怪訝そうな顔でそれを傍観し、洋司も無表情で傍観している。

「同じぐらいじゃないの」

「いや、絶対私はタモさんだと思っんです」

静かに力説するチーを、紫色の冷めた目で見つめ返す沙夜。

「どっから来んのよ、そういうのは」

「みさんの方が、お昼の番組によく出てるからです」

「いや、そっちじゃなくて」

シャープペンから突出していた芯が、ぼきっと折れる。

「何で、そういう支離滅裂な話題を持ち込んでんのか、って事」
「支離滅裂ですかね？」

頭上にクエスチョンマークを浮かべて小首を傾げたチーを見て、
沙夜と総兵は同時に溜息をついた。

「え！？ 何で溜息つくんですか！？ 何かおかしい事言いました、私！？」

二人の態度を見て、パニくるチー。

「そりゃそつだよ……」

総兵の後ろで、眼鏡を押し上げながら術也が呟いた。とその時、
廊下ではたたと足音が聞こえ、D組連中の目が教室前方の戸に集
まった。足音から少し遅れて、がらりと引き戸が開く。

「じ、ごめんなさい！ 教室間違え……」

教室に入ってきた鳶色の髪の女性が言い終わる前に、引き戸の上
に仕掛けられた爆竹が爆発した。パパパパパンツ！！ と派手な爆
発音が教室中に響き渡る。

「キヤ ……！！ 何コレ！？」

ゴキブリにビビった女子高生並の悲鳴を上げて、電光石火のは
やさでしゃがみ込んだその女性を見て、D組連中はおー、と地味な
歓声を上げた。

「ナイスリアクションだな、鳴」

「ナイスリアクションですネ、なっちゃん」

総兵とチーに「鳴」「なっちゃん」と呼ばれた女性

神阪

鳴海は、なるみ ともや電光石火のはやさで立ち上がって抗議し始めた。

「ひ、ひどいじゃないですか！ たしかに君達とは8歳か9歳くらいしか歳は違わないけど、仮にも先生ですよ私は！」

「だって、他の先生じゃリアクションしないし、つまらないんですよ」

女子高生並の声のトーンで抗議する鳴なるに、しれっと口答えするチー。チーの言葉に、D組連中もうんうんと頷く。

「矢部に仕掛けたら、前髪焦げて一時間丸々使って説教されたしな」

総兵の言い分。

「真辺先生に仕掛けたら、ぽっくり逝っちゃんいそうだから」

これは沙夜の言い分。

「榊はノーリアクションだったから」

これは洋司の言い分。

「吉山先生は、怒るとメツチャ怖いから」

これは祐也の言い分。

「秋沢にやったら校長に告げ口した後、榊に文句言うから」

これは衣翠の言い分。

「っていう事で、なっちゃんが一番楽しいんですよ」

締め括りはチー。

「だからって、教師に爆竹仕掛けるのはやめなさいっ!!」

鳴がそう叫んだ瞬間、教卓からぼとつと黒い物体が落ちた。へ？
は？ と、鳴とD組連中の視線がその物体に集中する。

艶々と黒光りする羽。ぴよっ！ と飛び出した二本の細い触角。

「あ、俺の隠し子」

洋司がそう言った瞬間、鳴の二度目の悲鳴が響いた。

職員室。

コピーとコピー機のインクの匂いが充満した中で、自分のデスクチェアに座って鳴は深く息を吐いた。

「あら、どしたの？ 神阪先生」

そう鳴に話しかけたのは小太りのおばちゃん、裕也の言い分に登場した吉山先生。大らかで生徒にも親しまれているが、怒るとD組連中も戦慄する怖いお方である。

「いや、ちよつと……」

遠慮がちに開口した鳴の華奢な肩に、ぽん、と誰かの手が置かれる。へ？ と鳴が振り返ると、彼女の視界にに神経質そうな男が映った。

「大方、D組で嫌がらせてでも受けてたんでしょ？ まったくアイツ等は……。神阪先生が優しいのをいい事に」

小さい声でぶつぶつと文句を言う、この陰湿そうな男は、衣翠の言い分に登場した秋山。陰湿で神経質で粘着性のある性格のこの教師は、生徒達の中でもワーストの人気を誇っている。が、その立場をわきまえる事も無く、生徒に人気のある鳴を狙っているのである。鳴の肩に手を置いたまま、まだぶつぶつと何かほざいている秋山と、その秋山を押し退けるようにして、キザっぽい男が前髪を掻きあげながら、また鳴の肩に手を置いた。吉山先生は怪訝そうな顔になり、鳴は困惑したような顔になる。

「やあ、おはようございます神阪先生。そんな暗い顔をなさってるよ、せつかくのお美しい顔が台無しですよ」

朝っぱらじゃねーけど、朝から齒の浮くような発言を堂々としているこの教師は、総兵の言い分に登場した矢部。典型的な自己陶醉型であるこのキザ男は、D組での爆竹トラップで自慢の前髪を焦がし、それに激怒してD組連中を1時間丸々説教したという心の狭い奴である。ちなみにさっきのセリフの通り、秋山と同様、鳴を狙っている教師の一人でもある。

矢部は、吉山先生の訝しげな視線に気づく風もなく、また鳴を口説き始める。鳴が二度目の溜息をついたその時。

「あー……疲れた」

間延びした声がして、がらがらと引き戸が開き、榊が入室してきた。相変わらずぼーっとした表情で、こいつホントに教師か？ というような雰囲気を漂わせている。

「お帰りなさい、田原先生」

微妙に震える声で榊に話しかけたのは、沙夜の言い分に登場した真辺先生。頭の上がだいぶ寂しくなってきたではいるが、和みムード全開のこの先生は、生徒達に結構人気があるのである。人生わかんないよね。

「やつぱ煙草吸えねーのは無理ですわ。つーか、D組以外だとメツチャ気疲れする……」

真辺先生に話しかけながら榊は手近な窓を開け放つと、煙草を啜えてライターで火を点けた。吐き出された白い煙が、窓ガラス越しに消えていく。しばらくそうして煙草をふかしていた榊は、あ、と咳いて鳴の方を見た。

鳴の顔が、さっと赤くなる。

「……さつき爆発音してましたけど、大丈夫でしたか？ 神阪先生」

「い……いや、だ、大丈夫です！ 平気ですから！」

何度もどもりながら返事をする鳴を、榊はしばらくボーっと見つめた後に開口した。

「……いや、それならいいんですけど」

D組教室。

「総兵君、沙夜ちゃん、クイズ答えてくれますか？」

「んー……、別にいいけど」

「俺も構わねーけど」

沙夜は水色のカラーペンを分解しながら、総兵はケータイをあたりながら答える。

「じゃー問題。なっちゃんの好きな人は誰でしょー？」

「はあ？」

二人とも手を止めて、チーの方を見た。

「……本気で言ってるの？」

「……正気か、お前」

「え？ 何ですか。答えが難しすぎですか？ それなら北島三郎の誕生日でもいいですよ」

チーのすつとぼけた声に、二人は、本日二回目の溜息をついた。

「榊に決まってるでしょーが」

「え？ 水谷豊じゃないんですか？」

「お前、そういう支離滅裂な答えでクイズ出そうと思ってたのかよ」

第三話 熊と会った時に熊から目をそらしちゃダメだっていったでしょ、もオオ

四時限目、D組教室。

さんさんと真昼の太陽光が教室に降り注ぐ中、D組では数学の授業が行われていた……はずだった。

「榊」

「あ？」

今まさにD組連中は学校の屋上の片隅に集まり、ビュービューと風に吹きっさらされていた。下ではD組以外の生徒と教員が、何やらワーワーと騒いでいる。

「何で俺等こんなトコいんだよ」

「生き延びるためだ」

「いや、それぐらいは分かるわ」

総兵は無表情のまま、自分と同じく無表情で煙草をふかしている担任と会話していた。その隣では、チーが退屈を紛らわしているのか手すりの上に立って、校庭にいる生徒の何人かとジャンケンしている。

「オイ、コラ。パンツ見えるぞテーマー」

パンツが見える心配はしても、彼女が落ちないかという心配は垣間見せない総兵。それでも構わずに下の生徒とジャンケンしているチーの隣では、いつも通りに衣翠が本を読み、沙夜が洋司の脳天をかち割っている。屋上にいるという事以外は、何も変わらない光景

である。

この何も変わらない光景が、なぜD組教室ではなく、屋上の一角で繰り広げられているかというところ、話は二十分程度前に遡る。

二十分前、D組教室。

「ハイ、っつー事で。P34の問1な」

榊はそう言うと窓辺に近寄り、煙草を啜えてライターに火をつけた。

「ちよい待ち」

ライターの火が煙草の先につく一歩手前で、沙夜が口を挟んだ。榊はライターの火を消すと、煙草を啜えたまま沙夜の方を向く。

「あ？ 何」

「授業中に煙草吸うなよ」

不機嫌そうな沙夜に睨まれてもボーっとした表情を崩さない榊。

「癌になる時はお前等も道連れにする予定だから」

「先生！ 私はどうせ癌になってしまおうとしても、胃癌だけは避けたいです！」

榊の言葉を聞いて、チーが勢い良く挙手して真顔で答える。そして、その隣でいつものように総兵が溜息をつく。

「……何で胃癌限定？」

「胃癌は悪化したら、胃を摘出しなければならぬからです！ 私はおばあちゃんになって老衰で死ぬまで、お腹いっぱい食べたいです！」

「へー……そうなんだ」

気だるげな声で適当に受け答える榊。衣翠がそろそろ飽きてきたのか、机の中にしまっていた本を取り出してページを開き始めた。

「ま……、胃癌よか肺癌になる確率の方が高いけどな」

「先生！ たとえそうだとしても私は癌になりたくないです！」

「いや、それ最初に言えよ！ お前の言葉が長ければ長い程、誰もが混沌の渦に巻き込まれていくんだから！」

総兵がロングフレーズでツツコんだと同時に、洋司が声を上げた。

「あり？ 何でみんな外出てんの？」

え？ は？ マジで？ と、ざわざわと連中が窓に近寄っていくと、確かに多くの生徒が校庭に集まっている。

「……何で、みんな外に出てるんですかね？」

チーがぼつりと呟く。

「……ん？ 何か言ってるねーか？」

総兵が窓ガラス越しに、目を細めて言う。

「んー……衣翠、何ってる？」

榊がそう言いながら衣翠の方を向くと、衣翠はとつくに眼を閉じて、耳に全神経を集中させている最中だった。「読書で、養分を得る」、「半径十キロ程度の音を全て聞き取れる」という二つの特異体質を持つ衣翠にとって、校庭にいる生徒の声を聞き取ることなど朝飯前である。

「……………逃げろ、って言ってる」

「えっ？」

「……………熊とも言ってる」

そう言つと、衣翠はおもむろに振り向いて廊下を指差した。

「さつきから気になってたんだけど……………廊下から変な足音がする」

衣翠の言葉に、D組連中がベランダの傍から離れて廊下に身を乗り出すと……………。

デッカイ熊が、のしのしとこちらに歩いてきていた。

……………という事で、今に至るのである。

今に至るといっても、全員が全員【特異体質持ち】のD組だから、屋上にまで逃げ延びれたのだが。

「……………つか、何で屋上逃げてんだ、俺等」

「仕方ねーだろが。俺達の教室は袋小路なんだからよ」

総兵と榊が会話している間にも、屋上の入り口までたどり着いた熊が、ガンツ、ガンツ！！と扉を叩いている。普通の扉なら一発か

二発でぶち壊されているところだが、「空気中の水蒸気を集結し、氷結させる」榊の特異体質で強化された扉は、案外持ちこたえている様子でさつきからガンガンと熊に叩かれている。

それでもD組連中は焦っていない。チーはジャンケンに余念がなく、衣翠は読書に余念が無く、沙夜は洋司とのバトルに余念が無い。

「……いつになったら、出られるんだろーな」
「俺は、煙草吸えれば満足だけどな」

榊は新しい煙草に火を点け、煙を吐き出しながら答えた。風に巻き上げられていく煙を見つめながら、ジャンケンに飽きたチーが手すりに座って呟く。

「あーあ……お腹減りましたね」
「あいつ等も減ってるな、ヒットポイント」

総兵の目線の先では、沙夜と洋司がげえげえと肩で息をしながらも睨み合ったまま相対していた。

「オイお前等、あんま校庭側寄んなよ。他の奴等にバレるだろーが」

バトルを止めない所が榊らしい所ではあるが、やっと動き始めた沙夜が手にしたものは、先ほどまで屋上の一角を形成していたコンクリートの塊だった。

「いや。よしとけて、お前。死ぬって」
「うるせエエエ!! 今日こそ殺ったらア!」
「沙夜ちゃん。バカは死にませんけど、洋司君は例外ですよ」

ギャーギャーと喚く沙夜、顔を硬直させる洋司、止める生徒、傍観する生徒と教師。なんと不釣り合いな光景であるうか。

「知るかアア！！ 覚悟しやがれエエ！！」

「うおわっ！？」

疾風さながらのスピードで放たれたコンクリート塊を、間一髪で避けた洋司。

と、その時。派手な音を立てて扉が破壊され、熊が姿を現した。

鈍い音がして、どっと何かが倒れる音が響く。

「どーしますか、コレ」

「どーかすればいいだろ」

榊は煙を吐きながら、またいつものように適当に答えた。

第四話 女性諸君 お化け屋敷では怖くなくても怖いフリしろ

夜。

夜中の朱城高校は昼間の喧騒とはかけ離れ、しんと静まり返って夜の帳を背負い、校庭を見下ろすような威圧感を放っていた。閉じられた瞼のように欠けた月が放つ、淡く柔らかな光が、誰もいない校内や校庭に差し込む頃。

ぴつたりと固く閉ざされた、まばらに錆の浮いた校門の前に、六人の人影が立ち校舎を見上げていた。

「夜の学校って、威圧的ですよー……」
「ま……確かにな」

校門の前にいたのは、朱城高校トラブルメーカーの1年D組連中。チー、総兵、沙夜、衣翠、洋司、祐也の6人だった。それぞれ制服から私服に着替えて、制服とは一風違った雰囲気それぞれ纏っている。チーは呆けたように口を開けて、総兵は怪訝そうな顔で校舎を見上げた。

「まったく、何でこんな事になっちゃったかな……」
「ま。けど、俺以外にもいて良かったよ」
「洋司君、何忘れてきたんですか？」
「んー、大事なもの」
「大事なもんじゃなかったら、金曜の夜にこんなトコ来ないわよ」

そう。この会話から察せられる通り、このD組のバカ共は一人ひとりが学校に忘れ物をしてきているのだった。そして何の因果か、同じ時刻の同じ場所から校内に侵入しようとしていたので、この際6人で行こうという事になったのである。

まったく、以心伝心なのかそうじゃないのか分からない連中ではあるのだが。

総兵は、校舎から他の5人に視線を移すと、思い出したように言った。

「つーか侵入する前に、どいつが何処に何を忘れたか確認しといた方がいいだろ」

「そういわれりゃそうですね」

チーがぼけつとした声で言うと、洋司がしゃきつと拳手して開口した。

「俺は、教室にニット帽忘れた！」

「僕も教室に手袋」

「私は、音楽室に筆箱」

「……私は図書室に、コンパス」

「俺も、図書室に数学のノート」

「私は、美術室に水谷豊のCDです」

最後に開口したチーの言葉に、全員が、あー………という表情になる。チーはそれに気づいていないのか、頭上にクエスチョンマークを浮かべて小首をかくりと傾げた。

チーの変わった忘れ物による打撃を受けたのち、気を取り直して総兵は、錆びの浮いた校門に手をかけた。

「それじゃ、順番に入るか」

校内。

リノリウムのすべすべとした床が、衣翠と桁也の持参したペンライトの細い明かりに照らされて、てらてらと光っている。昼間とは比べものにならない静寂に内心おののきながら、6人は暗い廊下を歩き始めた。

忘れ物回収の道順は、美術室 音楽室 図書室 教室という事になり、一向は最初の目的地である美術室へと歩を進めていた。

「一人だと、やっぱりコワイんでしょーね」
「だな」

「アレですネ。ライオンの檻でも、他のライオンと一緒に入ったら怖くないってやつですよね」

「イヤ、意味違うし。それにある意味もつと怖いから」

チーの意味不明の答えに、桁也が引きつった声でツッコむ。

「何ですか。ライオンの檻と一緒に入るのは、子供のライオンですよ」

「イヤ、意味なしてねーし！ 子供だったら、数があっても怖えーし！」

チーが懲りずにまた発言すると、総兵がちよつとキレ気味にツッコんだ。沙夜が溜息をつき、衣翠が立ち止まる洋司を促しながら本のページを開き始める。

「意味はなしてますよ」

「何だよ」

「だって一緒に入るのは、もともと檻に入ってるライオンの赤ちゃんですもん」

「何でだよ！！ つーかメスだったんだ！？ 子供いたんだ！」

深まっっていくチーの不思議ワールドの瀬戸際でツッコみ続ける総兵。そろそろ飽きてきた術也が、ペンライトで天井を照らし始める。

「つーか、何で子供引き離してんだよ！ 可哀想だなオイ！」

「自分が危険な目にあいたくないからです。子供連れてるなら、襲い掛かってこないでしょ」

「腹黒！ お前、腹黒！」

と、まあこんな感じで、一向は美術室に到着した。

「豊アアア！ 心配したんですよ！」

衣翠の万能鍵により開けられた美術室に入るやいなや、チーはしゅばっ！ と中に入って、自分の忘れ物である水谷豊のCDを手に取り、両手で頭の上に掲げてキヤーキヤーとはしゃぎまくりだした。そのチーをやれやれ、と5人は傍観する。

「【カリフォルニア・コネクション】、まだ299回しか聴いてなかったんですよー！ 帰ったら歌って下さいねー、豊アア！」

「オイ、さつさと来ねーと閉じ込めんど、その異次元娘」

総兵が業を煮やしてチーに呼びかけるも、豊と自分だけの世界に浸り込んでしまったチーは、ぴょんぴょんと飛び跳ねて返事をしない。総兵の手が、机上の椅子に伸ばされた。

「記念すべき300回目ですから、ちゃんと左手ポケットに入れて歌ってくださいねー！！」

「さつさと来いや、このアマアア!!」

夜中の美術室を、椅子が舞った。

「次は音楽室ですネ」

美術室での忘れ物回収を終えた一行は、音楽室へと歩を進め始めていた。美術室の反対側にある音楽室に行くには、職員室を通過しなければならぬのだが。

一行は、職員室前の廊下に差し掛かる直前で立ち止まっていた。

「やっぱり怖いなー、噂が流れてると特に」

洋司の小さい声に、5人は一斉に頷いた。

どこの学校にもある「七不思議」と称された怪談話。この朱城高校でも7まではいかないが、「七不思議」っぽい感じの噂が流れているのである。その一つが「職員室の亡霊教師」。

昔。各地の学校にまだ宿直制度があったように、昔の朱城高校でも宿直が行われていた時。高校に空巣が侵入し、それを見つけた宿直の教師がその空巣に殺されて、今もその亡霊が校内をほつつき歩いている。という事らしいのだが。

しかも、亡霊が宿直をするために最初に現れる所が、この職員室前の廊下といわれているのである。

これにはさすがのD組連中も、恐れているというわけであった。

「どーする？ 回り道して行くか？」

「えー、イヤですよ。私は早く帰らないと、豊がこの中で私を待つ

てるんですから」

チーが大真面目な顔つきで、CDを見つめながら総兵に言う。あーそうかよ、と総兵は気だるげな声で答える。

「仕方ねー。行くしかねーな」

「じゃあ誰が最初に行くか、決めようか」

祐也が纏めるようにそう言って、一行は円になってじゃーんけーんぽん、とジャンケンを始めた。

「……」

ジャンケンの結果、衣翠 総兵 チー 沙夜 洋司 祐也の順番となった一行は、恐れおののきながら歩を進め始めた。と、その時衣翠と祐也の握ったペンライトの細い明かりが、ちかちかと点滅し始める。

「ん……」

「アレ？ 何で点め……」

祐也の言葉が終わる前に、二人のペンライトの光の寿命が終わった。辺りが一瞬にして漆黒の闇に包まれる。

「キャ …… 真っ暗じゃないですか!」

「オイ、人の耳元で騒ぐな!」

「……ちゃんと電池入れ替えてきたのに」

「言ってる場合じゃないイイイイ!!」

「祐也イイ! 俺を見放すなよオオオ!」

「分かった! 見放さないから、髪引つ張るなよ!!」

パニック状態の5人の中で、衣翠は電池の切れたペンライトを握ったまま、透き通った碧眼をまつすぐ廊下の奥へと向けた。焦げ茶色の丸渕眼鏡の奥で、その瞳は静謐に澄み渡り、肩の高さで切り揃えられた蒼い髪が揺れている。

そんな衣翠の様子に、やっと少しだけパニックから立ち直った沙夜は、彼女の目線を辿った。そして、凍りついた。

二人の目線の先では、少しだけ黄色みを帯びた白い光がちらちらと、暗闇に浮かんでいた。

「きいやあああああ！！ 人魂ああああ！！」

「祐也いいいい！！ 死ぬ！！ コレ絶対死ぬ！ 俺死ぬならお前の隣で散るから！！」

「静かに！」

チーと洋司の絶叫を、凜然とした衣翠の声が静止させた。珍しく語気を荒げて、廊下の奥を睨みつける衣翠はゆっくりと、その海のような瞳を閉じた。

彼女がそうしている間にも、白い光はゆっくりと一行の方へと近づいていく。チーは総兵の背中にしがみつき、洋司は祐也の首にかじりつく。

その時、衣翠の瞳がすつと開いた。

「……うっかりしてた。精神集中するべきだった」

ふーっと珊瑚色の唇から、衣翠が息を吐き出すと、白い光は一行のすぐ前でぴたりと止まった。

「何やってんの、お前等？」

聴きなれた、とぼけたような声が聞こえて、は？ え？ へ？
と全員が顔を上げると。

懐中電灯を持った榊と、その後ろに鳴が立っていた。

「……は？ え？ 何でこんなトコいんだよ？」
「こっちのセリフだっつの」

総兵がやや放心気味に開口すると、榊はいつもの表情を崩さずに
びしゃりと言った。

「なっちゃんも、榊せんせーと何でこんなトコいんですか。いろん
な意味でびっくりしましたヨ」

「いや、私もいろいろとびっくりさせられたんだけど……」

先ほどまで恐怖に絶叫していたとは思えないぐらい、けろつとし
た態度のチーに、鳴は内心引き気味に答えた。沙夜が安堵の溜息を
つき、洋司の手がへにゃへにゃと脱力する。

「いや……僕達、忘れ物取りにきたんですけど」

「ああ……。どーせお前等、筆箱とかコンパスとか色々忘れてきた
んだろ」

「え？ 何で忘れ物の内容知ってんの」

洋司がそう言つと、鳴が職員室を指差して答えた。

「今日の放課後、色々届けられましたからね。職員室」

「マジか」

沙夜が真顔で開口する。

「つつー事は、俺達の忘れ物は職員室つて事か……？」
「ま、そーいう事だな」

榊が締め括るように言うと同時に、沙夜が職員室の扉に左足で強烈なメガトンキックをお見舞いして、扉をぶっ飛ばした。ガシヤ

ン！と、職員室の窓ガラスが打ち碎ける音がして、夜の静寂をぶった切る。沙夜はそのまま入室すると、中から声を上げた。
「あー、あつたあつた。来てみー」

沙夜の言葉に、さっきまで亡霊に怯えていた連中はわらわらと職員室に入ってゆき、おー、あつたあつたと無感動的な声を上げている。

「……結構脆くなってたんですね」
「はあ……」

ポケットに手を突っ込んだまま飄々と開口する榊に、鳴は呟くように答えた。

「おーし、全員回収したか？」

ハイ、とバカ共は挙手すると、そろそろと職員室から出てきた。

それぞれ、自分の忘れ物を手にしている。

「それじゃ、帰りましょーか」

チーの言葉で、昇降口へと歩を進める一行。が、衣翠がぴたりと足を止めて後ろを振り返った。沙夜が気づいて、衣翠を呼ぶ。

「何やってんの？ 衣翠」

「……何か聞こえる」

ぼそつと呟いた衣翠の言葉に、全員ぴたりと足を止めた。洋司がちょっと上ずった声で開口する。

「何って……何が聞こえんの？」

「足音と……獣が唸るよう……」

「イヤイヤイヤイヤ、それないって」

衣翠の言葉を、洋司が半狂乱状態の言葉で掻き消す。衣翠を除く女性陣の顔色がすーっと蒼くなり、一瞬にして廊下は耳鳴りのするような静寂に飲み込まれる。

「オイ衣翠。どこから聞こえる？」

いつもの声で榊は衣翠に尋ねると、彼女はすつと右方向に建つ、校舎第二棟の二階に指先を向けた。

「第2棟の、2階廊下から聞こえる……」

全員がぱつと右を向くと。

第2棟の2階廊下の窓に、巨大な熊がサツシに手をかけてこちらを見ていた。

次の瞬間。一行（榊と衣翠を除く）は電光石火のはやさで、しゃがみ込んだ。

「え？ 何？ 今の何？」

「え？ 何か見ましたか？ バカじゃないんですか洋司君、バカも休み休み言ってくださいよ」

「今の幻だね。幻でしょ。そーでしょ鳴」
「いや、幻ですよ。国語の教科書に出てくるお話が現実化してる訳じゃあるまいし」

しゃがみ込んだまま、早口で先ほど見た光景を打ち消そうとする、チー、洋司、沙夜、鳴。

榊は無口のまま壁に頭を打ち付けて、総兵は必死でそれを止めている。かなり不釣合いな絵である。

そんな地獄絵図とはかけ離れているものの色々と恐ろしい事になっている中、衣翠と榊は第2棟の2階の窓を見据え続けた。と
その時、ぼろりと衣翠が開く。

「階段降りてきてる……こっちに来てるのかも」

衣翠の開口から0・1秒後。衣翠、榊、鳴を除いた全員はまたもや電光石火のはやさで立ち上がった。

「嫌ああああああ！ 死にたくないです！ 肝臓食べられたくないです！！」

「鳴ううう！？ 何でまだ座ってんのオオお前！！」

「……腰抜けて、動けないんです……」

「ええええええええ！？」

ギャーギャーと騒ぐ連中をよそに、衣翠はもう一度開口した。額を冷や汗が一筋伝う。

「1階に降りた……間違いない。こっちに向かってきてる」

「オイ行くぞ」

さすがにまずいと感じたのか、榊は衣翠を促すと、鳴を抱え上げて、先に逃げたチー達の後を追った。

「ちょっと待てエエエエ！！ コレ、何か前と同じトコじゃね！？」

総兵の絶叫が夜空に響き渡った。

屋上に吹きつさらす冷たい風にモロ当たりながら、一行は以前と同じように屋上にいた。以前と同じといっても、今回は入り口の上に全員で固まっているのだが。

榊は煙草をふかしながら、またいつもの調子で総兵に話しかける。

「元はといえば、お前等が道順間違えたのがいけねーんだろっが」

そう。先に逃亡した連中は、何を血迷ったか何故かD組教室のあ
る三階へと逃げてしまい、袋小路に追い詰められて屋上へ　と
いうルートを辿ってしまったという訳である。

「仕方ないじゃないですか。ついつつかり、朝、教室に向かうよう
な気分になっちゃったんですから」

「熊の亡霊に追いかけれながら、教室に向かうかフツ？」

チーのしれっとした言葉に、キレ気味の総兵がツッコむ。

そうしている間にも、熊の亡霊はガンッ！！　ガンッ！！　と扉
を叩き続けている。鳴がいるからには、むやみにそれぞれの【特異
体質】を使用する事もできない連中は、熊に安易に見つからないよ
うにしているのだが……。

総兵は鳴に聞こえないように声を潜めると、榊の方を向いた。

「どーせ、沙夜が鳴の目の前で【怪力】使っちゃったんだ。別にい
いだろ」

榊はもう一度煙を吐き出して、煙草の火を地面に押し付けた。ポ
ーっとしたその灰色の眼が細まり、やがて閉じられるとゆっくりと
口が開く。

「神阪先生、くれぐれもご内密にしてくださいよ」

榊の言葉と同時に下に飛び降りた沙夜は、熊に叩かれている扉の
前に立って、右手の拳を左手にぶつけて正面を睨みつけた。

それを見て、鳴を除く全員が耳栓を取り出して耳を塞いだ。

「ハイなっちゃん。ちゃんとしといた方がいいですよ」

チーがポケットからもう一組耳栓を取り出すと、鳴に差し出した。何が何だか分からぬまま、耳栓で耳を塞ぐ鳴。

「よし、用意できたぞ」

「OK」

沙夜は榊に返事すると、ゆっくりと扉から遠ざかって助走の体勢をとった。

それと同時に、耳を劈く音を立てて扉が破壊された。濛々と立ち込める土煙の向こう側で巨大な影が揺らめき、沙夜は強く地面を蹴って走り出した。

「いま昇天させたらアアアア!」

沙夜の拳が熊の胸にめり込むと同時に、凄まじい音と共に白い衝撃波が真っ直ぐに一閃し、チー達の上がっている所の真下に穴が貫通した。しゅうしゅうと音を立てて、煙が上がる穴の縁を見下ろして鳴は絶句する。

榊が耳栓を外しながら、いつものようにポーっとした声で言った。

「……この事はホント秘密にしておいて下さいよ?」

「あー疲れたっ」

洋司があくびをしながら、あっけらかんと言った。

「イヤ、一番疲れたの俺だから」

その隣で榊がハンドルを切りながら答える。

「っていうか榊せんせー、何で夜中になっちゃんとあんなトコいたんですかー？」

チーが豊のCDを見つめながら榊に話しかける。

「イヤ……お前等と一緒にで、忘れ物取り行こうと思ったたら偶然会ったんだよ。だから一緒に行っただけだ」

いつものように飄々と言う榊の言葉を聞いて、最後席の沙夜がやれやれといった感じで呟く。

「鳴も気の毒に……」

「……別にいいんじゃない……お姫様抱っこしてもらったんだから本を読みながら呟く衣翠。

「つーか、何で俺がお前等を送ってかなきゃなんねーの？」

「担任だからです」

「いっつも副流煙吸わされてるから」

「終電無くなったから」

次々と出てくる言い訳を締め括るように、最後に衣翠が開口した。

「……鳴を抱っこした事、学校中に言いふらすわよ……」

「お前等、絶対癌になる時は道連れにすっからな」

第五話 パイプ椅子に指を挟んだら案外痛い

「総兵君、何で私達こんなトコにいなきゃなんないんですか」
「知るか」

昼休み。

チー、総兵、沙夜、衣翠、洋司、桁也達、いつものD組連中は「生徒指導室」に呼び出されていた。あぐらをかいたり体育座りでありウムの床に座っている連中を、冷やかな眼で見ているのは、秋山、矢部の教師二人。その隣では吉山先生と真辺先生が困惑した表情で、連中を見つめている。

「オイ矢部。何で俺等こんなトコ呼び出されてんだ」

「何が矢部だ。ちゃんと先生つける」

「オイ秋山。何で私達こんなトコ呼び出されてるんですか」

秋山と矢部をナメ腐っている総兵とチーの隣では、沙夜が平気でケータイをいじり、衣翠が本を読み、洋司がリーブ21の事について桁也と真辺先生とで白熱した議論をしている。本当に、問題児の連中である。

秋山は、可愛い容姿をしたチーの口から出た予想外の言葉に若干引いたように顔をひきつらせた。

「ち……千歳さん。教師を呼ぶ時はちゃんと……」

「何が千歳だコラ。ちゃんと苗字で呼べや、このセクハラ教師が」

真顔で毒を吐くチー。いつも使われている敬語が停止状態なのは、かなりキレているのだろう、総兵の顔を冷や汗が伝う。これ以上チーがキレたら、【特異体質】の暴走で辺りが時空の擦れで溢れ返っ

てしまう。

ここに呼び出された事についての反省の色が少しも見えない連中に、とうとう業を煮やした矢部が、折り畳み式の長机の天板を叩いた。

「少しは反省しろ！ お前達だろ、更衣室に隠しカメラなんか仕掛けたのは……！」

本日早朝。

女性教員用の更衣室で、2つの隠しカメラを吉山先生が発見。一時、大騒ぎとなったのである。

犯人搜索の結果、D組の連中に疑いが掛かり、D組の中でも特に性質の悪いこの6人が呼ばれて、今ここにいるのだが……。

「だからさつきから言っただろ。俺達じゃねーって」

「そーですよ。何で私達が、先生達の更衣室にカメラなんか仕掛けなきゃなんないんですか」

少しだけ冷静さと敬語口調を取り戻したチーと総兵が反論すると、矢部はキザったらしく前髪を掻きあげて、どうだか、と言い捨てた。それを見て、チーのライトブルーの瞳がすつと冷めていく。

「いちいちキザったらしーんだよ。その前髪、ちまる ちゃん風にカットしてやるうか」

またもや真顔で吐かれた毒の打撃に矢部が衝撃を受けたのと同様に、がらがらと戸が開いて榊が入ってきた。いつものようにポーっ

とした表情で、部屋の片隅に座っている教え子達の方を見やる。

「お前等さあ………どんだけ日頃の行い悪いんだよ」

榊は低い声でそう言うと、後ろ手に戸を閉めて矢部の方を向いた。灰色の眠たげな眼が怪訝そうに細まる。

「……ホントにこいつ等がやったんですか？」

榊の言葉を聞いて、矢部が鼻を鳴らして連中を睨んだ。開口しない矢部の代わりに、秋山が眼鏡を押し上げながら答える。

「D組以外こんな事しないでしよう。生徒以外に外部から簡単には侵入できませんしね」

「まあ………たしかにそうでしょうけど」

「イヤ反論しろよ!」

秋山の言い分に対する榊の言葉に、連中（衣翠を除く）はユニゾンでツッコむ。ツッコまれた榊は、いつもの表情を崩さないまま連中に眼を向けた。

「元はといえば、お前等の素行がわりーからこんな事になったんだろーが」

「素行が悪いっていうんですか！ 私達は豊に誓って、悪いことはしてません!」

「イヤ、何で豊に誓わなきゃなんねーんだよ」

「豊はカツコイイからです」

「ああ、よく分かった。お前の脳が腐ってる事がよく分かった」

総兵がチーにツッコみ終わったその時、また、がらがらと戸が開

いて今度は鳴が顔を覗かせた。

「あのー……犯人見つかりましたけど？」

「え？」

「は？」

鈍い音と共に、総兵・チー・沙夜にそれぞれ鳩尾にミドルキックを喰らわせられた秋山と矢部が、日光が差し込む生徒指導室を舞った。

「で、こいつ等が犯人……ってワケか」

改めて生徒指導室。

真犯人の1年B組の男子生徒3人がパイプ椅子に座らされ、先ほどの攻撃で瀕死状態となった矢部と秋山の代わりに、説教役を榊と鳴が担う事になった……のはいいが。

その二人の背後で殺人オーラを漂わせるD組連中が、B組の男子生徒を震撼させているのであった。

「で……何で隠しカメラなんか仕掛けたんだ？」

「榊せんせい、ちよっと待ってください!!!」

本題を切り出した榊にストップをかけたのは、他ならぬ敬語キラのチー。榊は面倒臭そうに振り返ると、灰色の眼で怪訝そうにチ

ーを捉えた。

「何である人達は真犯人のくせしてパイプ椅子なんですか!! 私達は床で膝を抱えたり、あぐらかいたりして座っていたというのに!」

「……たかが説教する時の待遇の良し悪しでギヤーギヤー言うな」「ギヤーギヤー言いますよ! この人達のせい、3日4日冷えが止まなくなったらどうしてくれるんですか!!」

「三十路間際の未婚女か、お前は。っていうかそれ、光浦のセリフだろ」

反論しまくるチーを総兵がたしなめたのを確かめて、榊はもう一度B組の生徒の方に向き直った。鳴が咎めるように3人を見つめる。

「……何で隠しカメラなんか」

「鳴の着替えの盗撮だろ、大方」

怒った仔犬のようにばたばたと暴れるチーの制服の襟首を掴んだまま、あっさりと言い放つ総兵。チーが鼻息も荒々しく、3人を睨む。

「お前等アア!! 吉山先生ナメンなよ! 若い頃はナイスバディだぞコノヤロオオ! 今はベージユのパンツだけど、昔はティーバツクじゃアア!」

「お前、いい加減黙っとけ」

ばしつと榊に後頭部を引っ叩かれたチー。その隣で赤面する鳴の華奢な肩に、沙夜がいたわるように手を置く。

「けどさ、盗撮って違法行為だろ? やっていいとも思ってるの

「？」

頭の後ろに両手を当てて、珍しく正当的な事を言う洋司。その隣では桁也が同意するように頷く。B組の生徒は顔を伏せて、膝の上に置かれた拳に力を込めた。

「っーか、何で盗撮しようなんて思ったんだ？」

榊がそう言うと、一番右端の生徒が顔を上げて真っ直ぐに鳴の方を向いた。茶色に染めた髪の毛のタラシで有名だったその男子生徒は、噛み締めた唇を開いて喋り始めた。

「……俺は先生が好きだったんだよ。いろんな女と付き合ってきたけど、やっぱり先生が一番だったんだ」

「……鳴に百戦錬磨気取りしたかっただけでしょ……」

本のページを捲りながら呟いた衣翠の言葉に、男子生徒は浅はかな心の内を言い当てられて、気まずそうに口を噤んだ。それと同時に真ん中の男子生徒が顔を上げる。

「俺も同じだよ！好きな女の着替えとか見たいのが男だろ！」

「開き直るなボケ」

榊にぴしゃりと言われて一旦勢いを失くしたものの、真ん中の男子生徒はなおも声を張り上げた。

「あんただってそうだろ！」

「俺が心底惚れたのは、松岡修造だけだ」

「あー、松岡さんですか。いいですよね松岡さん、テニスについて熱く語ってる時とか特に」

けるりとテンションが平常に戻ったチーが、制服のリボンを結び直しながら呟く。

「でもやつぱ伊達公子ですよ」

「バツカお前。修造ナメんなよ」

「公子ナメんなよ」

「イヤいい加減にしるよ、お前等」

修造と公子の事について白熱しかけた榊とチーの会話を、総兵が若干キレ気味に止める。

「ま、いーわ」

修造と公子の事についての会話を制止させられた榊は、三人に向き直ると、纏めるように言った。

「何も映ってなかったしな。今度からはこんなくだらねー事すんなよ」

「俺達に濡れ衣着せんなよ」

「なっちゃんストーキングすんなよ」

「慰謝料払えよ」

「焼きそばパン買ってこいよ」

「……飯おこれよ……」

「お前等いい加減にしるよ」

榊はエスカレーターしていく教え子達の要求にツッコむと、煙草を啜って、ライターに火を点けた。

「昼休み潰れちゃいましたねー」

「全くだな」

「五時限目数学だし、サボれサボれ」

廊下で聞き捨てならん事を口走っている連中の後ろでは、榊と鳴が並んで歩いていた。鳴は緊張したまま顔を赤らめて、少し俯いた状態で歩いている。

その隣でいつものようにポーっとした顔で歩いている榊は、煙草を啜えたままで、ずっと連中の方を見ている。何というか、メツチヤ齒痒いシーン。

「ま。でも、良かったですね」

「へ？」

いきなり開口した榊に、鳴は驚いたように顔を上げた。ポケットに手をつっ込んだまま、榊は目線を鳴に向けた。灰色の瞳がおもむろに鳴を捉える。

「撮られてたら女性にとっちゃ辛い事ですよ」

「は、はあ……………」

緊張で上手く話せない鳴を不思議そうに見つめながら、榊はまた前を向いた。前方では沙夜が洋司の脳天をかち割っている。

「…………俺自身、安心したし」

「…………え!？」

鳴が驚いて立ち止まると、数歩先を歩いていた榊も立ち止まって、くるりと後ろを振り返った。その顔が、意味深に笑っている。

「え……ちょっと、今なんて言いました？」

「さ。行きましょっか」

榊はそれだけ言ってさっさと前を向くと、すたすたと早足で去っていく。鳴は慌ててその後を追った。

「田原先生！ さっきなんて言ったんですかー!？」

「知りませんよ、そんなん」

榊は楽しそうにそう言って、前方の連中の方へと歩いていく。チーがぐるりと振り返って、かくりといつものように小首を傾げた。

第六話 (前編) 酔い止めは車に乗る前に飲め

土曜日、真夜中。

ミッドナイトブルーの帳が降りた空の下で、朱城高校は休日の夜を迎えていた。冷たい風が校庭を吹き荒び、気温がぐっと下がっている。

そんな中、朱城高校正門前に互いに寄り添いあつた人影が見えた。

「さーむいですね」

「鳴の野郎……夜中に呼び出しやがって」

「総兵君、なっちゃんは野郎じゃないですよ。ニューハーフに近い女の人デス」

「ニューハーフを知らねー、脳の腐った奴に言われたくないんだがな」

「つーか何で正門前!? 寒すぎない!」

「忘れ物取りに来た時と一緒じゃない……」

お約束というか何というか、校門前に固まっていた人影はまたしてもいつものD組連中だった。手袋をしたりマフラーを巻いたりして寒さを凌いでいるものの、吹き荒ぶ1月の冷たい風に身を震わせている。

風にさらさらとなびくチーの銀色がかった桃髪の間隙から、丸いフォルムのレトロなヘッドホンが覗き、漏れた音が微かに風に乗って響く。衣翠は黒い革の手袋を嵌めた手で、本のページを捲りながら呟いた。

「……チーも好きね。今度は北酒場……?」

「そーですよ。北島三郎いい声してますからね」

色素があるのかと思ってしまいうくらい、透き通るように白くすべ
すべとした頬を寒さで紅潮させて、チーが空を見つめたまま呟く。

「浮気してる訳じゃありませんよ。豊はこれくらいでピーピーいう
ような人じゃないですから」

「何お前。豊の愛人気取りか、愛人が二股かけていいと思ってん
のか、関係を表す構図がメチャクチャじゃねーか。三角どころじゃね
ーよ、ヘキサゴンだよ」

「ピタゴラスの定理で収めてみせますよ」

「バカだな、やっぱこいつバカだよ」

ポケとツツコミにより吐き出された息が白く濁り、瞬時に儂く掻
き消えてゆく。沙夜は目の覚めるようなビビットレッドのマフラー
を口元まで押し上げて、冬の凜とした空気を突き抜けて地球に光を
届ける星々に目をやった。

その後ろで洋司が、自分には長すぎるターコイズブルーのマフラ
ーを裕也の首にかけて、厚い生地ニット帽を目深に被り、PSP
でモンスターハンターに余念がない。

「っしや、討伐成功オオ!!!」

洋司がぐつとガッツポーズを決める。それを見て、チーがヘッド
ホンを外しながら洋司に問いかけた。

「洋司君、何討伐したんですか？ピカチュウですか？」

「ポケットついてないから。モンスターの上にポケットついてない
から」

裕也が無表情の、抑揚の無い声で冷静にツツコむ。

「ポケットの無いモンスターなんてモンスターじゃないですよ。カ
ンガルーですよ」

「モンスターの意味履き違えてるなコレ」

「んだコラ。フクロオオカミナメんなよ」

「もうカンガルーじゃねーじゃねーか。お前脳味噌どこの次元に落
としてきたんだ？ 正直に言ってみろ」

真昼間だろうが夜中だろうが、留まる事をカセットテープと共に
捨ててきたチーの発言にツッコむ総兵と術也。

とその時。衣翠がぱたん、と本を閉じた。沙夜の紫色の瞳が衣翠
の方を向き、静謐な泉の水面のような衣翠の瞳がすっと閉じられる。

「……後ろ」

衣翠の声に全員が後ろを振り向くと、錆びた校門の隙間から、校
庭を横切って歩いてくる長身の人影が見えた。あ、と呟いてチーが
口を開ける。

「榊せんせいだ」

「おー、やっと来たか。あの腐れ教師」

総兵が低い声でそう言うと、校門の前で足を止めた榊は怪訝そう
な顔で、連中を灰色の眼で見回した。

「……何の用だ愚民共。こんな夜中に呼び出しやがって」

「嗚に呼び出されたんだよ。お前も巻き添えにしたかったから」

「……秋山と矢部呼んどけ」

「あんな神経質野郎とキザ野郎、呼びたくないですよ」

チーの丁寧な口調と荒れた単語を織り交ぜた言葉に、怪訝そうな表情を崩さぬまま、柵は校門の門かんにきを外した。鈍い金属音を立てて、ゆっくりと重い扉が開かれていく。

「……で呼び出した本人は？」

「まだ来てませんよ」

「つーか何で俺達呼び出されたの？」

「分かんない」

沙夜がマフラーを下げて答える。柵はコートのポケットに手を突っ込んだまま、右手だけで器用に煙草のパッケージとライターを取り出すと、パッケージから突き出た煙草を啜くえて着火した。

また本を開いて読書していた衣翠は、髑どくろ體のボタンで留められたネックウォーマーをぐいつと引き上げながらページを捲る。

「……噂をすれば、ってやつね……」

え？ は？ 何が？ と言いながら全員が衣翠の方を向くと、衣翠はまた本のページを捲りながら左を指差した。

「遅れてすいません!!」

衣翠の指先で、息を切らした鳴が肩を激しく上下させて立っていた。

「あ、いた」

「で？ 何で呼び出したの？」

車内。

榊が運転している後ろで、沙夜がシートの端に座っている鳴に問いかけた。総兵が榊を呼んでいた事を知らなかった鳴は、緊張がちがちになっている。

「っーか……何でこーなってんだよ！」

助手席で、【犬】の姿になってチーに抱きかかえられた総兵が怒声を上げた。チーがよーしよしよし、と頭を撫でると、殺気立った眼でチーを睨む。

「仕方ねーだろが。洋司が酔っちまっただから」

最後席では洋司がシートの3分の2を陣取って寝転び、桁也が冷たい水の入ったペットボトルで、少しでも酔いを和らげるために水を飲ませている。

そこで【炎を操る】、【犬に変化できる】総兵の特異体質を利用して、何とか全員車内に落ち着いた訳なのだが。

「降ろせ!!! 下座ろ!!!」

「ダメですよー。だって総兵君抱っこしてるとあつたかいんですもん」

「暖房効いてんだろーが!! オメーは脳味噌にまで暖房効いてんのか! だから腐ってんだろ、ぜってーそうだろ!」

「ギャーギャーうるせーぞ、お前等」

榊はそう言いながら、窓を少しだけ開けて外に煙を吐き出した。煙と共に甘い匂いが微かに香る。

「せんせーの煙草、煙たいけどいい匂いしますよね。外国のやつですかー?」

「……ああ、ブラックデビルっつーんだよ」

「っーかその匂いで酔ったんじゃねーの? 洋司がよ」

刺々しい声の総兵に返事をしないまま、榊は少しだけ首を後ろに回して鳴の方を向いた。

「で? こんな夜中にどーしたんです」

「アレですか、部屋に変態でもいて、なっちゃん待ってたんですか?」

「そんなことだったら、即通報しますよ……」

「……じゃー何なのさあ……」

洋司がゾンビのような声で呻くように言う。鳴は少し躊躇った後、口元に手を当てた。

「……マンションの階段の入り口で、変な人にばったり会った後、追いかけられたんですよ……」

「あ、変態だソレ」

「俗にいうストーカーだな」

「なっちゃん、キレーですからねー」

沙夜、総兵、チーがそれぞれの思いを口にしたのち、榊が開口する。

「その後どうなったんです？」

「……200メートルぐらい追いかけて、石につまずいて転びかけたんですけど……。その石投げたらどっか当たったみたいで、その間にタクシー捕まえて紫賀^{しが}君達に連絡取りました」

「紫賀？ 誰ですかソレ」

「俺の苗字も忘れたか、異次元娘」

総兵が低い声で呟く。

「……で、私達に捕まえてほしいと……」

衣翠がページに目を落としたまま開口すると、嗚は真っ直ぐ前を向いた。

「お願いです！ このままじゃ、死んでも一人じゃ帰れません！！」

「一人で帰れねーなら、誰かと帰りゃいんじゃないかね？」

「榊せんせー、なっちゃんと一緒に帰ってあげてくださいヨ」

チーの冗談に、瞬時に真っ赤になる嗚。

「ち、違いますよ！！ そーゆう意味じゃ……」

「冗談、冗談ですよ」

「どーせヒマだろお前等」

榊がチーの冗談にも動じずに、いつものポーっとしたような声で

続ける。

「……いっちょ大暴れすつか」

「っしやー!!」

どっと歓声が沸き立った車内で、洋司が死にかけの声で呟いた。

「……警察通報すりゃよかったじゃん」

第七話 (後編) 銃刀法とかに逆らって生きていけると思っ

「さびー……」

午前1時。

茶色い煉瓦を積み重ねたような壁面の、マンションの入り口付近に停められた車の中で、チーと総兵は最後席に身を屈めるようにして座り、窓から外の様子を窺っていた。

エンジンの切れた車内は冷え切って、ブラックデビルの微かな甘い香りが漂っている。チーは総兵の肩に顎を乗せて、総兵はあくらをかいて深くシートに座ったまま、二人ともじつと外を睨んでいる。

「ホントにまた来るんでしょかね……」

「……さあな。オイ、もうすぐ時間だ。もうちよいカーテン引くぞ」

総兵は低い声で呟くように言うと、半分ほど閉められていたグレーのカーテンを引っ張った。3分の2をカーテンに閉ざされ、二人は顔を寄せ合って狭い面積から外を窺う。

「あ、なっちゃん来ましたよ」

チーの言葉と同時に、マンションの階段から鳴が降りてきた。いつもゴムで纏めて肩に垂らしている鳶色の髪が背中に流れて、緩やかにウエーブし、艶やかに光っている。

緊張と恐怖に硬くなっただけはいるが、夜の闇の中でも映え立つ鳴の美しい顔立ちに、チーは小さく口笛を吹いた。

と、その時。携帯の着信音が鳴り響いて、総兵が素早く上着のポケットに手をつ込み、通話ボタンを押して耳に携帯を押し当てた。

チーも携帯に耳を押し当て、神妙な顔つきになる。

「オイ……聞こえるか総兵」

「おー。よく聞こえるぜ」

榊の低い声に、総兵はいつものトーンで答えた。チーが透き通ったライトブルーの瞳をぐりぐりと回して、強く耳を押し当ててくる。総兵はチーの頭を引っ叩くと、深く溜息をついた。

「……ホントにやんのか？」

「ここまで来ちまったからには、やるしかねーだろが」

「まあ……確かにそーだが」

一行が立てた計画は次のようなものだった。

寒空の下で鳴が帰ってくるのをじっと待っていたような奴（変態）である。まだ懲りずに入り口付近を張って、鳴が来るのを待っているかもしれない、という事になった。

そこで榊はチーと総兵を車内に残し、沙夜と洋司を車の影に隠れさせ、衣翠と桁也に変態野郎の感知をさせるといふ事にしたのであった。

【半径10キロ以内を見渡す】 【透視】 の特異体質を持つ桁也と、衣翠の特異体質を組み合わせれば、エサ 鳴に誘き出された変態野郎を遠くからでも探し出す事ができると踏んだ榊は、沙野と洋司が隠れている車の左側に1人で隠れて、総兵と会話しているのだった。

「……つーか、何で俺達は車なんだよ？」

「物騒なもん持ち歩いてるかもしれないねーんだ。もし俺達の誰かが怪我をすりゃー、千歳の特異体質で傷を前の状態に戻せるだろうがな……。万が一の事も有り得る。その時はお前、犬になって助け呼び

行けよ」

「……事つまり、俺達は万が一の時の補助役って訳か」

柁は相変わらずボーっとした声で、まーそうなるな、と言ったのが聞こえると、総兵は怪訝そうな顔になった。

「でもどーせなら、二列目の方がいいんじゃないの？　すぐに外に出られるし……」

「二列目に座ってみろ、どーせ早まってすぐに出てきちまうのがオチだ」

あっさりと言われて、くっと言葉を失った総兵とチー。柁はま、と纏めるように呟く。

「請け負ったからにはちゃんとやらなきゃならんでしょうが」

「……鳴の前では紳士的だなオイ」

総兵が怪訝そうに言つと、電話はぶつっ！　と一方的に切られた。

「……絶対せんせー、できちゃった結婚とかで結婚しそうですよね」

「っーかあいつ、結婚する意志あんのか？」

トーンを下げた会話する二人。

「ん？　誰ですかねアレ」

チーが窓の外を指差す。総兵がさつと外を窺うと、チーの指差した方向に男が立っていた。背は170弱程度だろうか。グレーのウインドブレーカーに、黒のジャージを穿いており、黒縁の眼鏡をかけたその顔に卑しい笑みが張り付いている。

「あからさまに怪しいなオイ」

「それに見て下さいよアレ。上に着てるウィンドブレーカーはアシックスなのに、下のジャージはカッパーですよ。どーせなら同じスポーツブランドのやつ着ればいいのに。ちなみに私はプーマが好きです」

「いや、そっちなんだお前。つーか見てみるよ、あの変態チツクな粘着質の笑み。秋山の性格でもあそこまで粘度は高くないぞ。ちなみに俺はナイキが好きです」

二人がディープな会話を続けていると、その粘着笑み男はコンバースのスニーカーを履いた足でゆっくりと歩を進め始めた。鳴の顔が、恐怖で硬直する。

「えー……！！ クソがアアあのヤロー……何で紳せんせー達出てこないんですか!?!」

「さあな……でもホントやべーぞ」

焦り出す二人の目前で、粘着笑み男は鳴の方へと着実に歩み寄っていく。鳴は怯えて少しずつ後ずさりし、その度に男の笑みは粘度を増していく。

後数メートル、男の笑みの粘度が最高潮に達した時。

足が、止まった。

「……足元はいつも注意しとけよ」

ガラス越しに聞き慣れた声が出て、チーと総兵が僅かに目を丸くすると、車の陰から榊が立ち上がった。男の足元の水たまりが凍っている。榊が自らの特異体質を使って、男を足止めたのであった。榊の背後で衣翠と桁也が立ち上がり、鳴の方へと駆け寄る。

「動くな!!」

男は足を踏み出したままの、ちょうどリカちゃん人形が無理やり「私、今歩いてるのよ」的なセリフを勝手にアテレコされてしまうようなポーズで、鋭い声を発した。

衣翠と祐也の足が止まって、榊が眉をひそめる。

男は粘度と湿度の高い笑みを顔に貼り付けたまま、ウインドブレーカーのポケットから拳銃を取り出した。黒光りする異様なフォルムが、戦慄を覚えさせる。

「言っとくけどなあ……モデルガンじゃねーんだぞ」

男が卑屈っぽい声で言うと、榊は怪訝そうにポケットに手を突っ込む。

「いや、モデルガンとか言われたらこっちもテンション下がるんだけど……。期待させといてそれかよ、みたいな」

「いや、そっちかいイイイ!!」

祐也が、受験を控えてピリピリしている中3が家族に「うるっさい!」と怒鳴るくらいのトーンでツッコむ。鳴が困惑したような表情になり、衣翠は無表情で軽く流す。

「デメエエ、ぶっ放すぞ!」

榊の言葉が気に食わなかったのか、男は両手で拳銃を榊に向けて構えた。小刻みに震えて狙いがまともに定まらない銃口を、榊の灰色の眼が捉える。

「……言つとくけどさあ……、間違つても神阪先生には当てんなよ。あいつ等には当ててもいいけど」
「イヤ、それ無しでしょオオ！！ オイそこの粘着変態野郎！ 目の前の奴、確実に殺れよコラアアア！！」
「何が粘着変態野郎だクソガキイ！！ お前等一人ずつ殺つてやるからな！」

榊が原因でキレ出した二人の眼鏡共は、ギャーギャーと口論している。榊はパッケージから煙草を引き抜くと、火を点けて一服し始めた。衣翠も本を開いて読書を始める。

鳴だけがえー……、という感じでこのやり取りを眺めていると、男の背後で小柄な人影が動いた。

「死ねエエ変態野郎オオ！！」

男が振り向くと、男の目に地を這うように姿勢を低く保って駆けてくる金髪の少女が映った。左手は固く握り締められ、白んでいるのが確認できる。

が、直線的な攻撃はカウンターを狙いやすい。男は素早く沙夜に銃口を向け、一発ぶつ放した。派手な銃声が響き、放たれた銃弾が奇跡的に真つ直ぐ沙夜の方へと飛んでいく。

「沙夜っ！！」

衣翠が短く叫ぶと、沙夜は紫色の瞳を驚きに見開いて反射的に顔を右に逸らした。その刹那、銃弾が沙夜の白い頬を掠めて、血液と共に一筋の紅い線が刻まれる。

男はにたりと笑って、銃口を上へ掲げた。榊は苦虫を噛み潰したような顔で男を睨み、衣翠がぐつと齒軋りする。

「クソ……オイ沙夜、大丈夫か!？」

洋司が近くの車の陰から飛び出して、地面に片膝をついて肩で息をしている沙夜に駆け寄る。頬を深紅の血が伝い、ぽたぽたと地面に落ちるのを見て、洋司は息を呑んだ。

「ガキ1人に本気でぶっ放しやがって……」

榊が怒りを孕んだ低い声で呟くと、男は哄笑を漏らしながら鳴の方を向いた。

「……お前等が邪魔するからさ。せーっかく、寒空の下待ってたのになぁ……」

「鳴はあんたなんか相手にしない」

衣翠が鋭く言い放つと、男は険しい顔になって榊に銃口を向けた。

「ちよつと先生……」

「さつさと逃げなさいよ！ 何カッコつけてんの!!」

榊也の言葉が終わる前に、衣翠が言い放つ。滅多に喋らない彼女の言動に、榊也と鳴は驚いて衣翠の方を見る。

深く澄んだ瞳は、ナイフのように鋭い眼光を発している。

「……バカ言え。逃げられるかっつもの」

榊は男から視線を逸らさずに、低い声で答えた。衣翠が強く歯軋りするのを見て、男はまた粘度と湿度の高い笑みを浮かべた。

「クク……心配すんな。すぐにお前も送ってやるさ」

派手な銃声が響いた。

いや、響かなかった。

「アレ？」

静寂を破ったのは、男の素っ頓狂な声だった。

「……やっべ、入ってねーし」

男がそう呟いた直後、男の後頭部に沙夜のドロップキックが直撃した。

ドシャアアッ！ と派手に顔面を地面にぶつけて、撃沈する男を見下ろして、榊は溜息をついた。

「こんなに長く引つ張られるんなら、モデルガンの方が良かったんじゃないね？」

「そーですね」

桁也が眼鏡を拭きながら呟く。その横で衣翠がいつもの表情で男を冷ややかな眼で見つめている。

「大丈夫っすか？ 神阪先生」

榊がそう言いながら鳴の方に歩み寄っていくと、男ががばつと起き上がった。その手には、鋭く尖ったダガーナイフが握られている。男は凍った水たまりに留めつけられた靴を脱ぎ捨てると、榊に向かって突進していく。

「榊!!」

沙夜が叫ぶと同時に、榊はゆっくり振り向いた。

「榊先生!!」

鳴の悲鳴が響く。

「刃渡り5.5センチ以上、15センチ未満の柄を付けて用いる左右均整の形状をした、諸刃の鋼質性の刃物で先端部が著しく鋭いもの……」

ダガーナイフの刃を、左手で掴んだまま榊が呟く。ぼたぼたと垂れる血を見つめながら、男は目を見開いて、信じられないと言いたげな表情で絶句した。

「銃刀法改正知らねーのか？ ま、お前の場合、拳銃持つてる時点で銃刀法なんざ知ったこつちゃねーだろうがな。こいつも、もう日本じゃ所持禁止なんだよ」

榊は淡々とした声でそう言いながら、右手を強く握り締めた。

「あばよ変態野郎」

鈍い音が響いた。

「痛つつ……」

変態野郎を車道の真ん中に置き去りにした後、連中は鳴の部屋に上がって眠りこけていた。何もしてない総兵とチーまで寝ているのは何故か分からないが。

「……大丈夫ですか？」

ぱっくりと皮膚が裂けた左手に包帯を巻きながら、鳴が榊に問いかける。榊は痛みに若干顔を顰^{しか}めながら、ちらりと寝こけている連

中を見下ろす。

「はは……やっぱり無茶するもんじゃないですね」

榊がそう言つと、鳴はむっとしたような顔でぐいっと強く包帯の端を引つ張つた。

「いまだだ!! 何するんすか!?!」

「……利き手じゃなくて良かったですね」

「別に右手怪我しても大丈夫ですよ。俺、両利きだし」

飄々^{ひょうひょう}と言い放つ榊に、鳴は先ほどの表情を崩さないまま包帯を巻き続ける。

「……けど、ちょっと驚きましたね」

「何がですか?」

刺々しい声で鳴が受け答えると、榊は自分の右手を見つめながら呟く。

「下の名前で呼ばれたの初めてでしたから」

「なっ!?!」

鳴が瞬時に赤くなって、焦ってまた包帯の端を強く引つ張つた。

「いまだだ!!」

「しっ、しめんなさい!」

「教え子の前でイチャついてんじゃねーよ……」

「ホントそーですよ。絶対せんせー、やり逃げとか日常茶飯事で
すよ」

「関係なくね？」

そのやり取りを聞きながら、総兵とチーが小さい声で囁き合った。

第八話 ドラマの再放送の録り溜って、家族に消されたらムカつくよね

午前9時30分。

普通の高校生なら学校に向いて、授業を受けている時間帯。一応高校生ではあるD組のバカ共も、いつもなら授業を受けているはずなのだが。

いつもなら、の話というだけである。

「何ですかねコレは。私達、門の神様にでも好かれてるんですかね」
「知るかよ」

D組連中は、西洋風の黒く巨大な門の前で、その奥に見える巨大な豪邸を見上げていた。その豪邸と広大な庭の周りをぐるりと取り囲む、丁寧に煉瓦を積み上げて造られた重厚な塀までもが一緒になつて、静謐せいひつではあるものの凄まじい威圧感を放っている。

門の前で豪邸を見上げるチー、総兵、沙夜、衣翠、洋司、祐也の6人組。その中に、見慣れない少年が1人混じりこんでいた。身長170近くのその少年は、黒みがかつた栗色の髪に、北欧の血筋が入っているのか明るい緑色の瞳をしている。

「おい清冴しみづ。コレどーやって入んだよ」

「そこ。インターホン押して」

清冴と呼ばれた少年は門の脇に据え付けられた、ハイテクノロジ的な雰囲気ふんいきのインターホンを指差した。チーがいち早く気づいて、じつとインターホンを見つめている。

「……何やってんのチー。早く押してよ」

「……いや、何かコレ。インターホン押したら、ここのモニターか

らさっちゃん出てきそうですよね」

「誰の事？ つーか、お前やっぱバカ？」

真顔でモニターを凝視するチーに、清冴と衣翠を除く4人が同時に溜息をつく。冷たい風が吹き荒んで、7人の色とりどりの髪を一斉に揺らし、一層「あー、やっちゃんたな」感を募らせた。

「……つーかさっちゃんて誰？」

「知らないんですか洋司君。貞子ですよ、さーだーこ。私、さっちゃんとは前世からの親友だったんですよコノヤロー」

「そうか。俺としてはお前を前世に送り返して、俺の人生を高校入学までに巻き戻したいんだがな」

チーと総兵が、微妙に本音の混じりあう静かな言い争いを始める。段々静かにヒートアップしていく口喧嘩に、2人を除くD組連中は目を据わらせてきた。

「あーホラ！ 何か揺らいだ！ ザーって一瞬だけ聞こえましたよ！ さっちゃんー！！」

「オイ沙夜。門ぶっ壊せ、このバカに後で直させりゃいいんだから」

「……万大路。そこからはさっちゃんは出てこねーぞ。出てくるのはお婆さんだけだ、午後3時33分33秒ぴったりに出てくる」

「それ3時ババだろーがアアアア！！」

総兵がブチギレたのと同時に、沙夜の拳が門のど真ん中にぶち当たって吹っ飛んだ。

「いやはや……びつくりしましたぞい……。やはり、若いというのはいいですよ、ふおっふお……」

浄ノ宮邸。

アンタ色素無くなっちゃった的な髪をした、三途の川に片足を突っ込んだような感じの、浄ノ宮家の執事に連れられながら連中は長い廊下を歩いていった。

何故、今日連中が、世界有数の経済力を誇る「浄ノ宮コンツェルン」総帥の邸宅で廊下を歩いているかということ。

「浄ノ宮コンツェルン」次期総帥候補である、現総帥の一人娘 浄ノ宮・ヴィルダ・凧生なまが、D組の生徒であるからで。

最近ぱったりと学校に来なくなった凧生に、会いに行く為であった。

「執事さん。凧生ちゃん、何で学校来なくなっただんですかー？」

「……お嬢様は、御自分の部屋に閉じこもっております……。私もこの頃、ろくに会話をなさっておりません」

小刻みに震える声で哀れげに話す執事を見て、総兵は頭を掻いた。凧生が入学当初からの問題児で、【特異体質】を使って自分達以上に大暴れしていたのを思い出したのだった。沙夜も怪訝そうに紫色の瞳を細めて、洋司は祐也の肩に顎を寄せたまま面倒臭そうに顔をしかめている。

「大事おおいとにならなきゃいいんだがな……」

総兵がぼつりと呟くと同時に、ガラスの碎ける音と、女性の甲高

い悲鳴が連中の耳を劈いた。

「おじよー様！ お待ち下さいイイー！！」

シックな色合いのメイド服を着たメイドが、大きく開け広げられた木製の豪華な扉の影から飛び出して、声を張り上げた。

「知らん！！ 父ちゃんに言いたきや言やいやん！」

九州訛りの少女の声が廊下の奥から響いて、メイドに返ってくる。あわわ、と慌てふためくメイドの後ろで、やっと駆けつけたD組連中がスライディングで急停止した。総兵に背負われた執事が、あたふたと背中から降りる。

「なっ……なっ……何……っ！！ 何がっ、あ、あつたのですじゃっ!? お……落ちっ……、落合監督……着きなさいっ……！！」
「ジイさんんん！！ アンタが最初に落ち着けエエエー！！」

ぜえぜえと肩で息をしながら、総兵が力の限りツッコむ。

メイドは慌てながらも、ジイさんもとい、執事の息を落ち着かせながら話し始めた。

「お嬢様がドラマの再放送を録画していたのですが、一番良い所で

電源が切れてしまつて……」

「ドラマの再放送が原因でこのザマかよ」

祐也が低い声で淡々とツツコむ。

「とにかく、お嬢様を探さなければ……!」

4階に続く階段の踊り場に、荒い息をつく小さな人影が見えた。オレンジ色に艶めく髪を、左寄りの後頭部で横結びにしたその少女。凧生は、金色に輝く大きな瞳を四階への階段へ向けた。

「凧生!」

下から響いた声に凧生はぴくりと反応して、赤いタータンチェックのジャンパースカートを着た身体を屈めて、手すりから下方を見下ろした。

3階へと続く階段の踊り場で、清冴が声を張り上げていた。凧生をそれを聞いて、弾かれたように手すりから離れると、足軽に4階への階段が上がっていった。

「清冴君、見えましたか!？」

「ああ。ちらつと顔だけ見えた」

清冴は上を見上げたまま、チーに答える。チーの後から全員が追いつき、顔に汗を浮かばせて息が上がっている。

「……この家でのかくれんぼは、凧生の方が断然有利だな……」

総兵がそう呟いて後ろを振り向くと、祐也と衣翠はとっくに精神集中を始めていた。2人とも目を閉じて、祐也は視覚を、衣翠は聴覚を極限まで研ぎ澄ます。

「……屋根裏部屋かな？……天窓から明かりが漏れてて……、ベツドとか調度品が揃えられてる」

「……音は、4階廊下の突き当たりから数えて3部屋目の天井から「よじっ……」

総兵がそう叫ぶと同時に、全員3階への階段を駆け上がって、4階へと続く階段に足を踏み入れた。

「はあっ……はあっ……」

屋根裏部屋。

凧生は壁に背中を凭^{もた}れて、肩で荒い息をついていた。天窓からの明るい光が凧生を照らして、オレンジ色の髪がきらきらと輝く。

しばらくそうして息を整えていると、床下　下の部屋から、扉を開け放ったような音がくぐもって聞こえてきた。凧生の金色に輝く瞳がぐっと細まり、ちっと舌打ちの音が小さく響く。

「何でここが……」

凧生が悔しげに呟くと、下の部屋に幾人かの足音と声が響いてきた。何かを確かめているかのように、ぱたぱたと音を立てながら部屋をぐるぐると回っているようだ。凧生は意を決したようにわざとらしく大きな足音を立てながら、今し方自分が使った出入り口を思いつき開けっ放した。

「私に構わんで！」

「私に構わんで！」

いきなり部屋の天井の隅が開いたと思ったら、凧生が顔を出して怒鳴った。一瞬の出来事に怯んだ連中は、天井を見上げたまま、は？ という表情になった。

「凧生ちゃん、忍者にでもなっただんですか？」

「うるっさいー！」

凧生は声高にそう叫ぶと同時に、連中の周りを半球状の水色のシールドが取り囲んだ。【鋼鉄以上の強度を持つシールドを張る】凧生の特異体質によって造り出されたシールドを見て、沙夜は舌打ちした。

ばたん！ と手荒く扉が閉められると、数秒後にガラスの碎ける音が響いた。

「沙夜ちゃん……コレ壊せますか!？」

「……できることはできるだろうけど」

沙夜は右手で左の拳を包み込むと、バキバキと指の骨を鳴らした。

「……連発はできないから、よく覚えときなよ」

そう言つと同時に、沙夜の左の拳がシールドにめり込んで、打ち砕けた。

「待ちやがれエエエ!!」

浄ノ宮邸の屋根上。

屋根から近くの背の高い広葉樹に、身軽に飛び移つた凧生を追つて、犬になつた総兵とチーも屋根から広葉樹へと飛び移っていた。既に次の樹に飛び移つて、リスのように身軽に動き回る凧生の後ろ姿を目で追いながら、チーは太い枝に飛び乗ると、額ひたいにかかる銀色がかった桃髪を掻きあげた。

「全つ然追いつきませんね……」

「猿みてーな奴だな……」

「けど総兵君、何で犬になつてんですか」

「こつちの方が足が速はえーからだ」

2人がそう話していると、前を行く凧生の足がぴたりと止まった。葉の影から、もがくように暴れ回る姿が垣間見える。

「何があつたんだ……!!?」

「紫賀！ 万大路！」

二人が後ろを振り向くと、清冴が屋根から広葉樹を渡ってこちらへ向かってきていた。清冴は二人が立っている枝の少し下の枝で足を止めると、ざらついた感触の幹に手を当てた。

「そーですか……！ 清冴君の特異体質……！！」

チーが納得したように、ライトブルーの瞳をぐりぐりと動かす。そう、【植物を意のままに操る】清冴の特異体質によって、凧生は足止めされているのであった。

「言ってる場合じゃねえ。さっさと追いつかねーと」

清冴はそう言うと、枝を蹴って次の樹へと飛び移った。それに倣なまらって、チーと総兵も枝を蹴って飛び上がった。

「離せエエ！ わたしにこんな事してタダで済むと思っとなのかアア！！」

腕や足に絡みつく細い枝を引きちぎろうともがく凧生を、ズボンのポケットに突っ込んで清冴は深く溜息をついた。後から総兵とチーが追いつき、凧生の金色の瞳がずっと不機嫌そうに細まる。

「ったく、てこずらせやがって……」

「凧生ちゃんホントに忍者みたいでしたねー」

二人がそう言うと同時に、チーの目前に球状のシールドが張られた。シールドに弾かれて、細い枝に立っていたチーはバランスを崩す。

「きゃあああああー！」

「チーっ！」

絶叫をたなびかせて落下していくチーを、人間の姿に戻った総兵がすんでのところ受止め止める。凧生は、はっ！と見下すように短く息を吐くと、自分の身体の周りにもシールドを張った。外界とシールド内部で遮断された枝はぶつりと切られ、腕や足に絡みついた枝を素早く叩き落とすと凧生はシールドを解いて、また逃げ出した。

それでも焦る事無く、清冴はポケットから手を出した。しっかりと握られた手を開くと、手中には、植物の種のような小さな粒が幾粒が見えた。清冴はそれを遠ざかっていく凧生の小さな背中に向けて、投げつける。

「……………っ！？ 何なんコレ!？」

凧生に向かって飛んでいった種は、瞬時に発芽して太い蔓つるになり、凧生の足に絡みついた。腕を伸ばして何とか枝を掴んだ凧生は、蔓の呪縛から逃れようとして足をめちやくちに動かした。途端に蔓がぶちつと切れて、思いっきりバランスを崩した凧生は、チーと同じようにして落下した。左足を太い枝に打ちつけ、激痛が走る。

「……………浄ノ宮家のお嬢さんにも困ったモンだな」

凧生が固く閉ざした眼を開けると、清冴が前を向いたまま息も乱さずに地面に着地していた。抱き上げられた状態のまま、丸20秒思考停止する凧生。

「……たかがドラマの再放送だろーがよ。んなもん、金が腐る程あるだからブルーレイで買えブルーレイで」
「……普通DVDやる」

「へー……それで？」

朱城高校。

先ほどまで浄ノ宮邸で凧生を追いかけていた連中は、保健室で無表情のまま、柵に事情説明していた。樹上から落下したチーは総兵に受け止めてもらい無事だったものの、総兵は尖った枝にこめかみを切られて流血。沙夜はシールドを破壊した時の衝撃で左手骨折。洋司・祐也・衣翠は勢いで屋上に上がったものの、下に降りられなくなり、割れた天窓から飛び降りてガラスでいろんな部位を切っただけで軽傷。

当の凧生がしばらく学校に来てなかったのは、ただ単にメンド臭

かったのと一緒に、ファーマーと喧嘩して一人でいさせてほしかったというわけで。

骨折り損のくたびれ儲けてやつで。

「……ご苦労だったな、お前等」

「ご苦労どころじゃねーよ。アレだよ、コレじゃ。アルマゲドンで宇宙に飛ばされた宇宙飛行士がやってきたのと同等の任務こなしてきたようなもんじゃねーか」

「アルマゲドン知らない人は分かんないと思う」

総兵と洋司が脱力気味に会話をしている脇で、沙夜が骨折した左手を包帯で吊ったまま榊を睨んだ。

「……っーか、何で担任のあんたが行かなかったの？」

「……アレだ。タイタニック観てたから」

「何ほざいてるんですか。タイタニックじゃなくて、なっちゃんをやらしい目で観てたんでしょ。私達は怪我してまで任務こなしてきたのに」

「任務じゃねーから。後お前は怪我してねーだろが」

淡々と教え子達の棘とげが生えた主張をかわす榊。榊也がひびの入った眼鏡を外して、頬に絆創膏を貼った衣翠が本のページを捲る。

「……でもこれで一件落着なんじゃないですか」

「ま、榊也の言うとおりだな」

「ふっざけんじゃねーですよ。いつか絶対、なっちゃんレイプしたって噂流してやりますから、覚悟しとけよコノヤロー」

「やってみる、バカ娘」

「っーか、何で鳴限定？」

第九話 女性諸君 ホワイトデーの時は簡単に下心をみせてはならない

「総兵君」

「あ？」

朝。

陽光が清々しいD組教室。自分の椅子に座って読書をしていた総兵が不機嫌そうな顔で顔を上げると、チーがこれまた不機嫌そうな顔で机に手をつけていた。

「今日、何日ですか」

「3月14日」

「アレだな、ホワイトデーだな」

榊が窓辺で煙草に火をつけながら呟くと同時に、チーががっつと総兵の制服の襟首を掴んだ。沙夜が溜め息をついてケータイをぱこんと閉じ、衣翠が本のページを捲る。

「総兵君の嘘つきー！！ ホワイトデー、豊のコンサート連れてつてくれるって言ったじゃないですかー！！」

「言つてねーし！ 余計な事言っくんじゃねーよ、この腐れ教師が！」

ギヤーギヤーと騒ぐ2人をよそに、沙夜は衣翠の机に浅く座って、煙草を吸っている榊の方を向いた。

「……っーか、アンタがホワイトデー知ってたのに驚きだわ」

「バレンタインであんな目に毎年遭ってたなら、反対の日ぐらい覚えるわ」

「……今年もかい」

バレンタインデーのチョコのお返しをする日として存在するホワイトデー当日。

愛情目的、友情目的、お返し目的のチョコが男女間で交錯したバレンタインデーから1ヶ月後。ホワイトデーでも、バレンタインには及ばないものの、ホワイトではないブラックな策略が繰り広げられているらしいが……。

それは、朱城高校でも変わりはないのである。

「分かった！ 帰りにゲーセンで500円分人形とつてやる！」

「ホントですかー！？ 嘘ついたら背後から鈍器で殴打しますよ？」

「嘘じゃなーし。つーか、冗談に聞こえなーんだよ、お前の場合。さっそく金槌用意してんじゃなーよ」

喜々とした表情で金槌を右手に握ったチーに、総兵が無表情でツッコむ。やっと二人の喧嘩が収拾し、平静さを取り戻したD組教室が、いつも騒ぎが起きているD組。これだけでは終わらない訳である。

「そつえばさー先生？ なっちゃんへのお返し、もうしたんですかー？」

「は？」

チーの無邪気な声色での発言に連中が一斉に反応して、榊の方を向いた。当の榊は後ろを向いたまま煙を吐くと、そのままの姿勢で一時停止した。

「どーなんですか、先生？」

「……何の事だ」

「とぼけたってムダですよ？」

ウキキ、と悪魔的な笑いを噛み殺しているチー。もう一度煙草の煙を吐き出した後、後ろを振り返った榊は、不機嫌そうにチーを睨んだ。

「……何で知ってんの、お前」

「甘い甘い」

チーはそう言うと、銀色がかった桃色のポニーテールを揺らして自信たつぷりに腕を組んだ。

「躊躇ためらってるなっちゃんのケツ叩いたの、誰だと思ってんですか」

「へー……」

榊は興味無さそうにそう言うと、洋司が何か思い出したような表情で、黒いニット帽を親指で押し上げた。

「そーいや榊、ジッポライターだったっけ？」

「へー。鳴からのバレンタインプレゼントって訳」

「いい事ですねー。生徒からは何も受け取ってなかったくせして」

皮肉っぽい沙夜と祐也の言葉に、榊は眉一つ動かさずに飄々とした態度で、煙草を灰皿に押しつけた。

それを見て口元に手を当てて忍び笑いしているチーを一瞥すると、総兵はぽつりと呟いた。

「ま……お前のチョコ、爆弾みたいだったけどな」

「へ？」

総兵の言葉に反応してチーが真顔になると、総兵はこめかみを掻きながらまた開口した。

「何か、不必要にココアパウダー多かつたし」

「えー！？ 何ですか！ 普通に作ったのに！」

「イヤ、お前の場合さ、あらゆる面において分量多かつたぞ。やけに甘かつたしな」

総兵が開口する度に、焦りながら反論しまくるチーを見て、5人の脳内に「あ、バカだこいつ」という声が響き渡った。

「あ、最後コレがイイです」

夕方。

多くの人々が行き交うゲーセンで、チーは一台のユーフォーキヤツチャーの前で立ち止まった。もうすでに、腕には様々な大きさや形のぬいぐるみが抱きかかえられている。総兵は溜め息をつくとき、チーの後ろでユーフォーキヤツチャーの内部を覗き込んだ。

内部にはたくさんのぬいぐるみが積まれていたが、チーの細く白人差し指が指し示すのは、四角い身体をお互い寄り添い合わせた、

白と黒のブタのぬいぐるみだった。

「何だお前。言っとくけどアレは本物じゃねーぞ。取っても食えねーからな」

「鹿児島県でサツマイモ食べて育ったブタさんじゃありませんよー。モノクロブルーっていうんです。知らないんですか？」

「どっちにしろ、ブタだろが。寝ぼけて食うなよ、腸閉塞ちようへいそくになつておっ死ちね」

「残念でした。小学5年生の時に猪のぬいぐるみ食べて経験済みですから」

「イヤ、経験あんのかよ」

1000円硬貨を3枚投入して、アームを器用に動かしながら総兵がモノクロブルーのペアドールを取ると、取りだし口の前にしゃがみ込んでいたチーが手を伸ばして、ペアドールを抱き上げた。

「ありがとうございます、総兵君！」

「……500円分つたる。1000円以上オーバーしてんぞオメー」

「ま、ま。いーじゃないですか」

チーは満足げにそう言うと、ペアドールを抱きかかえ、他のぬいぐるみが落ちていないのを確かめると、出口に向かつて駆け出した。総兵は溜め息をつくとき、チーが落としたカピバラさんを拾い上げ、後を追った。

「何でこんなにぴったり寄り添ってんでしょーね？」

「当たり前だろ。糸でしつかり縫い合わせられてんだから」

総兵がそう言うと、手前を歩いていたチーは後ろを振り返って不満そうに眼を細めた。チーの頭上に乗ったコリラックマも、チーと同じように目を細めて、大福にかぶりついている。

「……ロマンチックじゃないデスネ」

「何でブタにロマンチックを求めなきゃなんねーんだ」

チーは、外国人のように大袈裟に肩をすくめると、また前を向いてすたすた歩き出した。着実に歩を進めながらも、器用にバランスを取って身体中に乗つけたぬいぐるみを落とさないようにしながら、モノクロブーのペアドールを持ち上げる。

「ヨーロッパじゃブタは幸せの象徴なんですよー。二人はラブラブなんですー」

「ブタがねえ……」

チーは寄り添い合った、反対色のブー2匹をライトブルーの瞳で見つめたまま、ふーっと息を吐いた。

「総兵君は黒ですねー。心が黒いから」

「どっちかというとお前が黒だろ。腹黒さなら誰にも負けてねーし」

「白の座は私のもんですよ。オセロやチェスやる時だって、いつも白派ですもんねー。パンツだってそうですもんねー」

「イヤ、今お前さ、女子高生が言っちゃいけない事言ったぞ」

二人は意味不明な事を言い合いながら、夕日が当たる中を帰っていった。

「アレ？」

職員室。

鳴は、自分のデスクに回収したプリントの山を置いて、パウダーブルーのデスクチェアに置かれた小さな箱を手を取った。すべすべとした綺麗な包み紙に包装され、光沢のあるチェリーピンクのリボンが結ばれたその箱は、小ささの割にはずしりと重みがある。

「……………何だろ？」

鳴は箱をデスクに置いて、リボンを解き、包み紙を丁寧に開いてみた。そして包み紙の中が覗くと、鳴は驚いたように眼を丸くして、両手で口を覆った。

「誰……………！？」

端に金文字で「TIFFANY」と書かれた透明なガラスケースの中には、ガラスと同じくして、限りなく透明な香水壺が入っていた。

第九話 女性諸君 ホワイトデーの時は簡単に下心をみせてはならない（後書き）

パソコンが大破して連載ストップ。何の前触れもなくストップしてしまい、申し訳ありませんでした。

第十話 ケンタッキーのおじさんはいつもみんなを見てる

「おはよー」

朝。がらがらと音を立てて教室後方の戸が開いて、沙夜が姿を現した。いつものように目つきが悪く、いつものようにスカートの丈はチー達と比べて若干長い。

が、そんないつものような出で立ちの沙夜と比べて、D組教室はいつものようではなかった。

「おおおはよーじゃねーよバカヤロー。きききききき今日、何の日だと思っただコラアア」

「? 何の話?」

やけに震える声でやけに態度のでかい言葉の洋司は、自分の机の下で、机のスチール製の脚を関節が白くなるほど握りしめていた。顔面蒼白で、紺色のニット帽の左サイドに留められた3つのピンバツジが触れ合って、かちかちと音を立てている。

その他の生徒も洋司と同じ感じで机の下にちぢこまり、顔面蒼白で、ある者は念仏を唱え、ある者は身代わり人形的な物を机の脚と一緒に握りしめている。

机の下で震えていないのは衣翠と榊、総兵にたった今入室した沙夜だけで、後の全員はがたがたと震えて顔面蒼白なのであった。

「今日が何の日かって?」

「バババババカヤロー、テメ。きききき昨日の惨事を忘れたとは言わせねーぞ、コルアア」

「……は?」

洋司の震える声が発する言葉に心当たりの無い沙夜は、絶妙な力
ーブを描く金色の眉をぴくりと動かして、首を傾げた。それを見た
榊が、新しい煙草にジツポライターで火を点け、煙を窓の外に吐き
出しながら答える。

「千歳の髪がバツサリいつた件だよ」

「……しかもかなりね……」

榊と衣翠の補足に、沙夜は一通り紫色の瞳をぐりぐりと回すと、
ああ、と瞳の動きを止めた。

「……洋司のせいで起こった事件か……」

「俺のせいじゃねエエエエ！ 不慮の事故だバカヤロオオオ！！」

時を遡る事、つい昨日さくじつ。

昼休みのD組教室で、翌日、D組の一部を除く全員が机の下でち
ぢこまってしまふ程の事件が勃発したのであった。

1時15分、教室にはチー・総兵を除くD組連中と他男子連中が
いて、洋司が他男子連中と【特異体質】を使って悪ノリして遊んで
いる最中だった。

【空気を圧縮させる】特異体質を持つ洋司は、その能力ちからを使って、
空気を固めて圧縮させて作ったブーメランを振り回して遊んでおり、
他男子連中がそれをキャッチしたりしていた訳で、お前等中学生じ
やね的な目線を沙夜達から受けていたのである。

最初の頃は理科準備室から失敬してきたマツチを何本か擦って、
出てきた煙を集めて圧縮し、目に見える白いブーメランを作って遊
んでいたのだが、他男子1名が投げたのが沙夜の後頭部に軽くヒツ

トし、キレた沙夜に握り潰されて粉々になり、二酸化炭素へと還っていった訳で。

もう一度マツチを擦るのも面倒な洋司達は、もう普通に空気を圧縮させて、目に見えないブーメランで遊んでいたのだが。今度は桁也のこめかみにブチ当たり、流血。その血が沙夜の前髪に付着して

乱闘に突入。

乱闘が教室後方で繰り広げられる中、衣翠が桁也を保健室に連れていこうとして、2人が席を立つたと同時に教室前方のドアが開き、プリントを持たされたチーと榊が入室したのだが。

誤爆のブーメランがチーに向かい、ぱっさりと髪を切られてしまったのである。

「元はといえばあんたがわるいんでしょ」

「ふふふ不慮の事故だっつってんだろーが。ココココノヤロー」

震える身体とは裏腹に、態度がでかい言葉に沙夜は溜め息をつく
と、自分の机の上に鞆を置いた。榊が煙を吐き出しながら、いつものポーっとした声で開口する。

「……ま、登校してきただけでも表彰モンだな」

「……けど、髪なんて放つときゃまた伸びるのに、そんなワーワー騒ぐほどのことじゃ」

机の下から立ち上がった桁也が言い終わらない内に、同じくして机の下から立ち上がった凧生が、桁也の後頭部にドロップキックをかました。あだっ、と地味な悲鳴が上がる。

「分かつとらん！ 全然分かつとらん！ コイツ、この先絶対モテんよ！ アレ、ケンタツキーのおじさんよりモテンよ！！！」
「んだとコラアア！ カーネル・サンダースさんよりかはモテる自信あるわボケエエエ！！！」

ケンタツキーのおじさんに失礼極まりない祐也の発言の後、机の下から立ち上がるうとして頭を打った清冴が、打った部位を左手で抑えたまま右手を挙手した。

「先生。ケンタツキーのおじさんって90歳まで生きたらしいですよ。長生きですよ。それと本名、カーネル・サンダースっていうんですよ。知ってました？」

「うん、おじさん長生きだな。つーか本名、さっき祐也が言わなかつたっけ？」

榊が低い声でそう言うと、今度は、祐也にアッパーをかましたばかりの凧生が勢い良く挙手した。

「先生！ ケンタツキーのおじさんって日本に3回来てんですよ！ あとメガネは、度が入ってないんで！」

「いや、だからさ。何でケンタツキーのおじさんについての豆知識飛び交ってんの？ 俺、今ケンタツキーのおじさんについて調べてんだ的な事言ったか？ お前らも何か分かったら協力してくれとか言った？」

榊があくまでも冷静にツッコみ続ける傍ら、沙夜が自分の髪をつまんで、その毛先を見つめたままぼつりと呟く。

「髪は女の命、とも言っしねえ……」

「そーやる？ やーけお前はモテンのよメガ也」

「何だメガ也つて！？ 衿也とメガネ合体させてんじゃねーよ！」

眼鏡を外して吠えるメガ也もとい衿也。衣翠はぱたりと本を閉じると、丸縁眼鏡の奥の、美妙なブルーに澄んだ瞳を榊の方に向けた。

「……ケンタツキーつて名前は、アメリカのケンタツキー州からきてるみたいよ……」

「イヤお前もかよ。もういいし、おじさんについての豆知識は。つかもつ、おじさんの豆知識でもねーよ」

凧生と清冴の無意識の悪ノリに影響された衣翠のボケを榊は軽くスル。して、がりがり頭を掻いた。このままでは收拾がつかなくなる。

だんだん騒ぎが大きくなってきた教室で、総兵は深く溜め息をついた。

「オイそこの犬。何溜め息ついてんだ、コノヤロー」

「何が犬だ、不良教師。ケンタツキーのおじさんについては俺も何も知らねーぞ」

「いや、もうケンタツキーのおじさんはいいつつてんだろ。お前まで悪ノリに便乗すんのやめてくんない」

榊がボーとした表情を少し怪訝そうにすると、イライラしたように煙草をパッケージから引き抜くと、火を点けた。沙夜が不機嫌そうに右手で口を覆うと、綺麗な眉を思い切りしかめた。

「……このままじゃ、教室は異次元空間突入よ」

「千歳が怒ってないのを祈るだけだな」

榊が煙を吐き出すと、清冴が何か思いついたような顔をして、ぽんと掌を拳で打った。

「じゃあ護摩焚きますか」

「お前どこに行こうとしてる訳？ そいつのは密室でやれ、誰にも迷惑がかからない所で儂く死んでゆけ」

清冴の留まる事を知らない意味不明の言葉に、さすがに苛立ちを隠せなくなってきた榊のツツコミが光る。

どンドン秩序を失ってゆくD組教室内の会話はさらにディープさを増し、ついには机の下で震撼していた洋司までもが会話に参加していく。

「イヤ、もう護摩壇作るのメンドクせーから、キャンプファイヤー的な様式で良くね？」

もうやつつけ感全開の榊が、灰皿に煙草を押しつけながら言う。

「っーか護摩壇とキャンプファイヤーの違いってアレだろ、木組みで供え物焼くか焼かないかだろ」

洋司が、少し冷静さを取り戻してから言う。

「っっーか、お前のせいでこんな事なっとなのやるー！？ とやかく言えた義理やないやん！！」

風生がかりかりした甲高い声で洋司に向かって叫ぶ。

「だーから俺のせいじゃねーって言ってんだろーがアア！」

「元はといえばお前のせいだろ」

「うるせー不良教師！！ お前がチーにプリント持たせたのだって、ちよつとは責任あんだろーが！！」

「アレはホワイトデーの時にふざけすぎた罰だ」

「どんだけホワイトデー引っ張ってんだよコイツ！！」

「ケンタツキーのおじさんネタよりかはマシだボケ」

ギヤーギヤーと言い争いが始まったD組教室。もちろん、自分達の教室に足音が近づいてきているのも聞こえていない訳で。

「おはよーございますー！！」

「パン！！」と大きく教室後方の戸が開いて、チーが姿を現した。途端に、D組全員が硬直する。

恐怖ではなく、驚愕に。

「？ どーかしたんですか？ 驚いたような顔して」

ライトブルーの瞳をまん丸にして、いつものように小首をかくりと傾げた。

チーの髪は、いつものように黒いリボンでポニーテールにされていた。が、かなり小さい。それでもぴよこん、と毛先が跳ねて、小さくはあるもののちゃんとポニーテールになっている。

チーは一息置いて、ああ、と小さく呟いた。

「髪の毛なら気にしてませんよ。別に、切るのがメンドくさかっただけだし」

あっけらかんとチーが言うと同時に、榊と衣翠を除くD組共は、
ひろこんばい疲労困憊と言った感じではたりと、机に倒れ伏した。

第十一話 チョコ食べすぎたら鼻血出るっていつけど、アレ迷信だよ

「な、何だと!? 貴様、まさかそれはっ!」

「今さら気づいたか! 行くぜ! 必殺」

「さつきからガタガタ棒読みうるせえええ!」

午後十一時。

部屋の片隅でジャンプを大声で朗読していたチーの後頭部に、テレビのリモコンがぶち当たった。もちろん投げたのは総兵である。先程から非常にうるさかったのだが、ついに堪忍袋の緒が切れたようだ。後頭部を抑えてうずくまっているチーに、総兵は布団を蹴散らして怒鳴った。

「人ん家で夜中に漫画朗読しやがって……、っーか棒読みするくらいなら喋んな!」

「うう〜…… 詳しい。別にいいじゃないですか、ゆっくりジャンプ読む機会なんてあんまり無いんですもん! ついでに言わせてもらえば、音読するのが楽しいんですもん! 棒読みだからこそ見えなくなる、キャラクターの神髄が私のハートを熱くさせるんです!」
「お前のハートが熱くなるうが煮え滾るうが、こっちとしてはどうでもいいわ!」

後頭部を押さえたまま、ライトブルーの瞳に涙を浮かべて口答えするチー。それに対して、ツツコミ続ける総兵。何故、このシチュエーションが夜中に、総兵の家で繰り返されているかと言つと……話は夕方に遡る。

夕方。

チーと総兵が一緒に帰っていたら、チーの方が家の鍵を無くしたとかほざきだし、色々と鞆や服のポケットやらを探ってみたのだが、どこに落としたかは分からずじまいになってしまったのである。本日は水曜日で、明日も明後日も学校に行かなければならないという訳で、今晚、総兵の家で一夜を過ごす事になったのだが……。

いつもD組内のトラブルメーカーの核として常に働き続け、外でもその才能をいかんなく発揮しているチーが総兵の家にいるという事は、大騒動が巻き起こらない可能性はゼロという感じなのである。かくして、D組の核弾頭こと万大路千歳は、こうやって総兵と戦っている訳なのだが。

「つーか何で俺ん家？ 沙夜の家でも衣翠の家でも行きゃいいだろが」

「衣翠ちゃん家は遠いし、沙夜ちゃん家は冴子ちゃんに迷惑かける訳にはいかないからです」

「そういうトコだけ、しっかり筋通してんじゃねーよ」

総兵は気だるげにそう言うと、がりがりと頭を掻いた。明日は寝不足になりかねない。チーはそんな総兵の心中を知る事も無く、今度はジャンプのバックナンバーの山を漁っていた。下の方に積み残したバックナンバーを取ろうとして、上のバックナンバーを崩しても、気に留めた風も無く、ぺらぺらとページを捲ってお目当ての漫画を探している。どこにいようと、何をしようが、常々マイペースなのは表彰ものといってもいい位に等しい。

が、ふと何かを思い出したようにぱたん、とジャンプを閉じると、サックスブルーの女神が刺繍されたイーストボーイの革のスクールバッグを開けて、中からアシックスの袋を取り出す。

「総兵君、お風呂借りていいですか？」

「……は？」

後ろを向いたままのチーの言葉に、総兵はいくらか間を置いて答えた。チーはよっこいしょ、とアシックスの袋を担いで、小さいポニーテールを保っている黒いリボンほどを解いた。髪が切られるまでは腰近くまで伸びていた、桃色がかった銀色の髪はやや短めのセミロングになって、さらさらと肩に落ちていく。

脳が海綿状態で、ボケの性質たちが悪い事を除いては、美少女といつてもいい程の容姿を備えたチーの今の姿に、総兵は気恥ずかしくなる思いがした。

「……入ってくりゃいいじゃねーか」

「よっしゃ」

チーはぐっ！ と拳を固めると、制服姿のままマフラータオルを頭に乗せて、風呂場へと向かった。が、何を思ったか、くるりと後ろを振り返る。

「覗き厳禁ですよ」

「誰が覗くかアアア！！」

そう叫ぶ総兵の顔は、真っ赤だった。

「総兵君。ドラゴンボール持ってないんですか。悟空がスーパーサイヤ人になったトコ見たいんですけど」

「やっとなのシーンのチョイスがまともになってきたな、お前」

時計の針が午前零時半を回った頃、早くに風呂から上がったチーはジャンプのバックナンバーや、他の単行本を辺りに投げ散らかして、ドラゴンボールを探す旅人と化していた。髪からはまだ、ぽたぽたと滴が垂れて、マフラータオルがかかった小さい肩に落ちていく。

総兵は無言で手元にあつた、新刊の単行本をチーの後頭部にヒットさせると、布団の上に横になった。これ以上チーに付き合っていたら、本当に今夜は眠れそうに無い。チーもドラゴンボールを探すのを諦め、犬のようにぶるぶると頭を振って、タオルで髪を拭いた。

「総兵君」

「何」

「私の布団無いんですか」

「は？」

総兵が起き上がると、チーが、大福にかぶりついているコリラツクマのぬいぐるみを頭に乗つけて、器用にバランスを取り小首を傾げている。総兵は溜め息をつくとき、チーの後ろのソファを指差した。

「……そこで寝ればいいだろ」

「え、断固お断りです」

「押しかけてきた奴が言えるセリフか」

「エコノミークラス症候群にでもなったらどうしてくれるんですか」

「そんなに狭くねーだろ」

「ナメた口きいてんじゃないですよ。私はいつものびのびとした環境で寝てんですよ。電源切ったこたつの中に、毛布持ち込んで寝てんですよ」

「いや、そっちの方が意味狭いだろ」

ナメた口をきくチーに、冷静になりながらツッコむ総兵。チーは不服そうにコリラックマを腕に抱くと、ソファに座った。スプリングが軋んだ音を立てる。

「総兵君チエンジしましたようよ。寝る場所」

「そつちこそナメた口きいてくれてんじゃねーよ。ふざけんな」

「んー……」

チーは、コリラックマがかぶりついている大福のようにふくれて、ブーブーと右手で親指を下にして抗議した。総兵はざけんな、と言った後、ジャンプのバクナンバーを投げつけた。それをチーはひよいとかわすと、ちっ、と唾を吐いた。

「ちっ、シケてやがんな」

「オイ、テメー何人ん家で唾吐いてんだ。いい加減絞め殺すぞ」

チーは、総兵の投げたバクナンバーを広げると、毛布を被って寝転んだまま読み始めた。総兵はやつと収拾がついた、と立ち上がって、部屋の電気を消して、布団に入った。

「私、銀ちゃん探すネ！ ああ見えてさみしがり屋なんだぞ！」

「いい加減にしるよバカヤロー！ 地味に携帯の光使って読んでんじゃねーよ！」

午前二時。

腹部に強烈な蹴りを食らって、総兵は目を覚ました。暗がりの中で上半身を起こすと、布団がやけに丸くなっている。おまけに微々

ではあるものの、呼吸しているように上下運動を繰り返している。ソファには、大福にかぶりつくコリラックマと誰かが抜け出たような形になった毛布が放置されている。

総兵の額を一筋、冷や汗が伝う。

「……まさかな……」

総兵は自分に言い聞かせるように、自分の毛布をゆっくり捲った。上下運動を繰り返す物体は。

「……ツラじゃない……か」

「桂だアアア!!」

寝言を呟きながら丸まって寝ているチーの身体を、総兵は思いっきり蹴り飛ばした。派手な音が響いて、チーの身体がジャンプと単行本の山に突っ込む。ものすごい衝撃をうけてもなお、ぐっすり眠っている奴の生存能力には目をみはるばかりである。

うっ……と寝言を言いながら、ごしごしと寝転がったまま眼を擦るチーの小さい背中に、総兵はジャンプのバックナンバーを投げつけた。

「テメー何、人の布団に侵入してんだコノヤロー!!」

「やっぱソファは寝つけないんですよ」

眠そうにあくびしながら、のっそりと起き上がったチーは、背中にぶち当たったジャンプのバックナンバーを後ろの漫画の山に放り投げた。

「一緒にベッド・イン的な？」

「外で寝ろ!!」

「おはようございます!」

たぁん! と朝っぱらからでかい音を立てて、教室後方の扉が開いた。椅子に座って本を読んでいた衣翠と沙夜が、ん、と一緒に振り返る。

「おはよう、チー」

「……おはよう」

朝からテンションが高いチーに、柗は怪訝そうな目線を向けたまま、窓辺で煙を吐いた。

「……朝っぱらからうるっせーな。お前」

「元気ないよりはマシですよ」

「お前の身体の九十五パーセントは、はた迷惑な元気だろうか」

ブーブーと、教室の扉を閉めながらチーがブーイングする。と、朝っぱらからウザいチーに柗也が気づいて声をかけた。

「アレ? ……総兵は?」

「総兵君?」

チーは毛先がぴょいん、と跳ねたポニーテールを揺らして振り向いた。くりり、とライトブルーの大粒の瞳が、好奇心旺盛な子猫のように動く。

「出血多量で欠席です」

第十一話 チヨコ食べすぎたら鼻血出るっていつけど、アレ迷信だよ（後書き）

更新が遅れてすみません；

五月六日、修正を加えました。

第十二話 落ち込んだ奴を下手に励ますな もっと傷つく可能性が高いから

午前二時。

ミッドナイトブルーの夜の帳に、たくさん縫いつけられた、神々しく輝く星々が静かにまたたいている頃。鳴は、冷たいパイプベッドに敷かれた布団の上に座って、両手を無造作に広げられた毛布の上につき、ぼんやりとした表情で夜に呑み込まれていた。

半分に欠けた月が、真つ暗な部屋に白く幻想的な月光を落とし、鳴の小さな膝を照らし出した。暗闇に微かに浮かび上がる、白く端正な顔の中心の瞳は、見えない何かを宙に追っているかのように、それにしては動く事も無く、ただ眼窩がんかに嵌まったまま身じろぎ一つしていない。

「……………久しぶりだな……………勇司ゆうじくんの夢見たの」

鳴の空虚な言葉の響きはすぐに、真夜中に流れる、孤独的な時間ときの間に吸い込まれて、透き通った暗闇の中に消えていった。

「ハイここで問題です」

「……………あ？」

昼休み。D組教室。

生徒達が出払い、すっからかんになった教室に残っていたのは、いつもの面々のD組と榊だった。窓辺で煙草に火をつけ、昼下がりの陽光が燦々と差し込む校庭を眺めていた榊は怪訝そうに、自分の

前に立つチーの方を振り向いた。チー以外の連中は読書したり、トランプタワーが壊れてギャーギャー言い合ったりしている。

「何だ異次元娘」

「はいっ、もっかい言いますよー。ここで問題です」

「何こいつウザいんだけど。丁寧に言えばうざったいんだけど」

表情一つ変えずにチーのウザさを表現する榊。先程までトランプタワーを象っていたトランプの一枚がひらりと床に落ち、袴也がそれを拾い上げ、洋司の制服の襟を引つ掴んだ沙夜を衣翠が簡潔な声で制する。それでも眉一つ動かさず、目もくれないチー。

「はいっ、もっか……」

「だから鬱陶しいんだよ。何回も言っつな。何が言いてーんだテメーは」

相変わらず少しも表情を変えずに、チーを罵倒しまくる榊に、チーは初めてむっとしたような表情を顔に浮かべて、髪と同じ色の綺麗に整った眉をしかめた。崩壊したトランプタワー跡地近辺では、まだ乱闘が繰り広げられている。総兵が見かねて文庫本を閉じ、席を立て、袴也と衣翠に加勢する。

「何でコレで分かんないんですか。先生はもうちょい、勘がいいかと思っただのに。見失いましたよ、あ、間違えた、見損ないましたよ」

「どーせ間違えるなら高校生らしい間違い方をしろ。それに、今ので分かるワケねーだろ」

「はいっ、もっかい言いま……」

「もう黙れ」

抑揚の無い、冷め切った榊の声色にチーはちっ、と密かに舌打ちした。沙夜と洋司の乱闘は未だ収拾がつかず、仲裁している総兵と桁也の隣では、仲裁に飽きた衣翠がばらばらになってしまったトランプタワーの欠片であるトランプを掻き集めて、また新しいトランプタワーを建設している。

「自分の胸に聞いてみたらどうですか」

「だから何の事だっつもの」

「なっちゃん元気が無い事です」

沙夜の、誤爆の右ストレートが桁也の顔面に直撃したと同時に、は？ と榊は声を上げた。チーがブーイングすると、キレた桁也が今度は洋司を殴り始め、総兵がバカヤロー、いい加減にしるよ、と怒鳴って一人になってしまった仲裁役を務めている。衣翠が眼鏡の透明なレンズを拭きながら、眼鏡をかけ直して、もう一枚のトランプを拾い上げて、新たなトランプタワー建設に静かな熱意を注いでいる。

「……別に俺、関係なくね？」

「しらばっくれてんじやないですよ」

「知らねーっつってんだろ」

榊は怪訝そうに言うと、ポケットに手をつ込んで教室の真ん中で練り広げられている、乱闘の方に目をやった。

「先生のバカー！ 地毛が若白髪ー！」

「ふざけんなよテメー」

ギャーギャーと騒ぐチーの頭の天辺てっぺんに拳骨を食らわせると、榊はさっさと教室を出て行った。

「ふっざげんなよコノヤロー！ 地獄に叩きこんでやるつか！」
「やれるもんなら、やってみろってんだ！」

収まる事の無い、乱闘の最中。衣翠はぼつりと呟いた。

「一枚足りないし……」

第十二話 落ち込んだ奴を下手に励ますな もっと傷つく可能性が高いから（後

ここから続き物に突入です。亀更新になるかもしれませんが、よろしく願います。

第十三話 ウォーリーだってそっとしておいてほしい時がある

「やーれやれ。ずいぶん器用な事ですこと」

保健室。

鳴は丸椅子に座ったまま、少しだけ俯いて自分の左手をじっと見つめていた。その鳴の手を取って、人差し指を消毒しながら、深緑色のブラウスを着た女性は声を出した。肩にかかる程度の高さで切り揃えた、赤みがかった栗色の髪が揺れて、左目だけに嵌められたブルーの涼しげなコンタクトレンズと、裸眼のブラウスと同じ色の瞳が、傷口を見つめている。

「カッターでざっくり、ってどこの小学生ですかー？」

「……上の空だったんです」

マキロンのボトルをテーブルの上に置いて、絆創膏の包装紙を剥がしながら、おどけたように言う女性 朱城高校保健師、千々波^{なみ}唯鶴^{いづる}の方に視線を戻して、鳴ははあ、と溜め息をついた。

「いい若いもんが溜め息つくんじゃないよー。D組の問題児が心配してたしー」

鳴のしなやかで細い指に、注意深く絆創膏を巻きつけながら唯鶴は言った。三日月を象ったスワロフスキーのイヤリングが、きらりと光りながらゆらゆらと妖しげに揺れる。

「チーちゃん達がですか？」

「えーえー。チー助が特にねー。あんたの憧れの君の教え子ちゃん
は、あんたによく懐いてるから」

「だから田原先生じゃな……!!」
「ハイハイ。動かない動かない」

顔を真っ赤にしたまま、ぱくぱくと酸欠の金魚のように言葉を探す鳴を見ながら、唯鶴はくすりと笑って、熾き火の色に艶めく栗色の髪をすつと、滑らかな動きで掻きあげた。

と、その時。

「唯鶴せんせい！ ウォーリーがいません！」

たあん！ と勢い良くスライド式の戸が開いて、「ウォーリーをさがせ」の本を手にしたチーが真顔で入室してきた。その後ろから総兵が不機嫌そうな顔で入ってくると、唯鶴はやれやれ、とばかりに首を振った。三日月を象ったスワロフスキーがちらちらと気まぐれに光を振りまいて、目を焼く。

「ウォーリーがいないんです！ ウォーリーは私を置いてどこに行つたんですか!？」

「ウォーリーだって、一人になりたいのよ。服が縞模様だから警察にしよっぴかれたんじゃないの?」

本をテーブルの上に叩きつけて、様々な人々が描かれたページをばらばら捲ってお目当てのページを見つけたチーは、メツチャ真顔で唯鶴を見つめた。唯鶴はメンドくさそうにそう言って、風で吹き飛んだ絆創膏の包装紙を拾い上げて、ダストボックスに入れた。

「警察!? ウォーリーが警察に!？」

「いい加減ウゼーんだよバカヤロー。大体何歳だテメーは。いい歳こいてウォーリー探してる暇あったら、失ったブレインを探せ」

総兵が眉を寄せて、チーの頭を引つ叩く。

「ウォーリーねえ……いい加減逃げ回るのも疲れたんでしょ」

ふああ、と欠伸あくびをしながら、足を組む唯鶴を不満そうに睨んだチーは納得いかないように、うっ……と唸ると、ちらつと鳴の方に目を向けた。

「ん？ どーしたんだよ鳴？」

「上の空でカッター使っててざっくり、ね」

総兵の言葉に唯鶴が答える。チーはじーっと絆創膏の貼られた指を見つめながら、ページの上に頬杖をついた。黒いリボンで結ばれた、毛先がびよこんと跳ねた小さな銀色がかった桃髪のポニーテールが、陽光を浴びてきらきらと輝いている。鳴は口を嚙くんだまま、すっと立ち上がった。

「あの……私もう行きます。ありがとございました」

「おう。今度は気いつけなさいねー」

保健室を出て行く鳴の後ろ姿を見送った後、チーは探るような目つきで唯鶴の瞳を見つめた。口が半開きになったチーの視線に、唯鶴は足を組み直して答えた。

「あんた等が言ってたこと、わからないでもないわね。確かに変わったわ」

「だろ？」

「なっちゃん、この頃おかしいんですよ」

総兵とチーが不思議そうに言うと、すっくと立ち上がった唯鶴は

窓辺に歩み寄って、腕を組むと壁に凭れ、外の景色に目をやった。イヤリングがゆらりと揺れて、綺麗な短い弧を描く。チーはかくりと小首を傾げて、総兵は訝いぶかしがるように、それぞれの視線を唯鶴に送る。

「何が原因か……は分かんないけど」

「榊先生じゃないんですか？」

チーの上ずった声に、唯鶴は首を傾げた。熾き火の色を帯びた栗色の髪が揺れて、左右異なった色を放つ、深く澄んだ三白眼の瞳が艶なまめかしく動く。

「さうあね。鳴海の様子が変なのは、最近の事だし。何かあったんじゃないの？ 学校の外で」

「何でですかね？」

「ま……それにしても、今回の件に関してはやけに食いつくな、お前」

半ば呆れた調子で総兵が言うと、チーはくいつと顔を上げた。好奇心と不安の入り混じった明るいライトブルーの瞳が、おもちゃを目の前にした子猫のようにきろりと動く。

「なーんか引つかかるんですよネ。自分でもよくわかんないんですけど」

「お、ウォーリーめっけ」

「えっ！ どこっ！？ どこですか唯鶴せんせー！」

ギャーギャーとウォーリーを探すチーの後ろ姿を見て、総兵は深く溜め息をついた。

「はぁあ……」

午後九時。

寝室でパイプベッドの上に浅く腰かけたまま、鳴は溜め息をついた。カッターでざっくりいってしまった指は、まだ少し痛んでいる。音も無く、秒針を律儀に動かす時計が示す時刻を確かめると、鳴はゆっくり立ち上がって部屋を出た。ぱたぱたと冷たいフローリングの廊下に、スリッパを履いた足音が響き渡る。

そのまま歩き続けて、突き当たりの部屋のドアノブに手をかけた瞬間、静電気が走り、電話のベルが鳴った。

「痛っ！」

小さく鳴は叫んで、反射的にドアノブから手を離れた。

「……何で最近、静電気多いのかな？」

ぶつぶつ言いながら、鳴はもう一度ドアノブを掴んで部屋に入ると、黒いソファの横を通って電話の受話器を手にとった。まだ微かに濡れている髪を耳にひっかけて、耳に押し当てる。

「はい、神阪です」

「……」

無言。

鳴は受話器を耳に押し当てたまま、眉を寄せた。以前にも無言電話があった。そろそろ何か防犯対策でも立てようか、と鳴の思考回

路が働き始めた時、受話器の向こう側から声が響いた。

「鳴ちゃん？ ごめん、俺だよ……勇司だよ」

「……へ？」

第十四話 乙事主様の故郷は九州らしいよ？

「ジャンプ読んでる場合じゃねエエエ！」

何かを引つ叩く、鋭い音が教室中に響き渡って、机と机の間の通路にジャンプがスライディングした。無残に跳ね飛ばされたジャンプに生徒達の視線が集中する中、チーは怒り狂った手負いの猪のようになり鼻息も荒く、目前の榊をぎつと睨んだ。

「オイ、テメー何してくれてんだ。人がジャンプ読んでるの邪魔しやがって」

淡々とした声で、少しだけ眉をしかめたまま身長差の激しいチーと視線を合わせると、榊は啜えていた煙草を携帯灰皿に押しつけた。チーは、眼光も鋭くきーっとヒステリックに叫ぶと、ばんっ！と手近な机を叩いた。

机上で建設されていた百人一首タワーが、儚く崩れ去ったのはいうまでもない。

「せんせーは何でジャンプしか読まないんですか！ もうちよいサNDERとか、他のにも興味を示してみたらどうなんですか！」

「オイ、そこじゃねーだろ。言う事思いつきり違うだろ。っーかお前も根っからのジャンプ派だろーが」

熱り立ったチーの発言に、総兵の代わりに桁也が冷静に淡々とツッコむ。榊は怪訝そうに灰色の瞳を細めると、ポケットに手を突っ込んだ。

「バカヤローお前。俺はもう再生きかねーんだよ。もうジャンプと

松岡修造しか愛せなくなっちゃったから。お前も言ってるねーで、しがらみに囚われずに広い目で世界を見る」

「何でジャンプとサンデーから、そんな大規模な話に繋がっていったんだよ。何で松岡修造なんだよ」

「コノヤロー、私は結界師とコナン見るためにわざわざサンデー立ち読みしてんだぞコラアア！ コンビニのなんかチャラ男っぽい店員に白目で見られても、めげずに立ち読んでるぞコルアア！！」

「……白目じゃなくて白い目ね……」

紙のカバーがかかった文庫本のページを捲りながら、衣翠が呟く。チーはざっと辺りを見回して、誰も味方のいないことを悟った。

「もーっ！ー！」

チーはかりかりした声で叫び、だんっ！ と手近の机を、固めた拳で叩いた。めげずに建設が再開されていた百人一首タワーが、またもや崩れ去る。

「なっちゃんの様子が前よりずーっとおかしいんですーっ！」

「はあ？」

「少しぐらい取り合ってやれよ……」

放課後。総兵はD組の教室で、まだ怒って猪のように騒いでいるチーの制服の襟首を片手で掴んだまま、眉をひそめて榊の方を向いた。

「取り合えっついていわれてもな……どう取り合えばいいっつーんだ、この猪もどきと」

開け放した窓のそばで、煙の上がる煙草を啜えたまま榊が振り向く。沙夜が机に手をついて、足を組んだまま金色の前髪を揺らした。髪と同じ色の眉の下で、紫色の瞳が、きーきーと猪の如く怒り狂うチーに向く。やれやれと溜め息をついた洋司は教卓の上にあぐらをかいて、黒いニット帽の右サイドに留められた髑髏のピンバッジが、かちりと音を立てた。

「あんたが取り合わなかつたら、私達に被害が及ぶのよ」

「そーそー。手負いの猪並みなんだよ。今のチーの攻撃力。アレ、『もののけ姫』の乙事主並みなんだって」

「そーか。じゃあ、そのいのしし姫を白神山地かどっかに置き去りにしてこい。交通費ぐらいは払ってやる」

「バカヤロー！ 誰が一番大変だと思っただテメー等は！ いのしし姫、解放するぞ！ 九州に泳いで逆戻りさせるぞボケエエエ！」

乙事主並みのパワーを發揮して、総兵を振り切ろうとするチーの襟首を掴んだまま、総兵が怒鳴る。榊は、あからさまに眉をしかめると、携帯灰皿に煙草を押しつけて、灰色の瞳で不機嫌そうにチーを捉えた。

「大体なあ……もつと他に頼る奴がいるだろ。何でいっつも俺限定で話持ち込んでくんだよ」

「うぎぎ」

「あー……そこを言われると、痛いっ」

洋司が目を細めてそう言ったと同時に、がらがらと教室前方の戸が開いて、衣翠と桁也が入室してきた。桁也が後ろ手に戸を閉めると、衣翠は右手の親指を立てて、後ろを指差した。

「鳴はとっくに出てったわよ……チー」

「嘘おー!」

衣翠の言葉に、過剰に反応したチーは総兵の手をやっこの事であるときると、チーは榊の方を向いた。

「訳は話しますから、早くついてきて下さいっ！ なっちゃんが危ないんですーっ!」

「……やれやれ」

榊が溜め息をついてジッポライターをポケットに突っ込むと、沙夜と洋司が床に降りた。

「さっさと車乗れバカヤロー共。いのしし姫は自分で走れ^{テメー}」
「絶対イヤです」

第十五話 ホテルでチェックインするのって微妙に緊張する

明日の夜七時に、駅前のホテルのロビーにいてほしい。そこで会おう。

と言われて、タクシーを降りた鳴の足は、駅前の方角へと向かっていった。まだ仄明るい街並みは、ちかちかとカラフルな光を放ち、無機質な光の街灯をからかうように瞬いている。会社帰りの人や、下校途中の制服姿の高校生が行き交っている。その人ごみの中をゆつくりとした足取りで歩きながら、鳴はふと、空を見上げた。

夜の帳が、董色の夕暮れの帳の下に滑り込もうと待ち構えていて、その所々に微かに輝く星が、糸で縫いつけられたかの如く、ちらほらと見えている。

「勇司くん……」

ぼつりと。夕暮れから夜へと変わっていく空を見上げた鳴の言葉は、人ごみの足音に掻き消えた。

「……ほー」

車内。

煙草を啜えたままハンドルを切る榊の隣で、チーが助手席に座り、くりくりした大きなライトブルーの瞳を榊に向けた。そのチーの小さな膝の上で、お約束というべきか、カリカリした総兵が犬の格好でお座りさせられていた。屈辱のポーズである。

後部座席では沙夜が足を組んだまま、サイドガラスから見える街

の景色を眺め、その隣では衣翠がランプもつけずに読書の真つ最中。最後部の座席では、やはり車に酔った洋司が二人分のシートを占領し、桁也がミネラルウォーターのボトルを洋司の額に押しつけている。

「よくそこまで嗅ぎつけられたな、いのしし姫」

「唯鶴せんせーに聞いたんデス。なっちゃん、唯鶴せんせーにだけ言ってみたんですから」

「……ま、それは分かったが」

そこで言葉を切ると、榊はサイドガラスを下げて煙を吐き出した後に、しばらく間が開く。

「やつぱり俺、関係なくね？」

「ほざいてんじゃないですよ。なっちゃんの黒馬の王子様〃、の後に何がつくと思ってるんですか」

「普通、白馬じゃね？」

「なっちゃんの王子様は榊せんせーです。せんせーは腹黒いから、白は似合いません。黒がお似合いです」

「あー……やつぱこいつバカだな。バカだよ、天性のバカ」

表情一つ変えずにそうほざくと、榊はまたハンドルを切った。

「駅前のホテルつつたか、お前」

「ウイ」

高い天井からつり下げられた、煌々くわんくわんと雅みやびやかに光るシャンデリアを見上げて、鳴は、シックな柱時計の真下で壁に凭れかかったまま、

ぼんやりと勇司を待っていた。

黒く、磨き込まれて艶々と光っている黒檀のカウンターの向こう側では、詰襟姿の従業員が立ち、チェックインを済ませた客達が忙しなく広いロビーを横切つて、赤い絨毯が一段一段敷き詰められた階段を上っている。

上品な、赤のベルベット素材のカーテンが横に控えた、フランス窓を模した形の窓の方をじっと見つめたまま、鳴は身じろぎ一つしない。

そんな中、また回転ドアが回つて、一人の客が中に入ってきた。糊が効いた、白地に黒のヘアライン・ストライプのシャツに、細身の水色のネクタイを締めた黒い背広姿のその男は、きよるきよると拳動不審に辺りを見回すと、ぴたりと動きを止めた。

そのまま、慎重な足取りで、男は歩み始めた。

「……鳴ちゃん？」

「へっ？」

不意に声をかけられて、鳴は一瞬遅れて、ぱつと前を向いた。

「ごめん、待たせて……久しぶりだね」

柔和な顔立ちや、幼い頃と変わらない、二重瞼の大きな目。

鳴は口元に手を当てて、まじまじと勇司の顔を見つめた。大粒の鳶色の瞳が、少しずつ見開く。

「……ちよつと話があるんだ」

「せんせー、洋司君が吐くって言ってますよ。走行距離短いのに、何であんなに酔いが早いんですか」
「アレだろ、バカだからだろ」

無表情の榊の言葉に、チーは眉一つ動かさずに姿勢を正すと、膝の上の総兵を撫でながらライトブルーの大きな瞳を榊に向けた。ネオンライトや街灯の光がサイドガラスから差し込んで、チーの銀色がかった桃髪を照らす。

「……せんせーもバカですね、色恋沙汰に関しては」
「あ？ ……何か言った？」
「何でもないですけど？」

しらはつくれて、サイドガラスの方へ視線を移したチーに、総兵は怪訝そうな視線を向けた。

第十六話 いや、だからさ、ロリコンじゃないって。

「あー……眠たいですね」

「オイ小娘。俺の頭の上に顎乗せるんじゃないやねー。てめっ、バカのくせに何で頭が重いんだよ」

「ぶぶー、乗せてるのは顎じゃなくて額でした」

「どっちにしろ、同じだろーが！」

血糖値でも下がっているのか、先程までのウザいテンションを無くしたチーに総兵が怒鳴ると、榊はあからさまに嫌そうな顔をして、灰色の眠たげな目を細めた。

「うるせーんだよテメー等。静かにしやがれ」

「文句があるなら、人の話を聞かねえ自己中に言え」

「そいつが自己中なのは元からだろーが。アレ、B型だからじゃね」

煙草を携帯灰皿に押しつけながら、榊は眉一つ動かさずに、全世界のB型の方々に失礼な言葉を吐く。

「B型で何が悪いんですか。中学校の時に、アンタ私が今まで見てきたB型の中で一番性質悪い^{たぶ}、って言われましたけど、別に気にしてなんかいませんよ」

「オメーは最終的に何が言いてーんだよ！」

「っていうか、お前ら失礼すぎだろーが！ 全世界のB型の方々に謝れエエエ！」

チーと榊のふざけたやり取りに、総兵と後部座席の沙夜がブチキする。それでも反省などしない、ふざけた教師とその生徒の会話は、どんどん失礼極まりないものとなっていく。

「んだ、っせーな 型」

「血液型で呼ぶんじゃねーよ！」

沙夜が大声を張り上げる隣では、衣翠がやっと点けた橙色のランプの下で、本のページを捲った。ちなみに、この二人は 型である。

「ってというか、D組うちにはA型っていませんよね。 かBかABですよね」

「ま、大多数がBかABだけだな」

榊が新しい煙草に火を点けながら、低い声で呟く。

「それにしても、血液型とかで人を判断しちゃいけませんよ！ 私だってホントはA型みたいな性格なんですから！」

「血液型で人を判断してんのはテメーだろーが！ 言っとくけどな、お前、絶対B型！ B型以外の何ものでもないから！」

騒然となってきた車内。洋司が耳を塞いで、死に損なったゾンビというか、二回目の死に至る状況に喘ぐゾンビのような声を絞り出す。裕也もやれやれ、とばかりに溜め息をつく。ちなみに洋司はB型、裕也は 型である。

「ギャーギャーうるせーんだよテメー等。だからD組は変人奇人の巣窟だって言われてんだろーが」

「変人奇人の巣窟の親玉はテメーだろ！ んだコノヤロー、何型だ！」

「いや、俺Aだから。残念だけど、A入ってるから」

「〃AB型ですね、榊先生」

チーが欠伸をしながら呟く。チーの膝の上で、いかにもうんざりしたような顔で座っている総兵もA B型である。

「あー……だから先生って気難しいんですね」

「つーか、ホント俺達殴られるぞ。B型とかA B型の方々に」

大騒ぎに進展した車内で、チーと総兵は密やかな会話を交わした。

「……話って何？」

ロビーに並ぶ、カーテンと同じ色のベルベット生地が張られたソファに浅く座って、鳴は向かいのソファに座った勇司に話しかけた。久しぶりに顔を合わせた、幼馴染の顔は、なぜか憔悴しているように見える。しつかり整えた背広を着ているのに、内側はどこかが燃よれている気がして、鳴は一抹の不安を覚えた。

「いや、大した事じゃないんだけど……」

口調もどこか、おどおどとしている。目も決まった方向を向く事はなく、どこかしらに視線を合わせては目を逸らすといった調子で、落ち着かない。

騒ぐ胸を抑えて、鳴はやっとこさ笑顔を取り繕うと、身体を正面に向けた。

「けど、本当に久しぶりだね。どこで何してるの？ 今」

「あ、ああ……秘書の仕事をね」

「秘書？」

鳴は、目を丸くした。勇司は拳動不審に目を泳がせながら、浅く頷く。ソファの背凭れに背中を預けて、鳴はじつくりと勇司を見つめた。

「勇司君、秘書さんやってたんだ！　なんか意外だね、てつきり普通の会社とかで働いてると思った」

「アレ？　俺、そんな平凡だった？」

少し面食らったように、勇司は前に乗り出した。子どもの頃と全く変わらない表情に、鳴は懐かしくなつて、唇を綻ばせた。小さい頃からずっと見てきた、平凡で実直で、ちょっと抜けている表情。

「うん、平凡だったね」

「大人しかつたくせして、言いたい事はきつちり言ってくるんだよなあ……子どもの頃から変わってないよ」

「お互い様でしょ？」

勇司は参った、といった感じで苦笑した。鳴もにっこりと、微妙に毒の混じった笑顔を浮かべる。大人しくても案外したたかな性格をしていた鳴と、優しかったけれど臆病だった勇司は、どこか対照的で、二人の性格が今も変わっていない事をこのやり取りが物語る。

「ま、昔の事は置いといて……話があるんだつたよね？」

ソファに深く腰をかけ直して、鳴がそう切り出すと、勇司は一瞬表情を曇らせた。黙りこくって下を向き、手をじつと見つめている。

「……どうしたの？」

「いや、実は……」

俯いたまま言い淀んでいる勇司に、鳴が小首を傾げて、前に乗り出そうとした瞬間。

「御苦労だったな、有沢」

肩に手を置かれて、鳴がさつと振り返ると、後ろには細身の紫色のネクタイを締めた男が立っていた。茶色く染めた髪にレイバンのサングラスをかけた、長身の男は、薄い唇に笑みを浮かべた。急いで鳴が前を向くと、勇司が煮え切らない様子で俯いたまま、ゆっくりと瞬きして呟いた。

「ごめん……鳴ちゃん」

「着いたぞ、野郎共」

ホテルの前で車を止めると、チーは総兵を抱えたまま助手席から飛び降りて、ドアをばたんと閉めた。ドアをスライドさせて、後部座席に乗っていた三人と背負われた一人も車から飛び降りる。チーは総兵を下ろすと、黒とピンクのラインが入ったナイキのハイカットで、とんとんと地面を蹴って、車から降りた榊の方に顔を向けた。

「こんなに大勢で入れるんですかね？」

「怪しまれる事、間違いなしだな」

灰色の目を細めて、榊が低く呟く。

「仕方ねーな。俺一人で行ってくるわ」

「ふざけた口きいてくれてんじゃないですよ。一人で行かせるかコノヤロー」

まだ酔いが回っている洋司を背負った祐也の隣で、沙夜がミネラルウォーターのボトルで洋司の額を叩き、衣翠が総兵に手を差し出して「お手」と言っているのにも気付かずに、チーは眉をひそめた。バカ言ってんじゃないよ、と言いたげにライトブルーの目がぎろりと動く。

「バカ言え。ロリコン趣味だと思われたら、どーしてくれんだ」

「せんせー、ロリコンじゃなかったんですか」

「ロリコン教師っていうのはな、若年層向けの小説の中でしか有り得ない設定なんだよ。もちろん、ジャンプの中でもな」

チーがマジでか、と呟くと同時に、リバーズしかけている洋司から沙夜が即座に離れた。祐也がギャーと悲鳴を上げ、総兵が牙を剥いて衣翠を威嚇する。

「どーすんですか。唯鶴せんせーの話によれば、どうも男絡みらしいですよ。どーしてくれんですか、なっちゃんも襲われてもしてたら」

「……何でこんな状況下において、教え子に助けを求められるんだろうな俺は。何、宿命なワケ？ どんだけプレッシャーのデカイ宿命？」

キーキーと騒ぎ始めたチーの声に耳も貸さずに、榊は自分の境遇について考え始めた。その後ろで衣翠が、総兵の歯から素早く手を引きながら呟く。

「大丈夫でしょ……金持ちの男に結婚迫られて、誘拐されるような事にはならないだろうし……」

衣翠の言葉が終わると同時に、ホテルの玄関から長身の男が一人出てきて、その後から少し俯いた男、次に。

サングラスをかけ、巨大な体軀を真っ黒なスーツに包んだ大男達がぞろぞろと出てきて、先頭の一人は、毛布に包まれた女性を抱えていた。

「大丈夫、裕也……俺、吐くモンないから」

洋司が死にかけた声で呟いた。

第十七話 幼馴染なんてのはな、大人になってから化けるケースが多いんだよ。

「どうなっただキシヨオオ!!」

チーに強く蹴飛ばされた机が大きな音を立てて、他の机を巻き添えにしながら、床に倒れ込んだ。衣翠が咎めるように、ちらとチーに視線を送ると、チーは華奢な肩を上下させながら俯いて机の足を蹴った。銀色がかつた桃髪が、激しく呼吸する度に揺れて、うつすらと紅潮した頬に張り付く。見かねた衣翠は文庫本を自分の机に置いて、下を向いたままのチーに歩み寄って、彼女を抱きしめた。無表情を取り持たせたまま、自分より少しだけ低いチーの頭を撫でると、チーは衣翠の胸に頭を凭れさせて沈黙した。

しんと静まり返った教室でいつものように窓辺で煙草を啜えている榊に、黙りこくっていた総兵は、目を向けた。

「逆上すんじゃない。A組に聞こえたらどーすんだ」

「そっという問題なの？」

いつもと少しも変わらない榊の声色に、沙夜は苛立たしく、棘のある声で反応した。鳴があの子に連れ去られ、すぐに追跡できなかったD組連中は鳴の行方を知る事もできずに今朝登校してきたのだが、鳴はやはり学校には来なかった。鳴が担任しているA組では、未だに波紋が広がっている。

「なあ……やっぱり、言った方がいいんじゃないの？ 鳴がどうなってるか、分かんないんだぜ!？」

「止められなかった俺達に、叱責が集中しちゃう。それに、ある意味ストーカーまがいったんだぞ。いくら神阪先生が心配だったからって、後を追うまではしなくても良かっただろ」

洋司の悲痛な声に、榊は冷徹なまでに答えた。桁也はぐつと齒を噛みしめて、チーはぱつと後ろを振り返った。衣翠の瞳に、さつと翳が映り込む。

「そんな言い方ないじゃないですか！ 叱責が怖くて、なっちゃん
が連れ去られたの黙っとけっというんですか!？」

「デカイ声出すな。聞こえちまうだろ」

何の感情もこもらない淡々とした声で、榊は窓の向こう側の景色に目をやったまま、灰皿に煙草をおしつけた。チーは齒軋りすると、手を強く握りしめた。教室の端で固まっていたクラスの連中も、妙な面持ちで、事の成り行きを息をのんで見つめている。

「オイ榊。いくらなんでも冷たすぎだろ。鳴が何されてるか分かったもんじゃねーんだぞ」

総兵が低い声でそう言うと、榊は緩慢な動作でやつとチー達の方へ顔を向けた。少しも変わらない、いつもの表情にチーは怒りを超えて、軽い戦慄を覚えた。鳴が連れ去られても、榊は微動だにしない。まるで心が存在していないようで、わつと鳥肌が立った。

「金持ちの男に、ちよつと強引に結婚迫られてるだけなんじゃねーの。連れ去った側もひどい事はしないだろうよ」

凧生が外見特徴のみではあるものの、大富豪を調べてみた結果、浮かび上がってきたのは一人の若い男だった。名前は森塚 尚司。若いながらも一人で多くの財を築き上げた森塚を知る人間に話を聞くと、気の良さそうな青年を秘書にしている、美人をよく連れまわしている、という事だった。もっと詳しく聞いてみると、まだ若い

というのに、そろそろ身を固めたがっている様子だという。

昨晚、ホテルから森塚と一緒に出てきた男と青年　遠目
ではあったが、袴也にはよく見えていた。凧生が手配してくれた写
真は、ぴったりと二人の人物と合致したのである。

チーは胸の奥でつつかえず、熱い塊を感じながら声を絞り出した。

「……何で黙ってられるんですか」

「言っただろうが。俺達に叱責が集中する、ってな」

目の奥がかつと熱くなつて、思わず瞬きをすると、ライトブルーの瞳から涙がこぼれた。と同時に、おもちゃのゴキブリ騒動でビビっていた鳴の顔が、チーの頭の中にフラッシュバックする。衣翠は何も言えずに口を噤んで、総兵は泣きだしたチーを見ていられなくなつて思わず目を逸らした。榊は相変わらず無表情に、ポケットに手を突っ込んだまま、前を向く。

重苦しい沈黙が、教室内に垂れこめる。

「……この件はこれで終わりだ。本人が本人で何とかするだろ、俺達の介入する場面じゃねえ」

凭れかかっていた壁から立ち上がると、榊は言葉を締め括った。固まっていた連中が、小さくもざわざわと騒ぎ始める。チーは俯いたまま、しばらく手を強く握りしめていたが、不意にさつと踵を返した。今まで動く事のなかった榊の眉が、僅かに動く。

「……先生は介入しなくて結構です。私達だけで、なっちゃんを助けに行きます」

「止せ」

榊の鋭い声にもチーは怖気づく事もなく、すたすたと教室のドア

の方へと歩いていった。いつもの五人もそれぞれチーの後を追う。凧生が困惑して六人組の方を向くと、祥沔が凧生の肩を引っ張った。凧生が後ろを振り向くと、祥沔は無言のまま、首を少しだけ左右に動かした。凧生の金色に光る瞳が、きゅっと丸くなる。

「みんなに迷惑かけませんよ」

「何ほざいてやがる。迷惑かけるとかかけないとか、そういう問題じゃねーんだよ」

凄みのある榊の低い声に、チーはぴくりと反応した。普段のボートとした表情からは信じられない、一回も聞いた事のないドスの利いた声に、騒いでいた他の連中も静まる。

「いつまでも世間体に気を遣えない子どもじゃないです」

「一人前気取るなよ、お前等」

「【特異体質】と何年付き合ってきたと思ってるんですか？」

チーが震える声でそう言った瞬間、サッカーボール程の大きさがある氷塊が、チーの頬すれすれを掠めてドアに直撃した。ドアが、激しく音を立てて揺れ、砕けた氷の欠片が足元に飛散する。チーだけではない、六人組の全員が驚きに目を見開いた。

「……もう一回言ってみろ」

榊の声に、六人は戦慄を覚えた。ゆっくり近づいてくる足音に、喉が干上がり、汗が背中を伝っていくのが分かる。

六人が振り返ると、後ろには榊が立っていた。完全に、キレてい

る。

「むやみに使うんじゃないねーつつただらうが！ 他の連中から見れば俺達の力は異常なんだよ！！ 下手すればD組全員そうだってバシちまうの分かってんのか！？」

初めて聞いた榊の怒声に、六人は気圧されて、榊を見ている事しかできなくなった。他の連中も、凧生も祥冴も驚いたまま黙りこくっている。

「どれだけ俺の神経尖らせれば気が済むんだ、テメ等とは？ 俺みてーに、こいつのせいで歪んだ人生送りてーのか？ あ！？」

榊は掌の上で形づくった氷の塊を、床に投げ捨てた。澄んだ音を立てて、氷の塊はたやすく打ち砕けて、欠片はあちこちに飛び散った。チーはゆっくりと俯いて、足元の氷の欠片を見やった。だんだんと溶けていく氷が、水たまりをつくっていく。榊は舌打ちすると、教卓の上を叩いた。その音に首をすくめた他の連中も、気まずそうに口を閉じる。

長い時間が流れた。

「……事態を始末できる度胸があるなら勝手にしやがれ。絶対に他の奴等を巻き込むな」

そこまで言って、榊は窓辺に戻っていき、新しい煙草に火をつけた。振り向かない後ろ姿を見て、また一筋の涙をこぼした後にチーは教室を出ていった。五人もそれに倣って、教室を出ていく。

開け放した窓から風が吹いて、黙ったままの榊の前髪を揺らした。甘い香りが、ぐらりと揺らめく。

榊の左寄りの額には、白い傷が、はっきりと残っていた。

「何処、ここ……？」

同時刻。

鳴はぼやけた意識の中で、昨晚の出来事を思い出した。確か、勇司に会って、その後若い男と会って……そこで記憶は途切れたのだ。鳴がおそろおそろ上半身を起こすと、彼女の身体は、たっぷりとした純白のヴェールが天蓋から垂れ下がっているベッドの上だった。薄い桃色の壁紙が張られた、真新しいシックな調度品が並んでいる部屋をゆつくりと見回すと、ひどい倦怠感が身体を襲ってくる。

「う……」

一瞬ぶれた視界に、鳴は思わずこめかみを押さえた。鈍い痛みが、頭に響く。思わず目を閉じると、今日は平日であった事を思い出し、はっと目を開けた。

「お目覚めですか？」

不意に声がして、鳴がそちらに顔を向けると、昨晚の男が上品な

スーツに身を包んで鳴の方を見ていた。薄い唇には笑みがはりついて、手にしたグラスには真っ赤な輝きを放つワインが半分ほど入っている。

「誰ですか……」

嫌悪感も露わに、鳴がきつと男　森塚を睨むと、森塚はひよいと眉を上げて、中のワインを揺らしながらグラスを、テーブルクロスの上に置いた。

「初めまして、と言うべきか。君の幼馴染に秘書をやってもらっている者だよ……が」

かつ、かつ、と高そうな革靴で足音を立てながら、言葉を切ると、狡猾そうな笑みを浮かべた。鳴は恐怖心を押し込めるように、柔らかいスーツをぎゅっと握りしめる。

「それだけの関係で、終わらせたくない者でもある」

「どういう意味ですか？」

「決まってるじゃないか」

口角をくいと吊り上げて、森塚は足を止めた。サングラスの奥で、褐色の目がぎよろりと回る。

「僕の妻になつてほしいんだよ、神阪　鳴海さん」

森塚の言葉を聞いたと同じに、鳴は、頭の中が真っ白になった。何も描かれていないキャンパスになった頭の片隅で、今から十一

年前　十三歳の時の事を思い出す。

(俺を覚えてれば、ね)

記憶の奥に潜んでいた、懐かしい声が彼女の心に、大きく響き渡った。

第十八話 ウルトライオレンスってちょっと怖くない？

「……」

学校の裏門から急いで飛び出し、最寄りのバス停まで歩きバスに乗り込んで、凧生が探し当てた森塚の自宅を目指す一行は黙りこくったまま、窓の外を流れる景色に目をやっていた。制服姿の一行に丸縁の眼鏡をかけた初老の女性が訝しげに視線を飛ばしてくる。窓側の座席でナイキのハイカットを脱ぎ捨て、膝を抱えた格好をしたチーは、虚ろな目に景色を映し込んでいた。無造作に脱ぎ捨てられたスニーカーの紐が、バスが振動する度に揺れる。

総兵はまだ湿った筋を頬に残しているチーの隣で、少しずつ、震える息を吐いた。思わず目を閉じると、振り向かない神の後ろ姿が脳裏に浮かんだ。怒鳴られた時の心臓の動悸が戻ってきそう度、目を開けると、チーはさっきと同じ姿勢のまま膝に顔を埋めていた。小刻みに震える肩は小さくて、若干大きい半袖のシャツから抜き出た細くて白い腕が、自分を守るように強く、自分を抱きしめている。惨めになつて、総兵は前を向いた。

バスが右折して、チーの銀色がかった桃髪を揺らした。

「妻？」

呆けた口ぶりで、鳴が鸚鵡返しに口を開くと、森塚は細い眉を片方だけぐいっと持ち上げた。革靴の底で足音を立てながら、ブランド物の銀色の指輪を嵌めた右手で、グラスを持ち上げる。指輪とガラスがぶつかって、かちん、と澄んだ音を立てた。

「ああ、そうだよ」

「何で私が」

間髪いれずに、鳴がまた口を挟むと、森塚は薄い唇を歪ませて狡
猾な笑みを浮かべた。鳴の身体の芯がびりびり震えて、鳥肌が立つ。

「ふむ、僕が君を見初める事になったきっかけは……有沢なんだよ」

グラスに口をつけて、赤ワインを少量口に流し込んだ森塚の声に、
鳴はさつと目を見開いた。勇司が何故、関連しているのか。森塚に
とってはただの秘書という位置関係しか持たない勇司が、わざわざ
彼女の事を話したのだろうか？ 秘書が直属の要職人に、自分の幼
馴染の話をするというのも、なんだかおかしな話だ。

「写真まで見せてもらってねえ……僕の好みにぴったり合致したよ、
君。まあ、高校生の頃よりずいぶん大人らしくなったがね」

教育熱心だった勇司の両親が、わざわざ遠くの中学に勇司を通わ
せた為に中学は異なっていたものの、高校は一緒だった。写真も、
一緒に撮った記憶が断片的ではあるものの、きちんと残っている。
グラスを置いた森塚の唇が赤く光って、鳴は唾を飲み込んだ。

「勇司君が、あなたに、私の事を紹介でもしたっていうんですか？」
「そうじゃなきゃ、君はここにいないはずだ。今頃生徒と一緒に授
業してる、といったところじゃないのかい？」

からかうような口ぶりに、鳴は眉をひそめた。ふつつつと、怒り
がこみ上げてくる。

「それなら、さっさと私を帰して下さい」

「それは無理だ」

「何故？」

警戒心を隠そうともせず、鳴は顔をしかめたまま、森塚を睨んだ。森塚はひよいと肩をすくめると、鳴の方へと近づいてくる。思わず身を引くと、森塚は鳴を高圧的に見下ろしてきた。サングラスの奥の、褐色の瞳がくるりと回る。

「僕は独占欲が強くてね」

「独占欲って言われても、私はあなたのものになった訳じゃないです！」

きっぱり言い放つと、鳴は頭痛が和らいだのを感じて、意を決してベッドから降りた。多少ふらついたものの、しっかり立ち上がって鳴は森塚の方を向いた。鋭い目線の鳴に、森塚は怯む様子もなく、また薄い唇を歪めた。

「じきに、僕のものになるぞ」

「なつてたまるかああ！」

D組連中の影響を受け始めたか、少々粗暴になった口調で怒鳴ると、鳴は控えめなレリーフの施されたドアノブに手をかけた。

「痛っ！」

ばちつと、静電気が走る。だが、静電気と思えない程の衝撃が走って、反射的にドアノブから離れた手はひどく痺れていた。鳴は愕然として、森塚の方を振り向いた。まさか、ドアノブに電気を流しているのだろうか？

が、森塚は眉を上げて、不思議そうな表情を顔に浮かべた。

「外に出たいなら勝手にしてくれて構わない。ただ」

真顔のまま、森塚はサングラスの奥の眼をすつと細めた。鳴の瞳が、嫌悪と恐怖で潤み、大きく見開く。

「ボディガード同伴だよ？」

「オイ、もうすぐ降りんぞ」

総兵が促すと、チーは黙ったまま足を下ろしてハイカットのマジックテープを引っ張り、ゆっくりとした動作で履き始めた。軋んだブレーキの音とアナウンスが鳴ると、ドアが開いた。チーが靴を履き終えたのを確認して総兵が通路に出ると、チーも顔を上げた。ライトブルーの瞳は、子猫みたいに動く様子も見せない。

運転手の不思議そうな目線を背中に感じながら、総兵が最後にバスから降りた。

遠ざかっていく四角い大きな姿を目で追い、凧生の書いた地図を持って話し合っていた沙夜達の輪から外れた所で、チーがこっそりと短いシャツの袖で涙を拭うのを横目で見ると、総兵も長身の身体を屈ませて輪の上から地図を覗き込んだ。

「へえ、けっこう敷地面積広いのな」

「腐っても大富豪だしねえ」

沙夜が呆れたように呟き、人差し指で道順を辿る。もう、そんな

に遠くない。少し歩けば、すぐに正門の前まで辿りつく事ができる。

「よし、じゃあ歩くか」

総兵の声で、全員が狭い歩道を歩き始めた。夏の日差しを照り返すアスファルトの上に、六人の足音が響き、道行く車の中の運転手が珍しそうに全員を眺めながら、すぐに見えなくなっていく。

「っていつか洋司君良かったですね、酔わなくて。あんなトコでリバスされたら、私達も貰うトコでしたよ」

「バカ言え、酔い止めは車に乗る前に飲むもんだから、ちゃんと乗る前に飲んだぞコノヤロー。前みたいに酔ってから飲むなんてバカな真似しねーぞ」

「やっぱバカだよな、お前」

祐也が真顔のまま、意気揚々と話す洋司に辛辣にツッコむ。

「つつーか、あんた等少し黙れないの？ イライラが増していくんだけど」

「その前に、俺は衣翠が日傘を持ってる事に対してイライラすんだけどな」

衣翠の真っ黒な日傘に、総兵がうんざりしたように開口する。

「ウルトラバイオレンスをナメるもんじゃないわよ……」

「ウルトラバイオレットだろーが！」

衣翠の言葉に全員がユニゾンでツッコむと、遠くに森塚邸の巨大な門が見え始めた。

「今頃、どこにおるんやろーな、チーちゃん達」

風生が窓から吹き込んでくる爽やかな風に前髪を揺らされながら、祥河に話しかけた。教卓には煙草が残った灰皿が置いてあるだけで、榊の姿はない。

「まあ」

祥河は窓の上を手をかけて、外の景色を覗き込んだ。緑色の瞳が気だるげに細まる。

「やってくれるだろうよ。奴等なら」

第十九話 「いいとも」を見る時は観客になりきれ

「もしもーし、入れてくれませーん？」

「いえ、失礼ですがお客様、アポイントをお取りになられましたか？」

バスから降り、森塚邸を目指して歩き続けた一行はやっと森塚邸の門まで辿り着いて、設置されていたモニター付きのインターフォンの前で、警備員のような格好をした受付係と押し問答していた。

「アポイント？ アポなんているんですか？」

「いや、一応は」

「いらないでしょ、そんなん。アレ、クイズが何かで良いですよ。正解したら通してくれるとか、そういうノリで良いですよ」

「良いですよっていわれても……こっちは良くないんですけど」

引きつった表情の受付係に、なおもクイズを強いるチー。

「何でクイズじゃダメなんですか？ クイズに正解したら通してくれるかなー？」

「いいともー！」

「いいともじゃねーんだよ！ いい加減にしるよ、クソガキ共！」

チー・洋司・沙夜による、タモさんの伝家の宝刀ボケにキレた受付係が怒鳴る。総兵と桁也が溜め息をつくど、ウルトラバイオレット防止の為に日傘を差した衣翠は門に凭れかかったまま、文庫本のページをひらりと捲った。

タモさんの必殺武器である「いいともー！」が効かなかったチーは、ぺっと唾を門に吐きかけた。

そんなチーを見て、沙夜が何か思いついたのか、全員を呼び集めて耳打ちを始めた。受付係の顔が、怪訝そうに変わる。

「いやー、今日も暑いですねー」

「そうですね」

「ウルトラバイオレットも厳しいしねー」

「そうですね」

「突然だけどさ、クイズって楽しいよねー」

「そうですね」

「クイズに正解したら、通してくれるよね？」

「そうですね」

「そーじゃねーに決まってるだろーが！ どんだけタモさん好きなんだよテメー等！」

しつこい「いいとも」ネタに、とうとう堪忍袋の緒が切れた受付係が怒鳴り散らした。タモさん役を演じたチー、観客の方々を演じた五人も、ちつと舌打ちする。

「仕方ないですね。ドカベンの主人公の名前は何でしょう？ のクイズでいいですよ」

「だからクイズじゃ通さねーつつつてんだろ！ 大体、簡単すぎるーが、そのクイズ！」

自分勝手な思考でぐいぐい話を進めていってしまう、チビのB型女子高生に翻弄されながらも、総兵達にも負けぬ勢いでツッコみ続ける受付係をよそに、六人は既にシンキングタイムに入っていた。

つくづく、人の話を聞かない、面倒な連中である。

そんな中、シンキングタイムに入って早くも、洋司が挙手した。仕方なく受付係も、手で差して回答権を与える。

「岩鬼 正美」

「違うっつうっ！ 初っ端から違いますけど!?!」

洋司の回答にノリツッコミで答える受付係。その次に、祐也が拳手する。

「バツカ、正美じゃないだろ。里中君だろーが」

「里中君、違うよ!?! 何で自信満々なのコイツ、ワケ分かんねーんだけど!」

祐也の真顔での回答を、どんどん上昇していくテンションで華麗に突っぱねていく受付係。

「あ、俺分かったぞ。アレだろ、捕手の右投左打で、白い飯だけ詰めたでけー弁当箱持ってっつから【ドカベン】って呼ばれてる奴だろ」
「そこまで詳しくて、何で名前知らねーんだよ。ワケ分かんねーよ」

総兵の言葉に、だんだんツッコむのに疲れてきた受付係が、力を振り絞ってツッコむ。

「えー、ヒロインなら分かるんですけどねー。サチ子ちゃんでしょ、ヒロイン」

「別に誰もヒロイン聞いてないわよ……」

考えようともしていない衣翠が本を読み続けながら、チーにぴしやりとツッコむ。

「そういえばサチ子ちゃん、里中君のお嫁さんになってましたよね」
「バツカ。サチ子はなあ、ホントは岩鬼が好きだったんだよ。それから紆余曲折を経てだな」

「何でそこまで知ってて、主人公の名前分かんねーんだよ。何でだよ、ワケ分かんねーよ」

総兵が真面目に、サチ子が何故里中君とくつついたのかという事を説明し始めるのを見ながら、そろそろ憔悴し始めた受付係がツツコむ。

「つーかさ、桁也？ 何で岩鬼が啜えてる葉っぱって、花が咲いたり枯れたりすんの？」

「アレだろ、多分、岩鬼の脳感情の起伏に直結する部分と、繋がってるからじゃないの？」

様々な疑問と憶測が飛び交い出した中、受付係のイライラメーターが上がり始めた。クイズをふっかけてきたのは奴等だというのに、真面目に答えようとしてもしない。

イラつくのは、当たり前といえば当たり前なのである。

「受付さん、何でさっちゃん最終的に里中君を選んだんですか？」

「受付、何で岩鬼が啜えてるやつって枯れたり、花咲いたりすんの？ それとあんな身長高いの？」

「何でドカベンの弁当箱の中って、白米だけなのかしら……」

チー・洋司・衣翠の三連続による、クイズの趣旨から完全に外れた質問に、受付係のイライラメーターは最高潮に達した。

「趣旨ズレまくりだろーがテメー等ああ！ ドカベンの主人公は誰だって聞いてんだよバカヤロー！！」

受付係が怒鳴ると同時に、五人がにやっと笑った。そこで、やつ

と一人欠けているのに気付く。
嫌な予感が迸った受付係の耳に、沙夜の声が響いた。

「正解はー？」

「山田太郎じゃあああ！」

助走をつけて高く跳び上がった沙夜の飛び蹴りが、綺麗に、門の真ん中にめり込んだ。同時に、凄まじい破壊音と砂埃を孕んだ風が吹き抜ける。

音のみで門が吹き飛ばされた事に気づいた受付係の顔が、すーっと一瞬にして青ざめた。そんな彼を見て、チーはにこつと笑ってモニターいっぱい顔を近づけた。

「バイバイー」

そう言い放って、ナイキのハイカットの底でモニターを蹴飛ばし、ヒビを入れた。

「何が起こったんだ!？」

森塚邸。

凄まじい破壊音に気づいた森塚が急いで、同じく音に気づき、部屋に入ってきたボディガード達と鳴の部屋のベランダに出ると、美しく整備されていた庭園の真ん中に抉られたような跡を残した門が倒れているのが見えた。

そして、その門の上に制服姿の六人の人影が見える。

「おー、趣味の悪い庭だなコノヤロー」

「ただっ広いだけですかバカヤロー」

「この石像壊しちゃってもいいかなー？」

「いいともー！」

「この門、案外ちよろかったわね……」

長身の黒髪、金髪、身長の高い桃髪、チビのニット帽と眼鏡、水色の髪が順番に、ふてぶてしく開口した。

その声を聞いて、鳴はベッドからすぐに立ち上がり、ベランダに飛び出した。すぐに、彼女の鳶色の瞳が驚きに丸くなる。

「なっちゃんを助けに行ってくれかなー？」

「いいともー！」

チーの問いかけに一斉に答えると、連中は猛ダッシュで森塚邸へと向かっていった。

第十九話 「いいとも」を見る時は観客になりきれ（後書き）

パロディ傾向が凄まじくなってしまいました； 夕モさんや水島さんに、謝りたい；

第二十話 ドリフの階段コントの真似は下手すりゃ死ぬから気をつける

「来週もまた観てくださいねー」

チーが一行の先頭を突っ走りながら、サザエさんの声色を真似た。目前には森塚邸の、巨大な玄関が待ち構えている。

「じゃーんけーんぽん！」

日曜の夕食の後に恒例で行われるじゃんけんの掛け声と共に、一斉に大きな正面玄関の扉を蹴り飛ばして、六人組は森塚邸内部へと侵入した。扉に嵌めこまれていたステンドグラスがばらばらと赤絨毯の床に飛び散ると、チーがヤクザばりの敵つい表情で、一際大きな欠片を先ほどモニターを蹴飛ばしたハイカットの底で踏みつけた。ぱき、と小さな音を立てて欠片が小さく砕けると同時に、巨大な広間のようになっている空間の両側、二階から一階に続く緩やかな傾斜の階段から、黒いスーツ姿のガードマン達がぞろぞろと降りてきた。中には階段から降りるのが億劫なのか、そのまま二階の手すりを乗り越え飛び降りている者まで見える。

「へ〜……金ありますねえ、若いくせして」

「案外多いな」

チーと総兵が敵つい表情を壊さぬまま呟くと、全員は横一列に綺麗に並んだ。ガードマン達も無表情を貫き通して、歩みを止める。

六人と、およそ二十人近く。先遣隊のようなものだろう、邸の奥に行けば行くほど、数は増していくに違いない。

それでも突っ込まないワケにはいかないのが、こいつ等なのであ

る。

「お前等全員、ブラッド・フェスティバル決定じゃあああ！」

全員（衣翠を除く）は勢いよく叫ぶと、待ち構えていたガードマン達へと突っ込んでいった。彼等も高校生相手とはいえ、本気の構えを見せる。

と、先頭に陣取っていた一人が、手負いの猪の如くスピードで突進してくるチーを目で捉えた。確実に、こつちへ来る。

「うおらああああ！」

もはや自らが女子高生という事を忘れているチー。先頭の何人が一斉に構え、もう間隔がほぼ縮まってきたという所まで来ている。

「あ」

お約束というべきか、赤絨毯の床に足を取られたチビは全速力で走っていたスピードも相まって、顔面から転んだ。

「ちよろいな」と先頭の一人が嘲り笑った瞬間。

「転んだ〜、とか言うかボケエエエ！」

そう叫ぶやいなや、チーは前のめりになった体勢から両手を床に着き、両足で先頭の一人の顔面を、みさんの「おもいっきりイテレビ」並みに思いっきり蹴飛ばした。砕けたグラスンと共に、数人の仲間を巻き添えにして後方に転げ飛ぶ。

「オイお前よお、殺すなよ頼むから。っていうか、アレ、俺いいと

も録画予約してきたっけ」

その隣では総兵がチーに忠告しながらも、早くも打ち倒した数人の山の上で、いいともを録画したかどうか思い出そうとしている。

「大丈夫よ総兵、私がタモさんの素敵な姿を見逃すとも思ってた…?」

衣翠が淡々と呟く。先刻までウルトラバイオレット防止に役立っていた日傘を、元通りに畳み、ガードマン達の鼻っ柱を手当たり次第叩き割りながら。ちなみに彼女の場合は、ある位置に直立したまま腕だけを動かして、近づいてくる連中の急所を的確に突いているのである。

「こいつのグラサン叩き割ってもいいかなー？」

「いいともー」

顔を凄ませ、何人ものガードマンの屍（気絶体）の中央で、最後の一人の襟首を引つ掴んだまま沙夜が問うと、倒れた一人のガードマンの背中の上であぐらをかき、PSPでモンスターハンターのプレイに余念が無い洋司が応答する。

そして、一番の変わり様を呈しているのが。

「このグラサン、貰ってもいいかなー」

「いいともー！」

レンズにひびが入った眼鏡を片手に、自らがノックダウンさせたガードマンから奪い取ったグラサンを高々と掲げて、普段と表情を一変させた祐也がタモさんを演じた。どっちかと言えば気弱そうだ

った印象はがらりと変わって、眼は据わり、額に青筋が浮かび、制服のズボンのポケットに片手をつっ込んでいる。

眼鏡が外れ、緊迫の場面に長時間置かれた時に覚醒する【ダーク術也】降臨である。ちなみに眼鏡をかけている平常時の術也よりかは、数段、二枚目になる。

「オイ、コラア。ナメんじゃないよ、これっぽっちじゃブラッド・フェスティバルもできねーんだよ」

「もつと来てくれても結構ですよコノヤロー、ウォーミングアップ済みだぞ、身体に優しいぞバカヤロー」

ダーク術也とチーがドスの利いた声で、残った数人のガードマンを脅した。後の四人も、打ち倒した先遣隊の屍（気絶体）を足元にんだコラ、あ？ と言いたげに殺気剥き出しという戦場さながらの雰囲気醸し出している。

「次が来ねーなら、テメー等始末して奥行くぞ」

「何だ、高校生じゃないか」

総兵の言葉の後に頭上から響いた声に、六人は一斉に上を向いた。両側の階段に挟まれた二階正面のドアが開いて、数人のガードマン達が出てきた。先頭の一人は、一際背が高く体躯が大きい。一階である玄関前の大広間を見下ろすような格好で、その男は細い眉をひそめた。周りのガードマン達も、凄惨な状況を見て、無表情だった顔を微かにではあるが苦々しく歪めている。

「君達は、彼女の教え子か？」

「国語教えてもらってますよ茶髪野郎。んだ、テメーが森塚か」

チーが怪訝そうに、見下ろしてくる男を睨みながら答える。

「森塚様は他の部屋にいる。それにしても、派手にやってくれたな」
「えっ？ 何、ハゲ？ や、別に俺等さ、お前をハゲにする為に来たワケじゃねーよ？ 元からハゲだし」

総兵が挑発する気満々の言葉で、男を刺激する。ひくつと男の口角が、痙攣したように吊り上がる。漆黒の眼が、じろりと下方を睨んだ。

「残念だが、お前等ガキ共に……」

「んだハゲ、聴こえねーよ。もっかい言えよハゲ、頼んでやるからさハゲ」

衣翠を除く五人がぴったりとユニゾンした声で、男を一斉に罵倒する。

「……残念だが、お前等ガ……」

「何、アレか。自分は進化したハゲって言ってるのか。ハゲは進化しないんだよ。謝れ、生物の進化論を説いたダーウィンに謝れ。ダーウィンの奥さんにも謝れ、エマに謝れ、旧名エマ・ウエストウッドに謝れ」

「うるせエエエ！ 何がハゲだバカヤロー！ 調子こいてたら若ハゲになるんだよ！ 特に先頭の背エ高い奴、オメーに一番忠告しておきたい！」

冷静な面を無くしてしまった先頭の男が叫ぶ。D組連中は白を切つて、チーに至っては口笛を吹きながら洋司のモンスターハントを見物している。

「もういーわ！ テメー等、生きて帰さねーからなバカヤロー！」

熱り立った先頭に促されて、一番後ろの一人がスーツの上着の中から、スイッチのようなものを取り出した。その赤いボタンを、何の躊躇もなく押す。

「え」

次の瞬間、D組連中の一人ひとりの足元からは床が消え失せ、その代わりに真っ暗な穴が広がった。

「ぎゃあああ！」

「ドリフのコントみたいですねー」

絶叫をたなびかせながら、すとーんと下降していった六人組を送り、床が元通りに閉じると広間には静寂のみが残った。

第二十話 ドリフの階段コントの真似は下手すりゃ死ぬから気をつける（後書き

文体&展開の粗さがこの頃目立つようになりました・、これから自分、どうなるんだろ……。

第二十一話 女子高生の方々に次ぐ、自分の身は自分で守れ

「いただ……」

ぼうつとした意識の中から目を覚ましたチーは、したたかに打ちつけた腰に手を当てたまま、ゆっくりと立ち上がった。自分達が強行突破して侵入した場所は一階の玄関、このつまり、ここは地下室という事になる。埃くさい、湿った空気の充満した薄暗い部屋の中でチーが天井を見上げると、天井の際に小さな窓が取り付けられていて、開いたその窓から風が吹きこんできた。そこから落ちてくる光が、辛うじて地下室である部屋を薄く照らしている。

スカートについた埃を払い落しながら、ぐるりと部屋の中を見回した。物置に使われているのか、木製の大型コンテナが無造作に積みまれ、麻の太いロープが転がっている。

「みんなバラバラに落ちちゃったんですかね」

ライトブルーの瞳を不服そうに細めたチーは、腕組みしてふーっと息を吐いた。それと同時に、埃をすっぽりと被ったコンテナの上に、真っ黒な犬の縫いぐるみが放置されているのに目が止まる。

しばらく、じっとその縫いぐるみを見つめていたチーはハイカットを履いたままの足で、縫いぐるみに近寄り、埃を丁寧にはらって抱き上げた。

円らな真っ黒い瞳が、じっとチーを見つめる。

「よーしよし、可愛いですね、お前は。かわいそーに、ずっと置きっぱなしだったんですね。私がお外に連れてってあげますよ、名前はいつと……総兵でいいですかね」

「よくなエエエ！」

後ろからの怒声に気づいた瞬間、後ろから回された手に首を掴まれて、チーは「くえっ」と奇声を上げた。手の主はチーの頭を自分の方へと身体ごと回すと、えらく不愉快そうにチーを睨んだ。

「だーれが総兵だバカヤロー。拾った犬の縫いぐるみに人の名前使いやがって」

「あ、初代総兵君いたんですか」

首をきつく締め上げられたまま、淡々とほざくチーの首に手をかけているのは、もちろん総兵である。グレーを帯びた深いブルーの眼には若干の苛立ちが宿っている。

「ちょ、総兵君やめてくれませんか？ サドでしたっけ総兵君、むしろ佐渡じゃないですか。いよっ、佐渡海峡」

「ナメてんのかテメエ」

「北野まち子」

「いい加減にしるよ」

北野まち子さんが歌う「佐渡海峡」を引き合いに出されて、本格的にキレ始めた総兵。首を締め上げられても、平気な顔で総兵式号を抱き上げたまま「佐渡海峡」を歌い出すチー。

S Mプレイ紛いの行為中でも、いつもの二人である。

「や、ちょっ、マジで離してくれませんか。総兵君とこんなトコでこんな事やってたら、もう売却済みと思われるじゃないですか」

「お前が彼女になったら、俺ストレスで死ぬわ」

「総兵君の彼女になったら殺されそうだから嫌です。っていつか、こんなトコで二人きりと言うシチュエーションも若干嫌です」

ぎりぎりと言いかかる圧力の影響さえも受けずに、すらすら喋るチー。

「どういう意味だコラ」

「そういう意味です。男はみんな獣ですから」

「お前みてーな貧乳の幼児体型に欲情するか」

「キヤー総兵君セクハラー。貧乳とか言わないで下さい。っていうか、私ごときのパンチラ見て赤面した人がよくそんな口叩けますね」

「蒸し返すんじゃないよ！」

イライラメーターが最高潮に達した総兵は、コンテナの山にチーを投げつけた。それでも見事に、コンテナの山の頂上に着地したチーを見て、苦々しげに舌打ちする。

「それじゃ、童貞硬派は置いといて脱出しますかね」

「オイお前、今何だった」

「さーで、脱出しましょうかね、弐号君」

総兵に言っではいけない禁句をさらっと言い放つと、チーは唯一の出入り口である硬い木製の扉の前に立った。しばらくの沈黙が続いた後に、チーがひょいっと首を総兵の方に向ける。ライトブルーの瞳がくりつと回って、小さい顔の隣で銀色がかつた桃髪が揺れた。

「何めちやくちや不機嫌そうな顔してんですか。早く燃やして下さいよ」

チーの言葉の地雷で、完璧にキレた総兵はチーを無視して、つかつかと扉に歩み寄った。それでも反省の色はおるか、恐怖の色をもう少しも見せないチーに、額に青筋を浮かべたまま総兵はノブに手か

けた。

「どーせテメーも処女だろが」

いつもより低い声音の総兵の顔を見上げて、チーは弐号を抱きかかえたまま、子猫みたいに目をぐるりと回して好奇心を隠せないような笑みを浮かべた。

「奪ってくるのは総兵君かもしれませんね？」

「ほざきやがれ」

少し顔を赤くして、声を元のトーンに戻した総兵は右手に明るい炎を灯した。

弐号の瞳に映り込んだ炎は、扉に触れたと同時に弾かれたように大きく燃え上がり、扉全体を覆い尽くした。

「どっしり……」

同時刻。

鳴は森塚に部屋から出ていってもらうと、膝を抱えて、胸の奥から湧き上がってくる不安に頭を悩ませられていた。

六人が助けに来てくれたのは嬉しかった。自分がここに強制的に連れてこられた事を、学校にいる誰も知らないと思っていた事もあつた。それに彼女自身、ここに束縛され続ける事自体、辛すぎた。幼馴染である勇司が自分を騙したという事も、鳴の胸に棘のように突き刺さる。

が、その事以前に彼女が辛さを感じる原因は。

助けに来てくれたD組連中の中に、榊がいなかった事だつた。

第二十二話 ヘルメットはフルフェイスの方がカッコイイと思うよ？

「総兵君、バイク運転できますよね？」

チーがライトブルーの瞳をきらきら輝かせながら、涎よだれを垂らさんばかりに、円状の一段高くなっているディスプレイステージの上に置かれた、黒くハードなフォルムの巨大なバイクに見とれていた。黒い革張りの広い座席の部分に、同じく漆黒のフルフェイスのヘルメットが乗っている。

総兵はガードマン達がこちらに来ていないか確かめながら、ゆっくりバイクの方へと歩み寄った。

「バカ言え。お前ノーヘルで相乗りする気が」

「そつちこそバカ言ってるんじゃないですよ。ヘルメットは私のものです」

「ふざけんなよコノヤロー、バイクに乗る前に頭蓋骨を粉碎してやるるか」

そつは言いながらも、総兵はキーが挿し込まれているのを確認しながら、周りを囲っている鎖に目をやった。

「バイクならガードマンの人達に会っても、すぐに引き離せますよ。中は広いし、階段さえ何とかすればいけるんじゃないですか？」

「階段ってお前、凄腕のライダーじゃねーからな俺。強いて言うならシュワちゃんだ」

「じゃあ私はジョン・コナーですね」

チーはそう言うと、ふとバイクから少し離れた所に、同じフルフェイスのヘルメットが転がっているのを見つけた。レンズ部分の半

分が欠けて、残った部分にも白く亀裂が走っている。プラスチックの本体も、元は目も覚めるような鮮やかな赤に塗られていたのだから、今は無数の傷が刻みつけられ、滑らかだった表面に凹凸おとつとつが生まれている。

近寄って拾い上げてみると、壊れて駄目になってしまっているのが、痛々しい程に確認できた。

「何やってんだ、お前」

訝しそうに総兵が訊くと、チーは壊れたヘルメットを総兵式号と共に抱え上げて、総兵の方へ戻っていった。チーに抱えられたヘルメットを一目見て、彼女の意図を察したのか、総兵は眉間に皺を深く刻んだ。

「止せ。“使った後”の状態で相乗りなんぞ、ノーヘルより危ねえ」
「大丈夫ですよ」

ぶつと大福のようにむくれて、チーは床にしゃがみ込みヘルメットを床に置いた。そのまま少し下がって、目を閉じてすつと合掌する。

さっそく自分の“特異体質”を使おうとしているチーを、危なっかしそうに見ている総兵が心配そうに事の成り行きを見つめていると、さっそくヘルメットに変化が現れた。

失われていた半分のレンズが、残っていたレンズから生えるように伸び、あっという間に原型へ戻ったかと思うと亀裂は一瞬で塞がれた。次にプラスチックの本体も、傷はどんどん無くなり、つるつるとした平らな面を取り戻している。色褪せていた赤も、鮮やかな彩りを取り戻していく。

新品同等の状態に戻されたヘルメットは、スタイリッシュなデザインを取り戻して、ミラー加工のレンズも光を放ち始めた。チーは

ひょいっとヘルメットを拾い上げ、バイクの方へと戻ってくる。
ひどく息が上がり、頬が真っ赤に紅潮している。華奢な肩を大きく上下に動かして、いつも軽快にくるくる回っているライトブルーの瞳が潤んで、緩慢に瞬きした。

「言わんこつちやねえ」

溜め息をついて、戻ってきたチーの頭を叩くと、総兵はステージの周りを囲んでいたロープを外した。バイクの上に乗ったヘルメットを取って頭から被ると、ステージの端に腰かけて息を整えていたチーのリボンを解いた。銀色がかった桃髪が、さらさらと肩に流れ落ちる。

厚い生地 of 黒いリボンを、チーのスカートの上に落とすと、総兵はバイクの様子を確認し始めた。

「ポニーテールじゃフルフェイスは被れねーぞ。さっさとしゃがめ、ガードマンの連中が来ちまう」

「はい……」

のろのろとヘルメットを被ったチーの細い腕を引っ張って、後ろに乗せると、総兵はガソリンの残量を確認してから、エンジンをかけた。エンジンが低く唸って、車体を大きく振動させる。

「やーて」

小さく呟くと、総兵は後ろを向いた。チーはすっかり総兵の腰に捕まってはいるものの、まだ意気消沈しているように見える。

「上と下、どっちだ？」

「下ネタは嫌ですから上がいいです」

上等だ、と言い放ってアクセルを踏むと同時に、「いたぞ！」と叫ぶ声が頭上から響いた。下方を見下ろせる造りになっている、天井近くから突き出た内部のバルコニーで二人を発見したガードマンが、おそらくは後ろに大勢いるであろう仲間伝えたのだろう。

早くも大勢の人間が走ってくる足音が響いてきた。

ちっと舌打ちして、総兵は奥の通路の方へと突っ込んでいった。広い廊下に、エンジン音が響き渡る。風が身体の形を捉えるように流れ、過ぎ去っていく。

後ろでチーが、あははと笑った。

「ショータイムの始まりですね」

「ほざきやがれ、後ろ見てみる」

総兵がいやに冷静な声でチーを促した。チーが振り落とされないように注意しながら、ゆっくり後ろを振り向くと。

黒光りするボディが異様な外車が、猛スピードで廊下を、二人のバイクを追って驍進していた。

「車は反則ですよねえ、高校生相手に」

フルフェイスの中で欠伸びながら、チーは地下室から失敬してきた極小サイズのカラーボールをシャツの中から引っ張り出して、前を向くと後ろを振り返らずに、腕を振り子のように動かして後方へ

と投げつけた。

第二十三話 隠しボタンには気をつける

「ああああああ！」

絶叫しながら森塚邸の一階廊下を驀進していたのは、沙夜と洋司だった。

この二人組は一緒に地下のワインセラーに落とされたのだが、沙夜が持ち前の怪力で扉を粉々に破壊し、一階に戻ったまでは良い展開だったのだが。

一階に上がって早速ガードマンの連中に見つかり、廊下を突っ走るハメになったのである。

「ちくしょおお！　　こういう肺してた、あいつ等！　　そして俺等！」

「喋ってる暇あったら走れバカヤロー！　　捕まったら一巻の終わりよ！」

「イヤ、俺は十五巻ぐらい出てる気がする！」

「じゃあ十五巻の終わりで！」

こんな危機的状況下においても、ボケとツツコミとの縁を切る事ができないD組生徒である二人は全速力のスピードから無理矢理、方向転換を行って曲がり角を曲がった。目前には、自分達が突入した玄関の広間が見えてきた。左右から伸びた、二階に続く緩やかな傾斜の階段も一緒に見えてくる。

「二階に上がるべき、かしらね」

「鳴は良い待遇受けてるだろうし、もっと上の階なんじゃねーの？」

ガードマンの追跡から逃れながら、二人は少し落ち着いた口調で話し合った。

「くっそ、衿也か衣翠がいれば分かんのかなあ」

「っていうか、あたしはチーが一番心配よ。あいつ、ちゃんと生き延びてんのかしら」

二人が自分の状況を差し置いて、他の連中を心配し始めた時、広間の方から何やらエンジン音のようなものが聞こえてきた。は？と二人がその方角に目を凝らすと、壊された玄関から巨大なフォルムのバイクが飛び込んできた。

バイクは一旦広間の床をターンし、ブレーキを踏んだ。ちゃんと座席に座っている運転手の肩に捕まって、バイクの座席の後ろに立っている小さい相乗りが沙夜と洋司の方を向いた。遠目に白い半袖のシャツと、赤いタータンチェックのプリーツスカートを着ているのが確認できる。

後ろの相乗りは真っ赤に塗られたフルフェイスのヘルメットの、レンズ部分だけを親指で跳ね上げた。

「まさか」

沙夜の紫の瞳が、怪訝そうに細まった。

「沙夜ちゃん！ 洋司君！ 生きてましたか！？」

ヘルメットのレンズの下に隠れていた、ライトブルーの瞳をぐるっと回して、チーは二人に思い切り手を振った。どうやら運転手の方は総兵らしい。

あいつ二輪の免許持ってたっけ、と思考を巡らせながら、洋司は声を張り上げた。

「お前等ああ！ さっさと二階に上がれ！ 鳴は上だつて！」
「えー、バイク降りろつて事ですか。せつかくバイク速いのに」
「バイクに未練残してんじゃねーよ！ さっさと上がれ、何の為にここ来たんだバカヤロー！」

洋司が怒鳴つても、チーは「ヤダー」とほざきながら、バイクの上立ったままである。と、その瞬間、洋司は勢い余つてすつ転んだ。ガードマン達の、サングラスの奥に潜んだ目が光る。

「洋司いい！ テメつ、何すつ転んで……」

沙夜が怒鳴り散らして洋司を罵倒した、その次の瞬間。

すつ転んだ洋司の手が、廊下の床にぽつんと空けられた穴に設置されていたボタンにぶつかった。
かちつと音がする。

「あ」

洋司と沙夜が呟くと、広間の両方の階段がガタンと音を立てて、段を無くして平らとなった。ちょうどドリフターズの階段コントのようじ。

「キヤー！ 階段コント出たー！ ドリフ出たー！！」

きやつきやつと、階段コント出現にはしゃぐチー。呆然としたまま、その場に止まってしまった沙夜・洋司、ガードマン全員。

「何コレ、何で階段コントな訳。何で、こんなトコにボタン設置してる訳」

「フーかさ、何であいつ等、せつかく階段フラットになったのに行かない訳。何ではしゃいでる訳。どこでバイク調達してきた訳」

無表情で沙夜は腰に手を当てたまま。洋司は床に這いつくばったまま、自らの心情を語る。

が、後ろではガードマン達が、不意打ちドリフの階段コントから立ち直って、体勢を整え始めた。それでも無表情を保ち切って、ぶつぶつと呟いている二人。

「何で総兵喋らない訳。そういうキャラだった訳」

「てか、もう訳が語尾になってるみたいな感覚な訳」

「いや、それはさ」

沙夜が最後にそう言うと同時に、ガードマン達が行動を開始した。

「あいつ等がバカだからだよオオ！」

「あちやま、あの人達、一人につき一本骨折が良いトコですかね」

チーはヘルメットのレンズに手をかけたまま、他人事の口調で廊下での乱闘を見つめた。総兵がやれやれ、と首を振って後ろを向く。

「ま、あいつ等が時間稼いでる間にさっさと行くか。階段コントが今こそ役に立つ」

ヘルメットのレンズを元に戻すと、チーはもう一度振り返った。レンズの奥に隠れてしまったライトブルーの瞳が、ガードマン達に猛威を振るう二人を見つめる。

「総兵君、さっき榊せんせいみたいな口調でしたね」

「あんな薄情者と一緒にすんな」

総兵はそう言うと、アクセルを踏み込んでフラットになった階段を上がり、二階へと突入した。

第二十四話 騒動の種を蒔いた奴じゃない、発芽させた奴が悪いんだ。

「んもっ！ 開いてよっ！」

鳴は静電気を喰らった代わりに握る事ができたドアノブをがたがたと引つ張って、脱出を試みていた。森塚が出ていってから約十五分、叩いたり蹴飛ばしたりしてこそいるが、びくともしないドアに鳴は溜め息をついてドアノブから手を離れた。

背中をドアに向けて座り込むと膝を抱える。俯いたまま何度か瞬きすると、背後のドアを二回ノックした。

「すみません」

白くしなやかな指が、鳶色の瞳に伸びる。同時に右目が瞼を閉じた。

「コンタクトのレンズケース、持ってきてくれますか？」

外したコンタクトレンズを見つめる鳴の左目は、右目の鳶色とは違う、鮮やかな緑色に深く澄み渡っていた。ドアの外で誰かが廊下を走る音が聞こえてきた。

「やっぱり裸眼はきついわね……」

「このレンズもある意味キツイぞ」

「グラサンしてるよりかは視界良好でしょ……」

森塚邸、一階廊下。

足音を忍ばせながら廊下を歩く二人の人影が見えた。衣翠と桁也である。屋外に追い出されてしまった二人は開いていた窓から再び侵入を図り、数名のボディガード達を気絶させてここまで来ているのであった。ただ衣翠はいつもかけている眼鏡のレンズを粉々にされてしまい、裸眼の状態で歩く羽目になっていた。【ダーク桁也】再臨を未然に防ぐ為に、ひびの入っている眼鏡を半ば強制的にかけさせられた桁也も頭を強打してしまっている。

それでも探知型の特異体質を持つ二人は懸命に神経を集中させて、鳴の居場所を見つけ出そうとしていた。衣翠は眉間にしわを寄せて、足を止める。桁也も同時に足を止めた。

二人の間に長い沈黙が訪れる。

「ノイズがひどすぎる……鳴どころかチー達も何処にいるやら」
「こつちも。砂嵐が混じってばっかだ、映るのはどうでもいいところばっかだしな」

落胆して衣翠は頭を振った。このままじゃ全員ここから摘まみ出されてしまう。鳴を助け出す事もできず、特異体質の口止めをする事さえできない。そうなってしまえば、D組全員に迷惑をかけてしまう。

何より榊を失望させる事は絶対にできない。飄々としてこそいるが、今まで自分達の特異体質が校内に広まらなかつたのは彼が隠蔽に尽力してくれたからだ。語らずとも、自身が特異体質のせいで辛い思いをしてきた事は窺え知れている。

「どっすりゃいいの……」

いくら聴覚を研ぎ澄ましてもノイズばかりがひどくなる。ヒントの合わない視界も手伝って頭痛がした。高まるノイズだけが頭の中

に響いていく。無機質な雑音は思考回路をどンドン掻き回す。
その時だった。

「へっ？」

二人は同時に声を上げた。途切れかかった集中力が瞬時に高まっていく。ノイズも激しさを増し、がんがんと熱を帯びて鳴り響く。衣翠は思わず壁に凭れかかって背中を引きずりながらしゃがみ込んだ。冴えていく感覚の渦にノイズが巻き込まれて身体の芯を戦慄させる。裕也が森塚邸に張り巡らせた視界のヴィジョンも一面砂嵐に覆われ、モノクロのドットの点滅が加速して網膜を焼く。言葉にできない衝撃を受けて思わず頭を掴むと、拍子で眼鏡が外れ落ちた。額に脂汗がにじむ。

極限まで研ぎ澄まされた、逆巻く感覚の渦の中で弾け飛ぶノイズ。止まない、モノクロの砂塵を舞わせる砂嵐。

白い光の筋が、それらを瞬時に引き裂いた。

疾風が吹き抜けるような音と共に、ノイズの氾濫する感覚の渦を一直線に突き上げて。

砂嵐のヴィジョンを横一文字に切り裂いて。

じくざぐとした歪こまで鋭利な残響と軌跡が、空白になった二人の感覚に余韻を残す。

まさに一瞬の出来事。

「え……」

衣翠は呆然としたまま、鷲掴みにしていた髪を離した。向かいでは頭を掴んだままの衿也が、肩で荒い息をしている。外れた眼鏡が廊下に転がり、ぼやけた視界の中でそれだけにピントが合った。

「“接触”、したよな」

喉の奥から声を絞り出しながら、衿也は腰を落とした。俯いたまま、信じられないと言いたげな表情で衣翠の方を向く。

「もうひとり……」

初めて“接触”を体験した衣翠は、粟立つ腕を押さえて震える息を吐いた。

「もうひとり、いるわ。特異体質を持った人間が。私達以外に」

「何なんだ、お前等！？俺に何がしたい！」

二階廊下。

ヘルメットのレンズ越しに総兵は前方で騒いでいる男を睨んだ。わざわざ三階の階段をスルして、廊下の付き当たりまで追い詰めたのだ。総兵の後ろではチーが怪訝そうな表情をヘルメットの下に隠している。

「別段深い意味はねーよ。ただ単に」

そこまで言っつて総兵は目を細めた。

「元凶はあんたなんだろ。償ってもらっつぞ、こんな騒動巻き起こしやがって。ついでにガイド兼人質だコノヤロー」

第二十五話 泣くんじやないよ、お祖母ちゃんがホラ、黒飴あげるから。

朱城高校、保健室。

誰も来ていない保健室で一人、ノートパソコンに向かっていた唯鶴はキーから指を離し、頬杖について発光するディスプレイを見つめた。異なる彩色を放つ両の瞳に、ディスプレイに打ち込まれた文字が映る。

その時、携帯電話の着信音が鳴り響く。ひよいと眉を上げて、濃いベージュのチノパンのポケットから光を点滅させている携帯電話を引っ張り出す。画面を親指で押し上げると、心当たりの無い番号が表示されていた。訝しがりながらも通話ボタンを押して、耳に押し当てる。

「もしもし?」

「唯鶴。私」

聞こえてきたのは、予想外にも彼女の従妹に当たる人物

衣翠の声だった。無感動な声は、普段と比べてやや硬く早口になっている。唯鶴は何か思考を巡らせているかのように目を細め、眉根を寄せた。

「どっからかけてんの?」

「他の奴から奪った携帯」

「あんたら、鳴を拉致った大富豪のトコにいるんだっけ? 何かあったの?」

「予想外の事が起きた。私達以外に特異体質を持つてる人間がいる」「特異体質を?」

唯鶴の顔が一気に険しくなる。艶めかしい唇を真っ直ぐ結び、デ

スクチエアに凭れかかると脚を組んで肘を抱えた。

「さつき術也と同時に“接触”した。それ以前に特異体質での探知も邪魔された」

「新しいデータが取れたっていうワケね」

「違う。そういう話じゃない」

若干苛立った口調で衣翠が畳みかける。唯鶴は分かっているわよ、と呟いてワープロソフトを立ち上げた。保存ファイル一覧からすぐに目当てのファイルを見つけ出し、中身を開いた。文字がびっしり打ち込まれたページが表示される。

肩で携帯電話を支えながらページを切り替えると、まだ真っ白なページに辿り着いた。

「事がだんだん大きくなってる予感がする。良い予感じゃない」

「特異体質を持った、他の人間が関与してるってワケ？」

「一概には言えない。ただ」

一呼吸置いて、衣翠は口を開いた。

「その人間が一番危険に晒されてるのは、ほぼ間違いないと思うわ」

「ふうん……あの高校生達も、か」

モニタールーム。

何十個も設置した四角形のモニターに、森塚邸内部の様子がモニタリングされている。定期的に切り替わる画面に、時折制服姿の人

影が映った。その映像が切り替わって、気絶させられ山と積み上げられたボディガード達。モニターを管理していた一人が渋面になる。その後ろで森塚は表情一つ変えずに、制服姿の人影が映るモニターにのみ視線を注いでいた。

「面白い事になってきた」

そう言うのと薄い唇の端を吊り上げて、森塚はほくそ笑んだ。

「えー、バイク降りるんですか」

「バカヤロー。こいつ後ろに括りつけて走るつもりかテメ　は。時代遅れの暴走族の制裁行為じゃねーんだぞ」

勇司をガイド兼人質として手に入れた二人はバイクを降りて、鳴の閉じ込められている三階へと向かおうとしていた。観念して俯いたまま、二人の後ろをさえない足取りで歩く勇司は憔悴しきっている。

「それにしても、まあ」

チーが呟いて後ろを振り返り、軽蔑を込めた目で勇司を見つめた。

「社長サマに忠実ですね。幼馴染まで売るなんて」

「……」

皮肉られた勇司は面を伏せたまま、何も答えずに階段を上がり始めた。チーはぴくつと眉を動かすと、ふいつと小さいポニーテールを揺らして総兵の後を走って追いかけた。踊り場に差しかかり、フ

ランス窓の形を模した小さな窓から入ってきた光が床を照らした。

「あんた、止めようとも思わなかったのか。あの森塚とかいう男が何しでかそうとしてるか、分かってたんだろ」

「……まあ」

「知ってて加担してたのかよ。つくづく汚ねーな、テメー等は。砂場に落つことした飴玉の方がよっぽどマシだぜ」

「砂場ナメちゃいけませんよ総兵君。近くに水道無かったら、アレ、ホント泣きたくなるんですから」

「テメーは水道で悲しい過去を洗い流してこい、いますぐに」

冷徹にチーを突き離すと、総兵は後ろを振り向いた。勇司の顔が苦渋に歪んでいる。総兵は目を細めると舌打ちした。

「そんな顔するぐらいなら、やるなっつーの。情けねーなオイ」

「……きくな」

「あ？」

勇司の歩みが止まって、総兵は怪訝そうに彼を見下ろした。チーも総兵の上着の裾を引っ張ったまま振り返る。俯いているせいで表情を読み取る事ができない。

「何も知らないくせして……人を見下しやがって」

声が震えているのが分かった瞬間に、三階の廊下の奥から足音が響いてきた。二階からも音が響いている。そして確実にこちらへと向かってきていた。二人の顔が苦々しげな表情を浮かべた。

「いい気になつてられるのも、今のうちだ」

二階からやってきた大勢のガードマン達を背後に、勇司は二人を睨みつけた。

第二十六話 ドロップキックって語感がカッコイイよね

用意してもらったレンズケースに洗浄液を注いでコンタクトレンズを入れると、鳴は幾度か瞬きをした。蓋を閉めて鏡台の前に置くと、曇り一つない綺麗な鏡面に自分の顔が映る。鳶色の前髪の下に、カラーレンズで隠されていた翠玉のような瞳が覗いていた。

鳴は黙ったまま、小さな肩に流れ落ちる髪を耳にひっかけた。白くしなやかな指の隙間から零れ落ちた中に、餡色がかつた金髪が見え隠れする。最近染め直していないから、元の色が戻りつつあるのは当然だ。

「Auf Wiedersehen, Mom」

ぼつりと、ドイツ語で呟くと。

鳴は鏡台の前を離れて、ドアの前に立った。ごくりと唾を飲み込み、壁に手を当ててからドアノブを握る。静電気はこない。

ガードマンを振り切っても、ここを早く出なければならぬ。意を決して扉を開けて、廊下に飛び出す。

「……へ？」

廊下には人っ子一人、いなかった。

「くっそ！ キリねえぜ、全く！」

総兵は額の汗を乱暴に拭って、チーの姿を探した。スカート姿な

のも気にせず、凄まじい殺傷力を伴ったプロレスラー顔負けのドロップキックを階段下の連中に食らわせている。

「相変わらずじゃねーかよ、あの野郎」

舌打ち混じりに呟きながら、背後から近寄ってきたガードマンのサングラスを裏拳で叩き割ると、前方に向かってハイキックを食らわせる。首筋に打撃を喰らったガードマンがよろめいて、三、四人を巻き添えにして倒れ込む。が、首筋に向かって突き上げた右脚を隣の坊主頭に掴まれた。

「げ」

強い力で脚を引っ張られ、とっさに左に足を捻って身体を翻す。そのまま逆立ちの格好になると、思い切り右脚を引っ張ると同時に、左脚を後方に振りかぶった。坊主頭が思わず右脚を離れた瞬間に、頭頂部に左足の爪先が突き落とされる。左足の反動を使って立ち上がると、倒れた仲間達を踏み越えて、新たなガードマン達が総兵に襲いかかってきた。

「ホント、いつになったら終わるんだか……」

無理して方向を変えた右の足首が痛む。形勢は徐々に不利になってきていた。

どうしたものかと総兵が思考を巡らせていると、チーの悲鳴が耳を劈いた。はっとして振り返ると、三階へと続く階段の下から響いた声は、ぶつりと途切れてしまった。近づいてきたガードマン三人を左脚の回し蹴りで一気に薙ぎ倒すと、総兵は階段の手すりから身を乗り出して二階の様子を窺った。

髪が解けてしまったチーが、目を閉じてぐったりとしたまま、体

格の良いガードマンに抱きかかえられている。チーを抱えたガードマンの傍で、もう一人のガードマンが白いハンカチを丁寧に畳んでポケットに押しこんでいる。黒いリボンが階段に落ちているのを見て、総兵は愕然とした。

チーの昏倒を確認したガードマン達は、チーを二階の奥の方へと連れて行ってしまった。総兵の方は見向きもしない。

「待て！」

手すりから身を乗り出そうとした総兵の腕を、優に二メートル近くの身長があるガードマンに掴まれる。振り切ろうとした次の瞬間に、素早く口元にハンカチを押しつけられる。

視界が歪んで、意識が混濁していく。クロロホルムか何かの薬品を染み込ませているのだろう。

遠くなっていく意識の中で、総兵の視界の端に一人の人間が映った。

一階から二階へと続く階段から、その人物は上を見上げたまま身動き一つしない。微かに下方から、甘い香りが漂ってきた。

「……派手にやられたな、お前等」

「はあ……はあ……」

鳴は廊下の壁に凭れかかったまま、乱れた息を整えた。

「さて、ここからどうしよう」

きよろきよろと辺りを見回していると、先ほど通った曲がり角の奥から足音が響いてきた。直感的に危険を感じ取った鳴は、足音を立てないように小走りで突き辺りのドアを駄目元で開き、中に入った。生ぬるい熱を帯びた空気が彼女の身体を包む。

「何、コレ……」

驚いた顔で振り返る、先ほどまで森塚に連絡を入れていたのである。うろつヘッドセットを装着した管制官の視線を気にも留めずに鳴は呟いた。

壁一面に無数のモニターが嵌め込まれ、森塚邸内部のあらゆる場所がモニタリングされていた。一階から三階、庭までもが監視されている。鳴が閉じ込められていた部屋がモニタリングされていないのは、森塚からの指令だろう。付き合うつと了承した訳でもないのに、もう彼女への独占欲が芽生えているらしい。

が、彼女はそんなところには気づきもせずに、あるモニターに目が釘付けになっていた。思わず胸の奥が熱くなる。

「神、先生……」

そのモニターには、いつものようにボーっとした表情で煙草を啜え、頬を何発か張られて意識を取り戻した総兵と話をしている神が映し出されていた。

第二十七話 雷様がきたらね、あんたみたいな悪い子はおへソ取られちゃうんだ

「んで、他の連中は何処にいる？」

榊は立ち上がったまま煙草を啜えて、壁に凭れて頭を押さえている総兵を見下ろした。まだ意識が朦朧としているのだろう。

「分からん、一斉にバラバラにされちまったからな
「バラバラ状態かよ」

舌打ち混じりに煙を吐くと、榊はまだ目を覚まさないチーを一瞥した。総兵の肩に頭を凭れて、いつも子猫みたいにきよろきよろと忙しく動くライトブルーの瞳は瞼に閉ざされている。

「助けに行く、って意気込んだはいいが……限界を思い知っただろ」
「まあな」

淡々とした榊の口調に、総兵は素直に答えた。あの時に榊がいなければ、どうなっていたかは分からない。良い結末を迎えられない事だけは確かだった。

ただ総兵にはどうしても消化しきれない思いがあった。

「……何で助けに来たんだ？」

自分達がいる踊り場と、二階・三階には大勢のガードマン達が気を失って倒れていた。彼等の周りには細かく砕けた氷の破片が散らばって、きらきらと輝いていた。榊が自らの“特異体質”を使って、全員を気絶させたのだ。

今まで極力“特異体質”の使用を避けてきたのは、D組全体

榊に迷惑をかけないつもりであったのに。その榊がいとも簡単に“特異体質”を公のものとしてしまった。

「俺達が苦勞して隠してきたのに何でお前が簡単にバラしてんだ、
って顔してんな」
「当たり前だろ」

総兵がそう言うと、榊は怪訝そうな表情を浮かべて煙草を床に落として、靴の底で火を消した。

「千々波に、事実隠蔽に協力するから行ってこいって言われたんだ
よ」
「唯鶴せんせーが!？」

いきなりチーが総兵の頭に手を置いて飛び起きた。無理矢理押さえつけられた首が嫌な音を立てる。

「テメー、タヌキ寝入りしてやがったな！」

派手な音を響かせてチーの頭を引つ叩く総兵と、「痛いーっ！
総兵君のハゲーっ！」と頭を押さえて叫ぶチーを見下ろして榊は溜め息をついた。

「立てバカヤロー共。救出に行くぞ」
「まだ頭がくらくらしてるから立てません」

「ちよ、だ、誰ですか！ 勝手に入らないで下さい！」

まだ少年のような顔をした若い管制官の制止も聞かずに、鳴はモニターの操作盤の方に駆け寄って、次々と切り替わる幾つものモニター画面を食い入るように見つめた。あるモニターでは一階の廊下を衣翠と桁也が走り、一階から二階への階段付近で沙夜と洋司が立ちほだかるガードマンを蹴散らしている。

一階の廊下を走る衣翠は眼鏡を無くしたまま、桁也はひびの入った眼鏡を「まどろっこしーわ！」と言わんばかりに壁に投げつけ、二人とも視力が低いのに裸眼状態。階段で大乱闘を繰り広げている沙夜はちぎれたネクタイを首からもぎ取り、洋司もニット帽を剥ぎ取られた頭で相手の顎部に頭突きを食らわしている。

四人の身体には、擦り傷や打撲の痕が数え切れないほどに刻まれているのが確認できた。

「何で、ここまでして……」

声が震えて、胸の奥から熱いものが突き上がってきた。じわっと目頭が急速に熱を帯びる。

自分に降りかかる危険にも意を介さずに、D組の六人組は自分を助けに来てくれた。

それに加えて、一瞬だけモニターに映し出された榊。

彼がここに来たのが、自分の為ではなく、自らの教え子達の為であるのだろうか。

それでも彼女にとっては。

七人も、自分を助けに来てくれて本当に嬉しかったのだ。

「ありがとう」

操作盤の中央、様々な色のプラグが接続された中枢基盤に鳴の手が触れたのと、彼女の頬を一筋の涙が伝ったのはほぼ同時だった。

「へっ？」

刹那、ばちつと放電したような音が部屋中に鳴り響くと同時に、全てのモニターが砂嵐に包まれた。無神経なノイズが空気をびりびりと振動させ、肌が粟立つ。

「お、おい！ あんた、何をしたんだよ！」

「えっ？ いや、別に私、何にもしてないですよ！」

鳴が慌てて顔の前で手を振る。慌てた様子でヘッドセットを外し、鳴を押しつけるようにして先ほどの童顔の管制官が中枢基盤を調べ始める。

すぐに管制官の顔が青ざめた。

「接地が破壊されてる！ どうなってんだ！？」

「おかしいぞ！ 雷サージのせいかな？」

「今日は晴れてる！ 雷なんか落ちっこない！」

唾を飛ばして喚きながら、中枢基盤の前で騒ぐ管制官の後ろで、鳴は自分の手をまじまじと見つめた。あの場所に自分が触れた瞬間、モニター一面が砂嵐になり、何やら大事な部分が破壊されてしまったらしい。

その時、扉が開いた。

「おや、やってくれたね。神阪 鳴海さん」

感心したような口ぶりで中に入ってきたのは、森塚だった。

第二十八話 スパイダーマンは赤でも黒でもカツコイ

「そんなに身構えなくても大丈夫。何も取って食おうとはさらさら思っていないからね」

森塚はそう言いながら、砂嵐に切り替わったモニターを眺めて、耳を苛む無神経なノイズに少々顔を歪めた。じろりと森塚を睨んだまま、鳴は微動だにしない。突き刺さるような視線をひよいと首を竦めてから、森塚は容易にかわした。

「ここじゃ騒がすぎる。奥の部屋で話をしよう」

「やーっと片付いた」

殴り飛ばし、蹴り倒し、頭突いて失神させたガードマン達の中で沙夜は腕を組んだ。洋司も口の中に手をつ込み、口内にできた傷から染み出す血の味に顔をしかめている。ニット帽を取った頭は黒髪があちこちに跳ねて、彼の自由奔放さがうかがい知れるようだった。

「あーあ、前歯欠けちまったよ。ハムスターが羨ましいぜ」

「狭ければトイレトペーパーの芯の中でも寝る小動物が？」

「いや、それはキツイな。それならスパイダーマンになりたい。手から蜘蛛の糸出したい」

「いや、もう前歯関係ねーじゃん。動物ですらねーじゃん」

沙夜が汗で額に張り付いた前髪を整えながらツッコむと、一階の廊下の奥から忙しない足音が聞こえてきた。だんだんとこちらに近づいてくるその足音に、二人は顔を上げて、廊下を見遣る。

「衣翠っ！ 大丈夫だったのアンタ！？ 眼鏡は？」

「メガもいい！ 生きてたのか！ お前はやれば多分できる子だっ
てお母さんは信じてましたっ！」

一階廊下の奥から飛び出してきた衣翠と桁也と再会して、それぞれ思った事を口走る沙夜と洋司。衣翠は壁に手をつけて荒い呼吸を整えて、桁也は「誰がメガ也だコラアア！」と怒声を飛ばす。
いつもの空気に戻った四人の雰囲気は、切羽詰まった衣翠の言葉に砕かれた。

「早く行かなきゃ。特異体質を持った誰かが危険に晒されてる」

「誰かって誰よ？」

“特異体質”という語句に反応した洋司が緊迫した声で衣翠に問うと、蒼く艶めく前髪の奥の碧眼がかすかに翳る。

「認めたくない、そうじゃない事を願ってるけど」

ぎりつと奥歯の擦れる音がした。壁についた手が固く握り締められる。

「もしかしたら……鳴かもしれない」

「話って何ですか？ 今さら私に話す事なんてあるのか」

鳴は警戒態勢のまま、モニター室の向かいにある空き部屋の中で森塚と向き合っていた。当の森塚は壁にかけられた、明るい色彩の油絵の横で腕を組み、鳴の視線を無視して窓の外を見つめていた。

「もう後戻りはできないからね。そろそろ本当の事を話そうか」
「本当の事？」

怪訝そうに鳴は細い眉をしかめた。カラーコンタクトを外した、素のままの緑色の瞳がぐりりと動いて、金色が混じる鳶色の髪が揺れる。

「……もう半分、諦めかけていたんだ。運が良かったよ」

昔の話を語り出すかのように森塚は口を開いた。

「モーターダー。スパイダーマンになりたいです。っていうかスパイダーマンになりたい。もうスパイダーマンになりたい。蜘蛛嫌いですけど」

「スパイダーマン、スパイダーマンうるせーんだよ。USJでスパイダーマンの3Dアトラクションだけ回ってる。アレ、最後の「ハイ、チーズ」のトコでピースサイン一人で決め込んでろ」

チーのスパイダーマンへの憧れを軽く踏みにじってから、総兵は

やっこのことで立ち上がった。榊も煙草を床に放って、靴の底で煙草の火を揉み消す。

「さて、最終決戦だな」

第二十八話 スパイダーマンは赤でも黒でもカッコイイ（後書き）

修学旅行のUSJでスパイダーマンのアトラクションに乗ったので、ちよつとネタを盛り込んでみました。スパイダーマン、ハンパなくカッコイイので。

第二十九話 夢の中の事までその人は責任取れません。

「君を助けに来ている生徒達」

そう呟く森塚のレンズの奥の瞳は、瞬間的にあらゆる場所へ視線を飛ばしているかのように焦点が合っておらず、ぼんやりと虚空を見つめている。大きなフランス窓から覗く景色を見つめたまま動かない森塚に、鳴はそれでも唇を噛み締めたまま言葉を返した。

「チーちゃん達が、何ですか？」

「君は、彼等の秘密を知ってるのかい？」

「彼等の秘密？」

「そう」

短く答えると、森塚は鳴の方を向いた。知らないのか、と言いたげなその目に、鳴は数ミリ程度だけ眉を動かす。

秘密 とは、一体何の事だ、と。

「彼等、特異体質を持つてるんだよ」

その言葉が持つ意味を理解すると同時に、鳴の脳裏で二つの映像がフラッシュバックしていく。夜中の学校で炸裂した沙夜の怪力、屋上へと続くドアを氷漬けにしてしまった榊。

それから遅れて、一つの疑問が彼女の頭の中から消えてなくなつた。

ただの高校生である彼等が、何故こんなところまで来れたのか。

「モニターで確認しただけでも十人十色の能力を持つてる。素晴らしいよ、おそらくは幼少期から覚醒していたんだね。制御も発動も

思いのままだ」

淡々と無機質に言葉を紡ぐ森塚の顔を睨んだまま、鳴は不可解だといわんばかりに顔を歪めた。緑色の瞳に鋭利な光が宿り、そこから解き放たれた視線はまっすぐと森塚の目を貫く。

「あなた、チーちゃん達が特異体質を持つてる事を知ってたんですね？ だからあたしをエサにして……」
「違うよ。全ては予想外」

さらりとかわされても、鳴は眼光を弱める事なく、歯をきつく食い縛った。森塚はそれを見つめたまま、やはり無表情を保ち続けた状態で続ける。

「元から君が目当てだったんだ、神阪 鳴海。君は美しい原石、特異体質者の卵なんだよ」

「説明しろよ衣翠！ どうなってるんだ!？」
「鳴が特異体質を持つてるかもしれないってどういう事!？」

全員で三階を目指しながら、衣翠は一階でボディガードを薙ぎ倒していた二人からの質問を受けていた。階段を駆け上がりながら、衣翠は澄んだ碧眼をすっと細める。

「唯鶴から訊いたの。特異体質って、長期間一緒にいると 伝染る

らしいわ」

「伝染る う?」

「そう。鳴は私達と接触する機会が多かったでしょ。元々特異体質の欠片みたいなものを持ってたみたいね。それがあたし達 音源に長く接しすぎたせいで、鳴の資質の 音叉 が震え始めたところじゃない」

「でも、それっておかしくない?」

沙夜が眉を寄せ、ありえないと紫の瞳をわずかに見開く。

「だったら、あたし達の周りの人間、特異体質持ちだらけよ?」

「……言ったでしょ。特異体質を持てる人間なんて限られてる。これも唯鶴から訊いた話だけど、特異体質持ちは普通あたしたちの人間とは違う回路 を持つてるの。普通の人間にもある事はあるけど、その回路はほぼ閉ざされた状態で、開く事は殆どない」

「そりゃまた、何で」

「資質がないから。鳴は資質の欠片を持ってただけ。地球の現人口、たしか六十億人ぐらいだっけ。その中でもひと掴みぐらいしかないんじゃない」

そこまで言うと、全員は一様に口を閉ざす。

「俺達は、異常なんだな」

ぼつりと洋司が呟く。

元から分かっていた事実だったけれども。

「いーたーいー。総兵君のばかばかばか」
「誰がバカだ天然バカ！ いい加減テメーで歩け！」

不意に、場違いで聞き慣れた声があった。気がつけば三階へと続く階段の踊り場に辿り着いている。四人が自然と足を止めると、三階の廊下には三人の人影。

「総兵君のばかあ。昨日の夜は優しくなかったじゃないですか、とろけそうでしたよ私」

「何の話！？ 夢の話だろ、夢の中の俺にまで俺は責任取るつもりは一切ありません！ ハイこれ予防線！」

「嘘つきー。責任とってくださいー。私、もうお嫁いけないんですから」

「いい加減にしるよテメー、俺はもうシユワちゃんと結婚すると決めたんだ。シユワちゃんが俺をアメリカで待ってるから、テメーはその手を離せ」

「オイうるっせーんだよお前等。少ししか進めてねえじゃねーか。追いつかれちゃったよ、そこの連中に」

ふざけた会話を続けていたのは、もちろんチーと総兵。その二人を洪面で睨みつけたまま、榊は露骨に舌打ちした。

「破壊衝動丸出しの連中が揃っちゃったじゃねーか、ったく」

第三十話 LANとか実はよく分からない人が多い

「何の事ですか？……原石？」

「そもそも特異体質っていうのはごく一部の人間に許された特殊な能力さ。それこそ何百万、何千万分の一の確率で開かれざる 回路を開き、その能力を掌握できる人間達がいる。その人間達は君の教え子であり、また君自身でもある」

二人は部屋の中央で視線をぶつけ合ったまま眼窩の中で眼球を少しも身じろがせる事無く、互いに相手の視線に込められた感情を探り合い、奥に潜む真意を掴み取るうとする。鳴は翠玉のように輝く瞳をぐつと細めると、警戒を解かず果敢な動作で唇を開いた。

「私が特異体質者の卵だとして、あなたに何の得があるんです？」
「元々、君が資質を持っていた事は分かった。元は有沢の昔話を聞いて興味があっただけだけどね、写真を見た瞬間に確信したんだ。彼女は僕と同類だとね」

そう言うてから森塚はわずかに眉間に皺を寄せた。真摯な目線を絶えず送ってくる鳴の瞳から逃げ切れずに、レンズの奥の瞳が苦しげに細まる。それを見逃さず鳴はじとりと彼の目を射抜いた。

「どういう意味ですか？」

「僕も特異体質者なんだよ。すっかり錆びついてしまったけれど、昔は【人の心を読み取る】事ができた」

憔悴し切ったような、悟り切ったような口振りで森塚は呟いた。

「特異体質者？ あなたが!？」

鳴が驚きに目を見開くと、森塚はわずかに眼球を動かした。その瞳に狂気の炎が揺らいだのを本能的に直感した瞬間、肌が一樣に粟立っていく。思わず一步後ずさるのと、森塚の手が彼女の腕を掴んだのはほぼ同時だった。

鳴が怯えて顔を上げると、ぎらついた感情に支配された目がすぐに視界に飛び込んでくる。

「知ってるかい？ 特異体質なんてのは、長期間接触しているとかなり低い確率でだが【伝染る】んだ。僕はその低い可能性に懸けたもう一度特異体質を取り戻したいんだよ」

「あなた、特異体質を悪用しようとしてるだけでしょ！？ 嫌です！ 誰があなたみたいな人に協力なんか！」

鳴は必至に手を振り解こうとするが、森塚の手はがっしりと彼女の腕を掴んだままで離れない。嫌悪に満ち溢れた視線に意を介した風も無く、森塚は鳴が暴れるのをものともしない。

「接触なんてのはね、深ければ深いほど【伝染る】可能性が高くなるんだ。だからこうやって……」

言葉が途切れたのに嫌な予感がすると、そのまま身体が強引に森塚の方へと引き寄せられた。はっとしたのも束の間、顎を無理矢理引っ張られて顔を上げさせられる。

「【深い接触】を試みようと思うんだ」

「っらあ！」

聞き慣れた声がして鳴が硬まった身体をびくつかせると、閉ざされていたドアがいきなり吹き飛んだ。二人が予想外の出来事に目を剥くと、ドアが嵌め込まれていたはずの隙間から小さな人影が部屋の中に飛び込んでくる。

元は真っ白だったはずのシャツは砂埃に塗れ、縦に裂けたプリーツスカートを身に纏ったその人影に鳴は開いた口が塞がらなかった。

「おまたせしました、なっちゃん」

リボンが解けて、銀色がかった艶やかな桃髪を肩に垂らしたチーは満面の笑みを浮かべた。モニター越しに見ていたその姿が今まさに目の前に現れたのだ。

チーの登場に森塚は心底悔しそうに歯を食い縛ると、焦りも露わに鳴の顔を自分の方へと乱暴に近づける。

「くそっ！」

二人の唇が触れ合う瞬間にチーの左目が鋭く眇められた。
その途端。

「……え」

ライトブルーの左目に映り込む視界。その視線が切り取る、あ

る限定の空間内 に閉じ込められた鳴の姿が森塚の腕の中から掻き消えて。森塚がそれに気付いたのは、鳴がチーの背後に移動しているのを視覚認識した後だった。

「馬鹿な！」

「全部現実でーすよ。どうせ私達が特異体質者だつて知られてるなら、存分に使わせて頂いたまでの事です」

そこまで言うてから、チーは挑戦的な笑みを浮かべて器用に左目だけをぐいつと細めた。

「私は時間や時空を操る特異体質者。今のはなっちゃんがいる時空間を左目で設定して、時空間配列の原型をちよこつとばかし組み換えただけです。そんなに驚かれるような事した覚えないんですけど」

森塚の明らかに動揺した顔を、不敵な笑みで面白がるように見据えるチーはわずかに唇の口角を持ち上げた。

「それと、四階のマザーコンピュータのLAN接続は切らせてもらいました。あなたの名義で、接続されてた他のコンピュータにメールを送つて あるデータを全消去するように命じましたよ。事のつまり、あなたの大事なデータは四階のマザーコンピュータのみ」

蒼ざめていく森塚の顔を睨んだまま、チーは振り向かず鳴に向かって口を開いた。

「みんなは四階にいます。LAN接続とかを切つたりメールを送つたのは衣翠ちゃんと榊先生です。他のみんなは隠れてたガードマン達を防いでる」

三つの文章をくつつけたチーの言葉に、鳴は何も理解できずに戸惑いを露わにして眉を寄せた。振り向かないチーの背中はどこか威圧的で。鳴の知っているどのチーでもない、初めて見たチーの一面。本気で怒っているのだ。自分の目の前の男に対して。

「廊下に総兵君がいます。総兵君と一緒に四階の、マザーコンピュ
ーターがある部屋に行つて下さい。凧生ちゃんから貰つた情報破壊プ
ログラムもプロテクト機能が堅すぎて効かない。おまけにマザーコ
ンピューター自体、外部電力で稼働してるワケじゃないみたいです。
完璧に独立した強力な電力バッテリーで動いてる」

そこで切れた言葉で、鳴はやっと全てを理解した。

それでも戸惑いを捨て切れない。

やり切れる可能性を自分がどれだけ持っているかは、未知数なの
だ。

「あなたは多分、電気を操る特異体質者。マザーコンピュータを、
その中に隠されたデータを潰せるのはなっちゃんだけなんです」

第三十話 LANとか実はよく分からない人が多い（後書き）

毎度毎度、更新が滞りまくってますみません。

今回はLANとかマザーコンピュータがとつたらこつたら偉そうに書いてますが、ほとんど適当なので流してください結構です。

第三十一話 大人の話とかあんまり真に受けちゃダメですよ。

「なっちゃん。お願いですから行ってください。いつまでも四階のガードマン達は鎮めてられないんです」

森塚を視界に留めたまま、チーは苦々しげに左目を眇めた。時空間配列の原型操作には結構な労力がかかる。元々教室の割れた窓ガラスに限定して、状態の時間を巻き戻す作業でも下手をすれば気絶するのだ。

鳴を四階にまで弾き飛ばすなどという離れ業は無理に等しい。だからこそドアの外には総兵を待たせている。

「でも、チーちゃん……」

鳴は声を詰まらせ、自分の右手に視線を落とした。わずかに震えるその手は、本当に見慣れたいつもの自分の右手で。その右手からマザーコンピュータを破壊できる程の高圧電流が流れるとも思えない。

モニター室での放電も意識などせずに勝手に起きた現象。

たとえこの状況を打破できる唯一の特異体質者が自分だったとしても。能力の制御も出来ない今の自分に、そんな事など出来るのだろうか。

「私なんか、」

「出来っこないとでも？　こんな状況下で冗談言うのは止してください」

途絶えた鳴の言葉に、チーは後ろを振り向かずしに声を高くした。森塚だけが見ているその顔が挑戦的な微笑を浮かべ、背後の鳴にか

ける言葉をもつたいぶるかのように浅い溜め息をつく。

ライトブルーの瞳をわずかに伏せ。長いまつげが影を落とすと、チーの唇がやっと動いた。

「たとえなつちゃんが出来っこなくても、きっと出来るようにしてくれませう。なつちゃんが一番良く知ってるでしょ？」

不意に後ろを振り向いたライトブルーの瞳が、確信に満ち溢れた期待を秘めてくりりと身じろぐ。

その動作に、鳴は密かに息を呑んだ。

D組の一員である彼女が、同じD組の人間に対しての絶対的な信頼を示している事をはっきり汲み取れた。

「お願いします。みんなによろしく」

「来ない」
「意外とせっかちなな、お前。すぐ来るだろうよ、千歳ならやるだろ」

四階。

マザーコンピュータの傍らで画面を覗き込み、衣翠は無感動にそう呟いた。柵は壁に凭れて怪訝そうに眉をひそめる。廊下から響く闘争の音が静かな室内に響いて、時折マザーコンピュータの本体が

低く唸った。

衣翠はキーボードを叩いていた指をキーから離して、軽く両目を細めた。

「ねえ榊」

「あー？」

「この事件、あいつ等が噛んでると思う？」

そこで初めて榊の眉が動いた。数ミリ程度のその動きが、衣翠のわずかに揺らいでいた心に一際大きな波紋が広がる。眼鏡を失くした大きな翠眼が不穏な眼差しを投げた。

「さあ、不明だな」

「関係ないよね？」

「それも不明だ。ま、気にしすぎだよお前は。千々波に影響されすぎ」

唯鶴を出されて衣翠は黙り込んだ。彼女からの入れ知恵が、確実に今の自分の心境に大きな影響を及ぼしていることに間違いはない。《あの組織》から抜け出した唯鶴が握っている情報のほんの一欠片、それを吹き込まれただけでこれだけ心が揺れるのだ。

全てを知りたいとは前々から思っていた。

ただ、何かがその感情を留めさせるのだ。

(唯鶴あんな……衣翠こいつで遊んでんのか?)

心中で呟きながら、榊は眠そうなその目を一回だけ瞬きさせた。

「あなた、踊らされてたんですよ」

冷静にそう言い放つと、チーはライトブルーの瞳に潜んだ怒りを抑えつけてから熱い溜め息をついた。

「特異体質を使って、他のお偉いさんの心中見透かして。不祥事や不正情報を掴んで揺すぶって、それでここまで成り上がったきたんですよね」

黙ったままの森塚にチーは苛立ちの念を募らせながら、ぎりりと歯軋りした。

この男は知らない。階段で会った、鳴を嵌めたあの気弱そうな男も。

こいつも違う。あいつも違う。唯鶴には最初から期待などしてない、いくら訊いてもはぐらかされてばかりだ。だからといって衣翠を巻き込むワケにもいかない、無駄に不安にさせるだけ。

子供の頃から、奴等の視線は自分を蝕み続けている。自分から全てを奪った 奴等の尻尾は、またも暗闇に消えた。

「あんたも、

ウォーイズ・ユグドラシル
戦神の争乱樹

については何も知らない……」

何かを掴めるかもしれないという期待は、チーの心の中で儚く打ち砕かれた。

第三十二話 頭の傷は血が派手に出るから気をつけて

「来い鳴！」

四階への階段を駆け上がりながら、鳴と総兵は息を切らして四階へと辿り着いた。廊下を所狭しと暴れ回っているD組連中に手を焼くガードマンの怒声と、乱闘騒ぎの雑音ノイズが鼓膜に響いてくる。どうやら四階に隠れていたガードマン達は少数精鋭組といった編成だったらしい、いくら森塚邸を駆けずり回り暴れた後での戦闘で体力を消耗しているにしても特異体質者三人を手こずらせるとは余程だ。逸早くこちらに気づいた一人のガードマンが足早に迫ってくると、総兵は舌打ちしてから鳴をその場に残して走り出した。

「えっ、ちよつと紫賀君!？」

「鳴、合図したら死ぬ気で走ってくれ！」

「ええ!？」

鳴が目を剥くと同時に、総兵はすでに向かってきたガードマンの蹴りかわしてから頭をかち割る勢いで頭突きを喰らわしていた。割れたサングラスの破片で右頬を切ってしまった総兵は、伝い落ちてきた血を乱暴に拭い取って二度目の舌打ちを響かせる。

「総兵ええ！ 悪いけど衿也頼む！ こいつもう無理だ！」

「ああ!？ 悪いけどちよつと待ってる、って……グロっ！」

左寄りの額が斜めにざっくりと裂け、顔面が血みどろになり気絶した衿也を抱えた洋司が、怪我の惨状にかなり引いている総兵に向かって手を振る。

「何があつたらそんな綺麗に皮膚が裂けるんだよ！ はつきりいつて引くわ！」

「引くとか言うなよ！ 勢い余つて窓に突っ込んでこの怪我だけだぞ！ ある意味、素晴らしいだろうが！」

「同情はするけど、それただの自業自得だろーが！」

いつものD組ワールドが展開されている中。洋司が空気を圧縮した塊を一気に爆発させたのだろう、窓ガラスが全て碎け、向かいの壁まで吹き飛ばされたガードマン達が低く呻いている。その空気爆^{エアバースト}発から逃れた数人を相手に、沙夜が残つた力を振り絞つて応戦していた。

「ちよつと訊いてんの総兵ええ！ 頼むから言う事訊いて！」

「バカ野郎！ 鳴を奥の部屋にやんなきゃ意味ねえだろが！」

総兵はそう怒鳴つてから右手を固く握り締めた。裂けたこめかみと反対の方に青筋が浮かぶと同時に右手が開いて、その掌から飛び出した巨大な火球が灼炎の渦を表面から噴き出しながら激しく回転する。その光景を見た洋司が悲鳴を上げ、顔から一気に血の気が引いていった。

「ちよつと止めてええ！ 大体そんなの使うくらいならお前がマザーコンピュータ壊せば良かったじゃん！」

「鳴じゃなきゃ意味ねえだろうよ。大体パソコンなんざ燃やしてみろ、有害物質のオンパレードだぞ」

口角を痙攣させながら呟く総兵の顔を汗が伝い、洋司はもう回避できないことを悟つて半泣きのまま床に伏せた。

爆煙がガラスの砕けた窓から出ていく中。鳴は遠のいていた意識を、総兵と沙夜の言い合いで呼び戻された。床を転がされた衝撃であちこちを擦りむき、鈍い痛みが走る。その痛みになんげもさめると、やっと自分が何かに支えられている事に気づいて顔を上げた。

「……………大丈夫ですか？」

いきなり視界に飛び込んできた神の顔に、鳴は悲鳴を上げる直前で弾かれたように柵から離れた。隣では爆風に乱された前髪を整えながら、怪訝そうな顔で衣翠が事の成り行きを静観している。

「めっちゃくっちゃ拒絶されたわね」

「ちっ、違……………今のはちょっとびっくりしただけで！」

「あー、今人生至上で最大の心の傷を負ったわ」

本心なのか嘘なのか分からない神の言葉に鳴がテンションを跳ね上げると、衣翠は怪訝そうな顔つきを崩さずにマザーコンピュータの前から離れた。

「さ、鳴。マザーコンピュータ壊そう」

「ちっ」

朱城高校、保健室。

それぞれ色彩の異なる両の瞳を緩慢に瞬かせながら、唯鶴は大きく欠伸をしてからブルーのデスクチェアの上で伸びをした。柵を学校からほぼ強制的に送り出してからしばらく経った、上手くやっていくだろうか。

それでも彼女の整った面立ちに不安や焦りの色は見えない。いつものようにけろりとした、それでいて抜け目の無さそうな表情で立ち上げていたパソコンのキーボードを当たり始める。ほっそりとした白い指が黒いキーに踊ると、デスクトップに一つのアイコンが表示される。

「ふむ」

もう一度ぱちりと瞬きしてから、唯鶴は考え込むように形のいい眉をわずかに眉間に寄せた。右肘をデスクにつき、デスクトップ上のアイコンに羅列された味気ない楷書体の文面を視線でなぞっていく。

「森塚邸事件の終結は今日中と見積もっても……鼻の利く連中のことだわ」

ほつぽつと呟きながら、唯鶴はふうとあまり深刻そうでもなさそうな溜め息をついた。下らなそうに細められた目は元に戻ろうともしない。

「チー助。あなたにもそろそろ言っとくべきね」

第三十三話 脱水症状をナメんなよって顧問の先生によく言われる

「やっぱり無理ーっ！」

マザーコンピュータの前でそう叫ぶと、鳴は静電気も起こさない自分の右手をコンピュータ本体から離してしまった。火球の炸裂により木っ端微塵にされた入り口は柵が作り出した氷の塊で閉じられ、室内は乾燥して冷え切っている。スカートのポケットから引っ張り出したリップクリームで唇への保湿を欠かさない衣翠は、予想はしていたと言わんばかりにそのキャップを閉めた。

「あー、やっぱり無謀すぎたか」

焦った様子も見せず呑気に頭を搔くと、柵は啜えた煙草に火を点けてからわずかに右目を眇めた。

「やっぱりって何ですか！？ 最初っから期待されてなかったんじゃないですか私い！」

「仕方ないじゃないすか。こんなもん安全に壊せるの、神阪先生ぐらしいかここにいないんすよ」

「壊すに至って、安全な方法なんてあったのかしらね……」

やや呆れたようにそう呟くと、衣翠はやれやれとばかりに首を振った。

「ほらあ！ 衣翠ちゃんにも諦められてるじゃないですか！ 最初っから出来なかったんですよこんなの！」

「そんなマイナス思考で世の中渡ってけませんよ。いいから手だけでも本体に置いといて下さい」

「もう嫌ーっ！」

「それにしても、」

顔を怪訝そうに歪めたまま、チーは憎々しげに奥歯を砕ける程に食い縛った。握り締めた小さな拳が小刻みに震えて、可憐な薄桃色の唇がきつく一文字に引き結ばれる。前髪の下で伏せられた瞳に、強い憤りの念が揺らいだ。

「最低ですよ、あなた。私欲の為になっちゃんまで利用して」

大体、と付け加えてから詰めていた息を吐くと、チーは左目を苦々しげに眇めた。大きなライトブルーの瞳に映る森塚の顔は無表情で、レンズの奥に潜んだ目が冷たい眼光を放つ。

「特異体質を乱用するなんて」

チーが小さく震える声を喉の奥から押し出すと、森塚は下らなそうに溜め息をついてから馬鹿にしたようにチーの目を捉えた。二人の間に横たわっていた空気が少しずつ温度を下げていき、二人を取り巻きながら徐々に凍りついていく。

「綺麗事ばかり並べて成り上がった人間なんていないだろうさ。」

少なくとも、僕が今まで出会ってきたそういう人種は皆同じだった」

「私はよく分からないですけど、あなたがやってきたことは綺麗事云々以前の問題ですよ」

きっぱりと言い切ったチーに、森塚は初めて不機嫌そうに眉を寄せた。

「僕は効率の良い生き方をする為に自分の能力を使ってるだけだ。その何が悪いっていうんだ、君は？」

「特異体質のせいで苦しんだこともないんでしょね。だからそんなに軽々しい口が利けるんでしょうけど、それだけなら私にも皆にも関係はないです。けど、なっちゃんまで巻き込んだから、こんな状況で私みたいな小娘に軽蔑されるハメになったんですよ」

先程までの表情とは一変、子供っぽいつまらなそうな表情になったチーは興味なさげにサイドの髪を耳に引っ掛けた。ころりと態度を変えたチーに、森塚は不可解だと言わんばかりに目を細めた。

「特異体質がまた覚醒すればあの女には用が無かったさ。僕にとつて、神阪鳴海っていう人間はそれだけの価値だったってことさ」

「へえ、つくづくエゴイスト。くっだらな、そんなことの為になっちゃんを拉致ったんですかあ？ 骨折り損のくたびれ儲けってこういうの言っんですよ」

「彼女にはもう用はない。僕の望みは君達のせいで断たれてしまったからね。だからこそ……」

そこで言葉を切ってから、森塚は静かに右腕を下に振るつた。その袖から滑り落ちたナイフのハンドルから短く研ぎ澄まされた刀身が飛び出る。

レンズの奥の目が猛禽類を彷彿とさせる眼光を放ち、その眼光が少しずつぎらついた狂気を孕んでいくのを冷静に見守っていたチーは無表情のまま鼻を鳴らした。

「最後の悪あがきも悪くない。神阪鳴海が短時間でも近距離にいたのが幸いしたみたいだ、能力ちからの欠片が少しだけ騒いでる」

お前のこれからの行動は全てお見通しだと。そう言っている瞳に射抜かれ、チーはそれでも眉をしかめるだけで何も言わない。

そんな彼女の心を見透かしていた森塚の目が、いきなり見開かれた。

「あーあ、面白くない。ホントに骨折り損のくたびれ儲け。全部持ってかれちゃいますよ、あの野郎に」

なっちゃんなつちゃんの笑顔の為にここまで乗り込んできたのに、これじゃあ手柄横取りされたのも同じじゃないですかあのヤロウ、ドアホウ。

チーチーがこれから呟くであろう言葉が脳内で響く。森塚は混乱していく思考回路を冷静に保とうとするが、彼女の紡ぐ気まぐれな言葉に翻弄されてなかなかぶれが収まらない。

「もう言わなくても分かりますよねえ？ なっちゃんを助けちゃったヒーローが、私から誰に変わるか」

「全然だな」

「ラマーズ法やってみる？」

「胎児だけじゃねえの、そういうのが効くの。まあいいわ、片っ端から試すしかねえからな、こういう場合。っつーわけでハイ……」

「ラマーズ法で出てくるワケないじゃないですかあ！ バカにしてるんですか！ っていうかもうすぐ氷の壁壊されちゃいますよ！？」

電流のどの字も出ない右手をマザーコンピュータ本体に置いたまま鳴が怒鳴った。先程から緊張感のまるでない会話を繰り返している榊と衣翠の隣。マザーコンピュータを放っておく訳にもいかないのだろう、ガードマン達は沙夜達と戦いながらも地道に入り口を塞ぐ氷の塊を壊していく。

「総兵の野郎、あんな大量に火の弾飛ばすなっつーの。俺が苦勞して塞いだのに、狙い外れて氷に当たってんじゃねえか。まさか仲間に溶かされるとは思わなかったぞ」

「新しく塞げばいいじゃないですか！ 何でそんなに呑気なんですか！？」

「湿度限界なのよ。これ以上氷を作ったら、榊が脱水症状でお陀仏するの」

衣翠が淡々と説明しながら、自分の周りを囲む乾いた空気を警戒するようにリップクリームを塗り直す。

「それとも、こいつを脱水症状に貶めて氷作る？ 少しは保つかも」

「田原先生を脱水症状に貶めてまで防壁固めなくていいですよ！

「どういう提案なんですか、衣翠ちゃん！ もしかたしたら田原先生嫌いなのです！？」

「おいおい。十パーくらいなら何とかいけるけど、三十パー以上削ったら死亡確率鰻上がりじゃねえか。勘弁しろよ」

「ちよつと止めてくださいよ！ ホントにやらないでくださいよ！
？ やったら頭かち割りますからね！」

ぎゃあぎゃああと三人が騒いでいる間も、軌道が逸れた総兵の火球

が氷壁に激突して刻一刻とその厚さは削られていく。それでも鳴の右手から電流が出る訳でもなく、展開が詰まる一步寸前の会話はプロットもない割にはとんとん拍子で進んでいく。

「あああもう！ 全然やる気ないじゃないですか二人とも！」

「だって俺達がやる気出してても電流出るワケじゃねえしな、衣翠」

「あんたがやる気じゃなくて死ぬ気でしたら、多分いけるわよ」

「死ぬ気出さなくていいから知恵を出してくださいよ！」

こういう局面に慣れていない鳴はもはや涙目で、衣翠はやれやれとばかりに首を振って榊の顔を胡散臭そうに見上げた。ひどく怪訝そうなその視線に捕らえられ、榊の眉が片方だけ動く。

「こうなったら奥の手よ。後でチーにボコられる可能性大だけど、脱水症状でお陀仏になるよかマシでしょ」

「もう意味分かるでしょ？ ホント腹立ちますけど」

「は？」

右肩に手を置かれて振り向くと、鳴のカラーコンタクトを外した緑色の瞳に常識外れの距離にあつた榊の顔が映る。

「はー……マジでやんのか」

躊躇うように榊が溜め息をつく、後ろから衣翠の声が響く。

「変態扱いされるのはあんただけだから大丈夫よ。はいレッツゴー」
「つくづく teme がエゴイストってことを思い知ったわドアホウ」

「いいトコ取りってこういうこと言っんですよねー。ホント、まあ……」

「はい？ え、あの」

あの、から続けるはずだった言葉が喉の奥に吸い込まれて何も言えなくなる。微かに香るブラックデビルの甘い香りだけに意識が集中して、心臓の鼓動がおかしな音を立てた。

「右手、ちゃんと置いて下さいよ」

「骨折り損のくたびれ儲け」

三階。ナイフを構えて襲いかかってきた森塚の意表を突いて、歪めた時空間の隙間から飛び出したチーが彼の背中に渾身のドロップキックを見舞わせた瞬間と。

四階。鳴と榊の唇が重なって、マザーコンピュータに超高压電流が流れたのは全く同じタイミングだった。

第三十四話 終わりよければ全てよし、っていつけど終わりがグダグダだった

「ふーわっ。もう夜じゃないですか、どうりで暗くなってきたワケだ」

午後七時半。朱城高校、保健室。

大きく欠伸をしながら、チーは絆創膏や湿布が貼りついた華奢な脚を抱え上げて眠たそうに瞬きした。いつも唯鶴が座っているはずのデスクチェアに背を預け、チーは帰りがけに自動販売機で買った甘ったるい缶コーヒーを口の中に注ぎ込んだ。口の中の傷に染みて思わず顔をしかめる。

「染みるなら飲むなよ」

「糖分摂らなきゃやってらんないですよ」

総兵が怪訝そうにそう言うと投げやりになったチーはふいっとそっぽを向いた。

マザーコンピュータの破壊から森塚邸脱出。記憶操作の特異
体質を操る、唯鶴の大規模な記憶隠蔽工作メモリーカバにより森塚邸への特異
質者襲撃事件は幕を閉じたかたちとなった。荒れ果てた邸内を見回
しても、最早その惨状を引き起こした人間の正体は見抜けない。モ
ニタールームで集積されていた画像情報も鳴の流した電流で水の泡、
警察が介入しても姿の見えない襲撃者の影に不気味な印象を抱くだ
けだろう。

「それにしても桁外れな能力ちからだぜ。建物自体の記憶まで操作し
ちまえるんだからな」

「でも、どーしても私は原理が理解できないんですけど。私の時
間操作と何がどう違うんです？」

「んー……俺もよく理解できねえけど」

総兵はがりがり頭を掻きながら不機嫌そうに眉を寄せた。

実質上、どの物体にも人間の 記憶 と置き換えられるデータは存在している。ただそれは非常にあやふやなもので、時間が少し経てばすぐに薄らいでしまい物理的にも壊されてしまうものらしい。チー達の襲来により建物自体が著しい損傷を受け、そこでほとんどの 記憶 が奪われたらしいが、わずかに残った 記憶 は幸いにも唯鶴の隠蔽工作に役立つものだった。

「指紋とか足跡、個人が特定されるような形跡しゆれだけ消したみたいだぜ。さすがにぶっ壊れた建物自体は元に戻せねえし、そんな時間もねえだろ」

「へえ」

まだ腑に落ちないチーは生返事だけ返すと、小さく溜め息をついてからぐしゃぐしゃとサイドの髪を掻き回す。携帯電話をいじくりながら総兵は横目でチーを見やると、チーもじろりと目を動かした。

「衿也は病院で処置完了だよ、鳴はまだ榊の車で眠ってる。榊も唯鶴を回収してこっちに来てるらしい」

「沙夜ちゃんと言翠ちゃんは？」

「唯鶴の回収便と一緒に来るみてえだな。ま、もう少しすりゃあ全員集合だ」

そう言ってから総兵は言葉を切り、ベッドの方に目を向けた。特異体質の突発的な暴走によってマザーコンピュータを破壊した鳴は、あれつきり気を失ったまま目を覚まさない。それ程、特異体質というものは体力を消耗してしまう代物なのだ。巨大な森塚邸全域に工作を行った唯鶴も、身体には大きな負担がかかっていることだろう。

「でもなあ」

不意にチーが呟いた。髪をいじくり回しながら、ライトブルーの大きな瞳が気まぐれにきろきろと回転する。

「あ？ どうした」

「なーんか今日一日いろんなことがあったなーと思って。目が回るくらい」

わずかに口角を持ち上げると、チーはデスクチェアを窓の方に向けて回転させた。少しは機嫌が直ったのだろうか、狭くて小さい肩にかかる桃髪をいじる手を止めずにかくりと小首を傾げる。

「榊先生に怒鳴られて、逆らってまで襲撃起こして、めっちゃくちゃ頑張ったのに最終的になっちゃんを助けられたのは私じゃなくて。もうすっごく疲れました」

穏やかなその口振りに、総兵は落ち着かずに襟足を搔いた。チーにこういう態度を取られると、慣れていないのも手伝ってどうにも居心地が悪い。

「ねー総兵君」

「ああ？」

背中を向けたままのチーに話しかけられ、つい機嫌の悪い声が出てしまう。それでも意に介した風もなく窓の方を向いたまま、チーはくすりと笑ってから抱えていた脚を投げ出した。

「何かすっごく脱力しましたねえ。けど、こーして落ち着いてられ

るのもある意味平和かもしれないけど」

「ある意味じゃなくてホント平和だっつの」

「うん、総兵君の思考回路くらい平和ですね」

総兵の突き刺さるような視線を背中に受け、チーはけらけらと笑いながらデスクチェアから飛び降りた。相変わらずの仏頂面で苛立ちを孕んだ目線を投げかけてくる総兵の前を通り過ぎ、ベッドの上に登ってからあひる座りする。

「でも、こうやってちょっと遠くから見ると総兵君もいろいろ怪我しましたよね。右のほっぺたとか」

「人の事とやかく言えた義理か。スカート裂けてんぞお前」

「はい？」

頭上にクエスチョンマークを浮かべたままチーが下を向くと、たしかに左の裾が縦に裂けている。かなり深く入ったその裂け目に、チーはあからさまに顔をしかめた。

「うわー……やられたあ」

「それにしてもお前、そんなに深く裂け目入ってよく太腿傷つかなかったな。破られたのか？」

「スカート破った奴とか半殺し決定ですよ。多分ガラス割った時にその破片で知らない内に切れてたのかも」

そう言いながら、チーは総兵の前で何の躊躇いもなくスカートの裾をたくし上げた。眩しいくらいの白い肌に浅く、縦向きの傷が刻まれているのが映え立つ。一瞬の注視に自分で気づいてから、総兵は反射的に目を逸らした。

「何あからさまに目え逸らしてんですか」

「……空気を読め軽石頭。健全な男子高校生の前でスカートたくし上げるかフツー」

「……総兵君、自分で言うほど慣れてないでしょ。こーいうの」

挑発するようなチーの口振りに我が強い性質の総兵が歯向かわない訳もないのだが、捲られたスカートの隙間から覗いた下着が視界にちらついて撃沈される。

「耳がえらいことになってますよ、そこらの野良犬なんかよりよっぽど初心つひな総兵君」

「誰が初心だこのドアホ！」

顔を赤くして怒鳴り返すと、チーは勝ち誇ったような腹立たしい笑みを浮かべたままスカートの裾を下ろしてからベッドから降りた。それから鼻歌混じりに保健室をうるつき始めるが、自尊心を折られて不貞腐れた総兵の後ろに忍び足で近寄る。

「そんなしよげなくてもいいじゃないですかあ。面白くないじゃないですか」

「俺に面白さを求めるなボケが！」

総兵はそう怒鳴ると、後ろから首に手を回し、抱きついてきたチーの腕を素早く掴んでから前に向かって投げ飛ばした。尻尾を踏まれた猫のような悲鳴を上げて宙に放られたチーの身体が、見事にベツドに落とされる。それと同時に、戦いの火蓋が切って落とされた。

「なな何すんですかこのアホお！ 一瞬三途の川が視界にちらつきましたよ！」

「一生ちらついているこの野郎！」

「なんだとおお！ 私如きに欲情する人に言われたくないです！」

「三途の川とは関係ねえし、お前に欲情した覚えはねえ幼児体型！」

「で、何なのコレ」

榊は保健室のドアの前で洗面を作ったまま、室内の惨状を目の当たりにしていた。D組の生徒が暴れた後には本当に塵さえも残らない。

「だって総兵君から仕掛けてきたんですよお！ 私がベッドの上にいたらいきなり襲いかかってきたんですもん！」

「んだとテメエ！ 勝手に嘘でつち上げんなドアホ！」

「でつち上げじゃないですー。脱がされかけましたー、スカートもその時破れましたー」

「ああ！？」

二人ともムキになって言い合ってこそいるが、総兵の方がなぜか大型犬程度の大きさなのでどうもしくりこない。それでも構わず言い合いを続ける二人に、榊の後からついてきていた衣翠は溜め息をついた。

「戻ってきたわね、いつものあいつ等が」

第三十四話 終わりよければ全てよし、っていつけど終わりがグダグダだった

迷走ルートを辿り続けた続き物ですが、ここで一段落つかせていただきます。次回からはおそらく一話完結タイプに切り替わると思うので、今後ともよろしくお願いいたします。曲がりくねった展開についてきて下さった方々、本当にありがとうございました。

第三十五話 パペットを操るのは意外とコツがいる

「ねえねー、総兵君」

裏声を駆使した声に総兵が怪訝そうな顔を上げると、読書をする時や授業中に時折かけている眼鏡のレンズを挟み、視界に「不思議の国のアリス」の主人公を模したような金髪の女の子のパペットが飛び込んできた。空色の大きな楕円形のビーズに仏頂面の自分の顔が映る。

「なーんでそんなに不機嫌そうな顔してるのお？ なんてなんでー？」

水色を基調にしたエプロンドレスを纏ったパペットは手を胸の前で擦りながら、しきりに首を横に動かす。が、総兵の目が冷めたように細まるのを見るとその動きはびたりと止まって、両手を合わせたままぐいつと首を前に突き出した。

「どーかしたのかなー？」

次の瞬間。書店の白いカバーが掛けられた分厚い文庫本がパペットの横つ面を張り飛ばした。無様に弾き飛ばされたパペットは三メートル近く吹っ飛ばされ、儂げに床に崩れ落ちる。

「イヤーっ！ アリスがあああああああああっ！」

絶叫しながら向かいのソファから飛び出して、アリスのパペットをがばつと拾い上げたのは言うまでもなくチーである。パペットと

同じ色の瞳を潤ませ、必死にドレスについた汚れを叩き落とす後ろ姿を尻目に、総兵は何事も無かったのように読書を再開させる。

「鬼畜ーっ！ ちょっと遊んでただけなのにーっ！」

ソファに戻り、目を逆三角にして怒鳴るチーに冷めた目線を投げてから総兵は片手だけでページを捲る。

「じゃあかあしいわボケ。人の神経逆撫でするようなことばっか言いやがって」

「倒れる、逆撫」

「お前が倒れる」

某少年漫画をもじった分かりづらいボケに分かりやすいツッコミを返すと、総兵はまた文面に目を戻す。いつも以上に冷たい総兵にチーは派手にいきり立つと、テーブルを叩いて立ち上がった。

「なんか総兵君、この頃冷たいですよ！？ 私が何かしたんですか、眼鏡ケースをいじくって壊しちゃったのをまだ根に持つてるんですか！？」

「うるっせえボケ！ 黙れ小娘！」

総兵に負けず劣らず怪訝そうな顔のギャラリィと一体化していた沙夜達のテーブルから、いきなり平手が飛んでくる。後頭部を叩かれたチーが「はぎゃっ！」と奇声を発して、ソファに縮こまる。

「ちょっとは静かにしろや！ こちとら誤答ノート捌くの必死なんだっつーの！ あんたのアイポッドのデータから演歌全て抜くわよー！」

「うう……さっきからアホばっか言われてる。たしかに私はぎりぎ

り関西人だし、アホよりバカの方が傷つくけど二連発はきつすぎますよ」

テーブルに顔を伏せてしくしくと泣きながらぶつぶつと不満を漏らすチーに、総兵は溜め息をついてから仕方なしに文庫本を閉じた。先程の言葉の通り、誤答ノートを捌くのに忙しい沙夜達の隣でこれ以上騒げば沙夜の堪忍袋の緒が切れる事は時間の問題なので、無視し続けるワケにもいかないのである。

「大概お前もはた迷惑な野郎だな、つたく」

「だってみんな、この頃冷たいんですもん。お陰で私はどんどんゲームセンター大好きになっちゃって、おまけにユーフォーキャッチャーまで上手くなっちゃうし何かよく分かんないフィギュアまで落とせちゃうようになっちゃったし、そのフィギュア見てたら自分だんだんオタク化していくような気がして……」

訂正を入れると、チーを除くいつもの六人組やD組連中が故意に彼女に冷たく接していたワケではない。期末考査やらが重なり、いつも悪ふざげばかりに興じている連中も一応高校生なので勉強は怠れない。全員が全員、勉学に勤しんでいたのである。

唯一。チーだけを除いては。

「お前もちつたあ勉強の環に入りやあ良かったのに、一人でぶらぶら暇そうに街をほつき歩いてただけじゃねえか。全員自分の事で忙しいってのに、テメエなんぞに構ってられっか」

「だって勉強なんか面白くないじゃないですか。初音ミクの歌をYouTubeで聴いてた方がよっぽど面白いですよ」

「お前がオタク化の一途を辿っている事が如実に伝わってきたが、そこはツツコまねえ事にしよう」

総兵にそう言われてから、チーは「けっ」とやさぐれた言葉を返した。光を失ったライトブルーの瞳が据えて、声のトーンが落ちる。

「オタクにもなりますよ、そりゃ。榊先生の野郎が、あの騒ぎに乗じてちゃっかりなっちゃんを物にしてたなんて今でもシヨックですよ。それがバレた時のなっちゃんの慌てぶりもシヨックでしたよ。何もかもがシヨックでしたよ」

「お前がオタクになった経緯とその事実が簡単に結びつかないんだが、そこら辺はどうだ」

「うっさいわねー。眼鏡叩き割りますわよ、総兵君」

癩に障る、甘ったるい裏声を発しながらまたパペットを操作し始めたチーに、総兵は呆れて眉をひそめた。

「どうやら本格的に機嫌が悪いらしい。パペットを操る時に敬語機能が停止するのが良い証拠だ。」

「でもねー、あたしも気にしてるトコたくさんあるんだよー」

腕を大きく広げた後、顔の横で両手を合わせて小首を傾げると、アリスのパペットはふるふるとドレスの裾を震わせた。仏頂面の総兵の顔を、操縦者とそっくりの空色の瞳に映し出したままでアリスは表情を動かさない。

「だつてさー、さっきの総兵君、少しも本のページ捲ってなかったんだもーん。何い？ ちよっとエッチなとこだったから何回も読み返してたんですかあ？」

そう言われてから、総兵は密かに息を呑んだ。華奢な腕の奥で上目遣いにこちらを見上げてくる、じとりとしたライトブルーの視線に目を射抜かれてから、その目の奥に潜む問の真意を探るように深

みを目指す。

「否定しないんだ！。凶星、かなあ？」

わざと、らしくない声で問いかけてくるチーから目を逸らしてから詰めていた息を吐く。

「前にお前が言ってただろ。」

ウォーズ・ユグドラシル
戦神の争乱樹

の事考えてたんだよ」

「ふーん……」

両手の位置を胸の前に変えてから、アリスは総兵の目を覗き込むように空色の瞳をくりつかせた。いちいち行動が人間らしい。それでいてどこか気まぐれで幻想的なその動き。

「訊く機会が無かったから今訊くが、森塚の事件でも尻尾を掴めなかったってお前は言ってたよな？ 森塚のところに殴り込んだ時から何らかの手応えはあったみてえだが、そこはどうなんだ？」

沙夜達や周りの人間に悟られぬように微妙に声のトーンを落とすと、チーのライトブルーの瞳が何か言いたげに瞼の奥で身じろいだ。その言葉を代弁する為に、アリスが両手を開く。

「うん、そうだよー。なっちゃんを助けるのが一番の最優先事項だったことに変わりはないけど、連中の匂いを嗅ぎつけてたことに否定はできないもん」

「何で言わなかった？」

「仕方ないじゃーん。沙夜ちゃんにも衣翠ちゃんにも、洋司君や裕也君にも言っていないことなんだよー。総兵君にも何も言わなかった

のは、無駄な動きされたらこっちが困るってことー」

その言葉に総兵の目が険しくなると、アリスはあくまでも無表情でその目を覗き込んだ。何も宿らない空虚なガラスビーズの目からは何もやってこない。

「連中のことを知ってるのは今のところ、あたしと唯鶴センセだけなんだよー。けど、唯鶴センセは何にも教えてくれないし、あたしは自力で何とかしなきゃなんないワケー。だから無駄な動きはされなくなかったのー。どーですかあ、論理的でしょ？」

「お前の中ではな」

「当たり前じゃんー。自分の中で 論理的 っていう肩書きを貼り付けた文章じゃないと、他人に 論理的 っていう名目でその文章を披露するワケにもいかないしー」

間延びした口調で静かに捲し立てると、アリスは何か鬼気じみたものを空虚な瞳の奥にぐらつかせながら、口の無い顔に笑顔の仮面を着けた。

「総兵君は知りたいー？ 連中のこと」

「当たり前だ」

「当たり前かー。その当たり前前を遙かに凌駕した当たり前なんだよー、あたしの中での連中のことを知りたいっていう意欲はね。何でだろねえ、あたしは連中のことが気になって仕方ないのー。いつもみたいにみんなと喋ってる時もバカやってる時も、ツッコまれてる時も怒られてる時もお弁当とか食べてる時も。その欲望の突発的噴出が、なっちゃんを連れ去った森塚と特異体質が関連しているっていう仮説を立てたところで爆発しちゃったんだよー」

饒舌に喋るアリスを操って声を当てているチーは外の方に目をや

っているだけで、アリスの言葉に責任を持つなどという心持ちはさらさら無いようだった。そこで、やっと総兵は強張らせた感情を緩める。

「^{たが}箍が外れた、と言ったら正しいだろうか。期末考査も終わり、必要な分の勉強量でテストが終わってしまふチーにとっては、周りの人間が落ち着き始めるこの時期に全ての鬱憤を吐き出すつもりだったのだろう。」

「あたしが悪いことは分かっているから謝るよー？　ただ、総兵君よりもあたしの探究心の方が強いことだけは覚えたいほしいのねー。だってさあ　」

「今日は、いつになくお喋りだな」

言葉を遮ってそれだけ言ってやると、アリスは虚を衝かれたように黙りこくった。アリスのガラスの瞳がわずかに揺れたような錯覚に陥る。本物の目に視線を移すと、本物は窓から見える外の景色に目をやったままで動かない。

動揺したようには見えない本物の目から何かが溢れた。

しばらくお互いに沈黙を守ったままでいると、不意にアリスが動く。

「……まだ気持ちの整理ついてないんだー。アルファベット順に行けば7・15・13・5・14・14・5だね。そんだけ」

そう言ったアリスはまた小首を傾げた。厚ぼったく素朴な生地のリボンが揺れて、人間らしさをまた取り戻す。

「ま、そういう捻くれた部分が戻ってきたっつーことは少しはマトモになったか」

「そういうこともねえ。あ、ちょっと待って」

「あ？」

呼び止められてから動きを止めると、アリスは目を背けたままの操縦者の意のままに願う事でもするかのように今度は顔の前で両手を合わせた。両手で見えなくなつた顔を横に動かし、ガラスビーズの空色の瞳がはにかみながら喋る。

その仕草に、いつものチーの面影が重なって。不意を衝かれたのは、今回は総兵の方だった。

「眼鏡外さないでください。眼鏡掛けてるときの総兵君、優しくて好きだから」

「あたしのナマエ？ ママが言ってたよ。アリスなんだよー」

夕暮れ、夜、夜、夜。

董色の帳とミッドナイトブルーの帳が縫い付けられ、空に掛けられる時刻。流星の尾が時折その帳を切り裂き、また闇に覆われていくその隙間から来た二人目のアリスは不思議に澄み渡つた、ガラスビーズの空色の目に操縦者 マニピュレーターの持ち主を映し

出す。

暗闇、暗闇、漆黒の暗闇。

二人目のアリスの瞳に映るのは、ただそれだけ。

「ゆったでしょー。毎晩毎晩言ってることじゃーん。ナツは エリート なのよー。ママを助けられるのはナツだけなんだよー。ずーっと前から知ってることじゃーん？」

「ん」の部分にアクセントを置く独特な喋り方で言葉を紡ぎながら、アリスの操縦者はミラー加工を施したフルフェイスのヘルメットの奥で微笑んだ。シャープなラインが夜の闇に浮かび上がり、浮き彫りのように本体に付け加えられた装飾、サイドに走るビビットレッドの赤い稲妻模様が異様に映え立つ。

「バカ兄貴には任せてらんないのよー。ナツしか出来ないのよー、だからさあ……」

そこまで言うてから ナツ と呼ばれたその人間は、アリスの操縦を止めて自らの動きも止めた。羽根よりも軽い沈黙はすぐに夜風に吹き飛ばされ、ビルディングの後を吹き荒ぶそれが、ここが高層建築物のひしめき合う都市部なのだということを気づかせる。

一際高いビルディングの屋上。四角いフォルムのその天辺、そこにアリスの操縦者は立っている。乱反射を繰り返す無数の光を足元に、騒がしい都市の中央で操縦者はもう一度アリスを動かした。

ガラスビーズで出来た、空色の瞳。虚ろな光を宿したその瞳に問いかけるように、操縦者は小さく口笛を吹いた。

アリスは顔の横で両手を合わせ、可愛らしく小首を傾げると。ミラー加工されたレンズの奥、そこに潜む自らの真意を空洞の刃で貫いた。

「甘ったれてらんないのよ！。あんたは」
「分かってるっつーの」

「？ どーしたチー？」

ファミリーストランから出て、六人組で帰路を辿っていた時。
不意にチーが振り向いたのに気づいて、総兵は肩越しに彼女を呼んだ。

後ろをじつと見つめたまま動かないチーは、目を丸くしたままぼつりと呟いた。

「……何でもないです」

第三十五話 パペットを操るのは意外とコツがいる（後書き）

少しぶっ飛んだ話運びになりました。戦神の争乱樹や二人目のアリスを持つてた人間については、後々だから書き連ねていこうという予定をたてております。ここまで読んで下さった皆様、ありがとうございました！

第三十六話 制アレって略しすぎじゃない？ 制服アレンジの略なんだって。

ヒト、人、ヒト、人、人間、ヒト、人間、人、人……ヒト。

心中でそう呟きながら、彼女は自らが歩む道の両脇を占める、様々な洋服店や雑貨店が立ち並ぶ光景をビー玉のような瞳に映し込んで軽やかに闊歩する。小さく口笛を吹きながら、彼女はワンシヨルダータイプのリュックを背負ったままで広いシヨッピングモールをぶらついていた。

と、何を思っただか漆黒のコンバットブーツを履いた足を止めてしまふ。

「ふうん……ざっとこんなもんか」

ひとしきり辺りを見回すと、彼女は雷をモチーフにした立体的な赤い髪留めが目立つツーサイドアップの髪を揺らし、すれ違う人々の波をするすると、まるで波間を漂いながら気ままに踊るくらげのようにまた歩き始めた。周りに視線を拡散させながら、ピントがぼやけた他人の世界で彼女の足取りは軽い。

嬉しそうに笑う少女のリュック、そこにはガラスビーズの空色の瞳が目立つ二人目のアリスがぶら下がっている。

「ふふ、過去も未来も現在も。世界なんてのは変わんない」

嬉しそうに呟きながら、琥珀色がかった金髪のロングヘアを背中に流した少女 ナツは他人の波を掻き分けて、掻き分けて。

何の目的も無く、ふらふらとシヨッピングモールを歩いているのだった。

「そ・れ・に・しても、見つからないなあオイ。さくーっと見つか

ると思っただけだ」

スコーンにかぶりついた時の効果音に似たノリで、簡単に人が見つけられる訳もなく。ナツは不機嫌そうにむくれて、歩調をわずかに速める。

「何処見回しても無能・無能・無能。さっきから電波飛ばしてんに、全っ然引っ掛かないしい……。コーコーサーでしょ？ 普通のコーコーサーなら、こういうトコロろついているようなもんなんじやなかったの？」

不服そうにぶつぶつと愚痴を零しながら、ナツは大きくあくびをした後に整った眉を思いきりしかめる。初夏から夏本番へと変わっていく中で周りの人間は大体薄着で歩いているが、黒いニーソックス・プラス・コンバットブーツの足元フル装備で歩いている、暑苦しい人間はそうそう見ない。

おまけに少々過激な発言により、先程からすれ違う人々の視線を集めているのに気づいていない彼女はその視線を意に介することもなく、磨き上げられたフロアを足音を立てながら通り過ぎていく。

「ほんと。夏本番だか何だか知らないけどさあ、夏休み前にテンション上がる国民性は変わってないのね。いや、っていうか全世界共通なのかも」

カラフルな色彩の水着が所狭しと吊り下げられたワゴンを横目で見ながら、その前で会話している三人の女子高生をスルーして、また普通に歩き出そうとする。

と、その時。

アリスの空っぽな瞳に、ちらりと光が揺れる。

飛ばしていた電波が、大きくぶれた。

「あ……………」

「いて」

どしん、と。

鈍い音と共に、左肩に振動が走った。

「あ？」

総兵は怪訝そうな顔をさらに怪訝そうにして、自分の肩にぶつかったものの方へと顔をやる。

そこで、彼の眉間に刻まれた皺はいささか深くなった。

「はあ……………」

呆けたようにそう呟かれた。

染髪ではない、ごく自然な色艶を持つ琥珀色がかつた金髪。

白い半袖シャツにチェックの赤いネクタイ、そこまでは普通の学校の制服といったところなのだが。裾に黒いレースがあしらわれた際どい丈の、ネクタイと同じ柄のスカートに、これもまた黒レースのホルセットベルトという服装を纏った少女がこっちを見てそう呟いた。

「……………あ、わりい」

「……」

沈黙の後に謝罪しても、固まったままでこちらを凝視してくる十三歳程度の少女。下手をすればテレビでよく見るアイドルよりも可愛い顔立ちに、総兵は幾分驚かされる。

「……」

「……」

相手が何も言わないので仕方なしに黙ってから、総兵は心の中で盛大に舌打ちした。

「そうだ。川に行こう」という、微妙な泳ぎ場所を提示したチーが言葉巧みに沙夜と衣翠をそそのかしたことにより、今日こうやってシヨップिंगモールにまで引きずられてきたのはいいのだが。後の二人、洋司と桁也にゲームセンターへ逃げられた総兵は、チーのワガママ（一方的な癪癢）でここまで付き合わされていた。

店内に入るのを固辞し、女三人の買い物が終わるのを待っていたちょうどその時。

何も喋らない、不思議な少女とぶつかってしまったのである。

「びっくりした」

不意に喋られ、総兵はぴくりと眉を動かした。が、当の彼女は奇妙なものを見るような目つきで、じっとこちらを凝視してくる態勢を崩さない。

「ホントびっくりした。こんなびっくりしたの初めて。ってというか、あんた何処の誰？　なんて名前？」

鈴のような声でため口をきいてくる少女に、総兵は若干の苛立ち

を募らせながら彼女の顔をせいぜい威圧的に見下ろしてやる。
元々目つきが良い方でもないその視線に、それでも少女は物怖じする様子も見せない。

「あんな。初対面の、しかも年上の人間に【あんだ】って、」
「ねえ、シガ？ シガソウヘイ？」

そこで総兵はびたりと口を噤む。
自分の名前をフルネームで言い当ててきた金髪の少女は、真剣な眼差しでもう一度口を開く。

「違う？ 色の紫に佐賀の賀で、総合の総に兵隊の兵でしょ？」
「いや、ちよつと待てえ！」

半分錯乱しながら、総兵は向かいの少女の頭を掴んだ。不意打ちで頭を掴まれた少女は、それでも驚きもせず総兵の顔を見つめている。

「何で、俺の名前知ってたんだ？」
「四月二十二日生まれの牡牛座でAB型でしょ？ 烏龍茶が苦手なものも全部知ってるよ。あと……」

ぺらぺらと喋る少女はそこで一旦口を閉じて、ちろりと眼窩の中で明るい色の瞳を身じろがせる。その目線の先を辿る前に行き先をはぐらかされ、また定位置に戻ったその視線は興味深げに総兵の目を見つめてくる。

「うん、これくらいにしといてあげる。ねえ、そーでしょ？ あなた、紫賀総兵なんでしょ？」
「これくらいって……まだ何か知ってるみてえな口振りだなオイ」

「視力があんま良くないとか。あと数学得意だね、物理とかさ！」

嬉しそうにそう言い寄ってくる少女の眼前に、総兵は頭を掻きながら無言で自分の携帯電話を押し付けた。いきなり視界を覆った黒いプラスチックの物体に嵌め込まれた画面を見て、大きな瞳をぱちくりさせながら、少女はワケが分からないといったげに少し遠慮がちな目で顔を上げる。

「……なに？」

「ケータイ持ってたか？」

「うん。一応持ってるけど」

「アドレス交換してやつから、今日はこれ以上関わってくんな。連れに見られたら面倒なことになんだよ」

面倒くさそうにそう言われて、少女は不可解だと言わんばかりに表情を曇らせた。ぐりりと疑りぶかそうに回る目を見て、よく動くものだとも内心で感嘆する。

「なんで？」

「なんでってお前。いや、説明しようとしてもしようがねえな。あいつ等じゃあ」

「……意外と冷たい。まあ、想定範囲内だったけど」

「はあ？」

そっぽを向いて何か呟くと、少女はおもむろに溜め息をついてからスカートのポケットをまさぐり、その中から薄いフォルムの真っ赤な携帯電話を引っ張り出した。手慣れた様子で開くとすぐにメール画面を起動させ、空いた右手を総兵に突き出す。

「ケータイ」

相手に負けない仏頂面でそう言うと、返事も待たずに総兵の手から携帯電話を掠め取る。画面を横目でちらりと確認してからすぐにそれを押し返すと、目にも止まらぬ速さで総兵のメールアドレスを打ち込んで送信ボタンを押した。

「ほい完了。それじゃー退散するよ、連れに見られたくないんでしょ。紫賀総兵クン」

興味が失せたような口振りで一方的にそう告げると、少女は琥珀色がかった艶やかな金髪をわざとらしく揺らして回れ右をする。そのまま他人の波に揉み消される寸前だった後ろ姿を、総兵は慌てて呼び止める。

「お、おい！ ちょっと待て！ お前、まだ名前も言ってねえだろ

「！

「うん？」

陶器の表面に似た頬にかかった髪の毛の房をかき上げながら、他人の波の中で肩越しに振り返る。振り返ったその後ろ姿、背負ったリュックにぶら下がったアリスのパペットを見て、総兵は思わず息を詰めた。

「会ってから五分近くも経ってないような人間に、名前なんて訊く？ まあ・いいや、」

くるりと悪戯っぽく目を回し、彼女は思わせぶりに唇を開く。

「ナツキ。夏の希望で、夏希」

「あはははっ！ほんと・人間って全然変わんないんだっ！安心するくらい、何っにも変わってないじゃん！」

シヨツピングモールを抜け、大通りへと飛び出した少女・夏希はケラケラ笑いながら、軽快な足取りで歩調を少しずつ速めていく。どく・どく、と音を立てる心臓に手を当てて、うっとり彼女を瞳を閉じる。夏の希望は、恍惚と息を吐き出す。

「だからこそ、だよ。ねえママ？」

「ついだったあ！ 何すんですかあの野郎！」

頭を掴まれたチーが喚くのも構わずに、総兵は小さいその頭をしつかり固定して顔を覗き込む。

「何なんですかあ？ 私の顔に、値札でもついているって言うんですか。バカ言っちゃいけませんよ、この私に値札をつけられる男なんてこの世に存在するワケないじゃないですか」

「そもそもあんたに値札を貼っても、買う人間なんていないわよ」「マジか」

軽口を叩くチーの目。二つの眼球をじっと見つめていた総兵は、押し黙ったままで心の中で絶叫する。

(絶対、何かおかしい！ こいつと目の色、全く同じだぞ！?)

第三十六話 制アレって略しすぎじゃない？ 制服アレンジの略なんだって。

何の脈絡も無いグダグダの展開ですが、今ここで書かないと入れる場所とタイミングがねえ……と急いで書きました。ここまでお付き合い下さった方々、ありがとうございます。

第三十七話 人を見かけで判断しちゃダメだって。かといって個人情報を知り得

「あんたさ、最近変じゃない？」

最後の授業が終わり、教室中を包んでいた何気ない静寂が緩み始めた頃。いつも以上に疲れた顔で眼鏡を外す総兵に、ちょうど前の席に座っている沙夜が怪訝半分心配半分の顔で話しかけた。不意に話を振られた総兵は、反応も鈍く沙夜に焦点を当てる。

「……気のせいだろ」

「絶対気のせいじゃないね。何か必要以上に疲れてるし」

「そりやお前、チーに引きずり回されりゃ誰だってこんな顔になるだろ」

現に昨日の放課後、無駄にテンションの高いチーにいつも通りゲームセンターやらを引きずり回され、拳句の果てには奴が偶然落としたPSPのソフトウェアを買う為にツタヤマまで引つ張られている。並の人間ではチーのテンションについていくだけでもやっとなので、彼女自身もそれを不満ながら理解している。だからこそ、知り合いの中で一番忍耐強く付き合ってくれる総兵を一番気に入っているのだが。

（それ以上の感情がここ最近色濃くなってきたのをこの黒犬野郎は知りません、か）

心中で呆れた呟きを零しながら、沙夜は仏頂面の総兵から目を逸らす。

確かに、沙夜だけではなく他の連中も気がかりではあったのだ。

最近の総兵がおかしいことについては。

だが、その遙か上に行く心配をしている人間が約一名存在することに関しては、基本的に言うまでもない。

「年がら年中チーに引つ張られてるあんたが、昨日の徘徊に付き合っただけでヘタれる？ だから変だっつってんのよ」

「大きな世話だ、畜生め……」

苦々しげな顔で呟くと、総兵は襟足を搔いてから眼鏡ケースを閉じる。

「だれが畜生だこのヤロー、心配してやってんのに」

「誰も注文した覚えはありませんこの野郎」

「いいから答えろっつてんだよ。あんたがそんなんじゃねえ、チーに如実に影響が現れるんだからこっちとしては不気味極まりないんだっつもの」

「俺はあいつの気分操作機か？」

「それに近い機械生命体だったりして」

近しい分遠慮の無い会話を続けながらも、沙夜はどうにかして総兵の本心を探り続ける。

決定的な何かは分からないが、直感的なものはある。チーや男二人には及ばないが、六人でいつも行動してきたのだ。それぐらいは掴める。

この頃の、ちぐはぐとした六角関係は息苦しくてたまらない。どこかずれている感じがするのを感じ取れるのは内輪の人間だけなのだから、内輪の事情は内輪の人間で片づけるしかないのだ。

（っつーか、チーが元気なかつたらこっちまでイライラするんじやボケエ！）という叫びを押し込めた、無表情の鉄仮面を被ったままの沙夜と、いつも以上に無機質な喋り方の総兵の間で繰り広げられる言葉と言葉の攻防戦。

「今日はえらく能弁だなお前。何かあったのか、似合わねえ顔して」

「ははっ、べつつにい？ 近頃変な挙動が多いあんたに言われたかないけどねえ？ 図書室に行こうとして、掃除用具のロッカー開いてた人に。天然ボケの素養あるんじゃないの」

徐々にヒートアップしていく会話よろしく口論がオーバーヒートする一歩手前、そこで一気に二人の間に横たわっていた熱が冷めた。二人で一斉に溜め息をつく、総兵が小さく舌打ちしてからこめかみを押さえる。

暫しの沈黙。その後には面倒くさそうにもう一度息を吐くと、沙夜と目を合わせずに口を開いた。

「文句があんならうちの担任に言え。あの野郎、人が本気で言ってるのに軽々しくスルーしやがって」

「？ 榊が噛んでるの？」

意外なその言葉に沙夜が目を丸くすると、総兵は答えないうままに口を閉ざしてしまう。

「どういう事？ 特異体質絡みなの？」

沙夜がそう言って突き詰めると、総兵は言うもんじゃなかったと言いたげな顔で椅子から立ち上がった。

「……あー、俺も気が短くなってきたな。わりい、冗談だ」

「お、おい！ ちょっと待てー！」

結構な弁力を用いた言葉の攻防戦の見返りが無いのは、あまりにも虚しすぎる。沙夜が慌てて立ち上がるうとする、それを制するような肩越しの視線が鋭く飛んできた。

「チーに、先に帰るって言っといてくれ。用事があつから」

「ふーん……こんなもんなんだ。想像してたよりかは良いじゃんか」

シヨツピングモールのだ真ん中。木製の真新しいベンチに座って、磨き込まれてつるつるとした床にコンバットブーツを履いた足を投げ出した姿が浮いている。

ティーン向けの女性ファッション雑誌を興味深そうに捲りながら、夏希と名乗っていた少女はあの時と同じ格好でいた。が、ページをぺらぺらと捲るのにも飽きたのか紙面から顔を上げ、夏希は不服そうな顔で辺りを見回す。

「それにしても遅くない？ このあたしを待たせるとは我が
「待たせたなクソガキ」

言い終わらないうちに鞆の底が頭頂部を直撃し、夏希は「いったあー！」と悲鳴を上げた。仏頂面で鞆を持ち上げ、頭を抱えて身体を折ってしまった夏希の前に回り込む。

「いい、いいったいなあ！ 何すんのさっ!？」
「親の面が見たいわ阿婆擦れ。で、何の用だよ？」

涙目で頭を押さえている夏希に、総兵は無表情で問いかける。

メールアドレスを交換してから数日。何の連絡も無かったのだが、昨夜に一通のメールが送られてきた。

そのメールの内容に従い、今日こうしてここにやってきたのだが。アクセル全開の生意気な態度に、早くも後悔の波が押し寄せる。

「何の用、って決まってんじゃない？」

「はあ？」

「あたし、今ホテル泊まってんだけどね。もうすぐお金無くなっちゃうの、だから家に泊めてくれない？」

親しい友達に尋ねるような口振りで、夏希はそう言った。

キンパツ碧眼の少女にそう言われて、総兵はごく自然に頷いてから口を開いた。

へー、そうなんだ。別にいいけど。

「で、片づくかボケエええええ！」

いきなりの発言に大音量のツッコミを返すと、当の夏希はきよんとした顔で首を傾げた。

「……何でさ？」

「何でって……お前、馬鹿っ、自分の身を省みなさいよ！ その後に俺を見なさいよ！ 意味を汲み取りなさいよ！」

動揺を隠せない総兵の言葉に、夏希は素直に従ってモデル顔負けのプロポーションをした自分の身体を見下ろした。それから肩で息をしている総兵を、頭の上から爪先までじっと観察する。

それから一息ついて。くるりとライトブルーの瞳を回し、口を開く。

「うん。だから何なのさ？」

「
」
最早、言葉が出ない。

反論する気力も絞り出すことが出来ず、総兵は精神的ダメージに打ちのめされて先程まで夏希が座っていたベンチに倒れ込む。

「ねー、ねえねえねえねえ。すっかりしてよ、泊めてくれるんではないよ？」

「泊めるかボケえ！ 誰が泊めるか泊めないよ泊めるもんですか！」
「だってあたし、他に泊めてくれそうな人いないんだもん！ 当てがここだけなんだもん！」

「ええい黙れお黙り黙らっしやい！ か弱い羊が狼のねぐらに突っ込むような真似はしないの！」
「羊なんて弱い動物じゃないよ！ あたしはその狼の子供だもん、人間はそういうのを本能で分かるようにつくられてるの！」

意味不明の言葉をフルスイングで打ち込まれ、舌戦不能に返められた総兵はまた精神的ダメージに苦しめられる。
それから、何度も自分に向かって問いかける。

何故、こんな事になったんだ、と。

思えば、このおかしな少女と休日に出逢ってから少しずつ何かが変わっていった。自分が彼女ことを気にして考え込み過ぎた部分では自業自得なのだが、それに関しては少しは弁解の余地がある。

酷似しているのだ。直感でいけば遺伝子レベルで。

いつも自分の周りで飛び跳ねているD組のトラブルメーカーに。
（だけど絶対にありえねえだろ。何？ 人権の存在無視して人体実験？ あいつのクローンですか。けど、髪とかの色を変えたにしてもあんなに綺麗に染められるもんなんですか。ついでに考えりゃあいつのクローンじゃこの身長と体型は無理だろ。いや、下手すり

や今のあいつよりちょっと歳が上なのかもしれないなこりゃ。それだとしても、この顔じゃまだ中学生だろ。あーもう訳分かんなくなってきた)

脳内でぶつぶつと呟きながら完全思考モードに入った総兵に、夏希はひどく面白くなさそうな顔をして高い腰に手を当てた。それからしばらく総兵をじっと見つめてはいたものの、痺れを切らしてベソの後ろに回り込む。

「いーから返事してよ日が暮れちゃうでしょ　　っ！」
「いいから首締めんなバカタレ　　っ！」

ぎゃあぎゃあ騒ぎながらも一応は夏希から距離を取った総兵はもう自棄半分で、こちらを睨んでいる夏希に向かって言葉を投げつける。

「分かった！　もういい、俺はもう反論しませんお前の好きにしろ馬鹿野郎！」

「ホント！？　泊めてくれるの？　良かったー、実はもうホテルの方でチェックアウトしちゃったからさ」

自分が泊めなかったら、一体この金髪少女はどこで眠るつもりだったのだろうか。

度胸があるというか計画性が無いというか、お気楽ともいえる行動にますますチーの姿がだぶる。

チーによく似た人間と同居など、これから始まる悪夢に心労が絶えないことだろうと思っていると。

早速、悪夢が始まりを告げた。

「ねえ。さっそくで悪いんだけどさ、あたし着替えとかそんなにたくさん持ってないから買ってもらっていい？」

「うっ……沙夜ちゃんの負け犬……」

「誰が負け犬だ負け猫野郎！ そんなことをぐだぐだ言うなら、あんたが面と向かって戦いなさいよ！ あの能弁魔王とよお！」

「ちよっとは落ち着けば二人とも。チーはベッドで不貞寝しないで」

放課後の鳶坂家。三階建ての背が高い家の一番上、シックな色合いに落ち着いた衣翠の部屋でチーと沙夜が温度差の激しい言葉をぶつけ合っていた。

「だって基本受け入れ態勢がシカトなんですもん！ デフォルトで私がないことになってるんですもん！ かと思えば無言で近づいてきて、人の顔とか目とか怖い目で観察してくるんですもんもうヤダーっ怖い怖い怖いっ！ 総兵君なんかもうヤーダーっ、ヤダヤダヤダっ！」

「嫌いとは言わないのね……当たり前といえば当たり前だけど」

人のベッドの上で薄いタオルケットにくるまり、芋虫のように右へ左へローリングしながら喚いているチーの相手もせず淡々と紅茶を啜ると、衣翠はまだ気が逆立っている沙夜の方を向いた。

「それにしても気になるわね。柵のことを引き合いにだされると何

とも胡散臭いし」

「あいつを問い詰めても出てくる訳ないしね。鳴を使うか？ 鳴に頼んで訊いてもらうか。あいつ鳴には甘いし、絶対何か零すって」「なっちゃんも巻き込みませんよ！ 何が絡んでるのかも分からないのに、なっちゃんを引き込むのは絶対にダメです！」

いつの間にか起き上がったチーがベッドの上で紅茶を啜ってからそう叫ぶと、衣翠はふうと息をついてから二人の意見を噛み砕く。

「たしかに鳴を使えば何か零すかもね。学校では悟られない為に気取ってるけど、プライベートじゃ鳴にベタ惚れなのは明白だし。だからといって鳴を巻き込む訳にもいかないわね。打開策が見つからないからといってほいほい人を使えないし、万が一特異体質絡みだったらなおさら。力を制御できなくて家の電子レンジぶっ壊しちゃったぐらいだから、巻き込みじゃえば爆弾決定よ」

鞘など着けているはずも無い言葉の刃で二人の友人の考えを切り裂くと、文字通り噛み砕いた言葉をさらりと受け流して真っ白な皿の上のクッキーに手を伸ばす。

「だから私がさっきから言ってるじゃない。特異体質とか何とかを気にし過ぎなの、普通の女子高生はそんな物騒な方向に話持っていないよ」

「しょうがないでしょうが、あたし達は普通の日常送れるほどの普通の人間じゃないんだから」

「だからこそこういう時に普通の思考回路を働かせろって言ってるの。私達は体面上でなくても普通の女子高生なんだから、そのへんのものとはちゃんと培われてきてるでしょ」

「一番普通の女子高生っぽくない奴に言われたくねえよ……」

淡々とした顔でそう言う衣翠に、引きつった顔で沙夜が言葉を返す。

「もー。さっきからフツーフツって、一体何が普通なんですかあ？」

半分ほど飲み終えた紅茶が漂う瀟洒なティーカップを見つめて、唇を尖らせたチーがそう呟いた。それを聞いた衣翠が引き結んでいた唇を緩ませ、眼鏡の奥の翠眼を細める。

「好きな人がこの頃おかしいからって友達に相談もちかけるところとか」

ひくっ、とチーの肩が痙攣してティーカップの中の紅茶が揺れた。

「好きな奴に相手にしてもらえなくて、寂しくて荒れてることか」

沙夜の言葉が鼓膜に響いた瞬間。チーは四角いガラステーブルの上に置かれていた小さな皿にティーカップを置く（叩きつける）と、制服姿でお構い無しにタオルケットにくるまってベッドの上に転がった。

「イ ヤ あああっ！ もうそれ以上言わないでええええええええ！」

「やー、一番反応がカワイイから好きよ。あんたのそういうトコ」「すぐく一途だしね。私が総兵だったら思いっきりからかって遊びたい」

「もうイヤ っ！ ヤダヤダヤダーっ！ 総兵君のドアホっ！」

「やっぱり嫌いとは言わないのね」

「やー、満足満足。久し振りにいっぱい物買ってもらったなあ」

「それにしてもワガママ言い過ぎだっつーの。今日から食費切り詰めにやるからな」

「ええ？ 食べられるなら何でもいいよー。贅沢言えないじゃん、生かしてもらってるのに」

大きなショッピングバッグを両手で持ったまま歩く夏希の言動に、彼女の持っている倍の荷物を持たされている総兵は驚いて目を丸くした。

「あ？ 何、そんな顔して」

綺麗に艶めく金髪のロングヘアを揺らし、肩越しに振り向いた夏希は怪訝そうに眉を寄せた。

「いや、ワガママ放題だった割には聞き分けの良いこと言うと思って」

「失礼だなあ！？ 言っとくけど、あたし好き嫌いなんて贅沢なことしないんだからね！」

「今、俺の驚きメーターが最大値を遥かに超えてぶっ壊れたぞ」

どこからどう見ても「自己中心のワガママ中学生」にしか見えな

い夏希は、外見だけで内面を決めつけられるのが納得いかないらしい。むくれたままでスタスタ歩きながら、もう総兵の方を振り向かなくなった。

家への帰路を辿りながら黙りこくって歩いていると、ふと夏希のリユックに下がったアリスのパペットが視界にちらついた。

チーが、器用に裏声を駆使して操っていたアリスのパペット。

それと同時に、チーに似たこの少女に訊きたいことが溢れ出す。

「なあ」

「なにい？」

「お前、家族いないの？」

不機嫌そうな声で返事をしてもちゃんと振り向いた夏希の顔を見て、わずかに躊躇った後に出てきた言葉だった。

総兵と出逢った時から一人だった彼女は、また前を向いてから喋り出す。

「いるっちゃあいるよ。父さんも母さんもいるし、兄ちゃんと姉ちゃんだっている。我ながら幸せで楽しい家族だと思ってるし」

「だったら、何で帰らねえんだよ？」

御尤もなことを言ってみても、夏希は怯んだ様子も見せずに不機嫌そうだった顔を少しだけ笑みを含んだ表情に変えた。

「父さんと母さんは、今始まったばかりだから。あたしは邪魔できないの。だから一人なんだよ」

「……何だかよく知らんが、よく知らねえ男の家に転がり込んで大丈夫なのかお前は？」

「よく知らないっていうのは心外だね。言ったでしょ？ 名前も誕生日も血液型も、視力がちょっと悪いことも、」

そこまで言うてから、夏希はくるりと後ろを振り向いた。怪訝そうな顔をしている総兵を見上げて、意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「好きな人だって知ってるんだよ。さて、何ででしょーかつ？」

そう言い終わって夏希がケラケラ笑うのと、総兵の顔が瞬時に赤くなったのはほぼ同時だった。

「あはははははっ！ イニシャルT・Yの人ーっ！」

「待てコラ、このエセガキ！」

そうやって二人が走り始めるのと、夕日が沈んだのはほぼ一緒。

夕日に照らし出された二人目のアリスが、夏希の代わりに心中で呟いた言葉などは誰にも聞こえなかった。

第三十七話 人を見かけで判断しちゃダメだって。かといって個人情報を知り

だんだん恋愛傾向になってきました、プロットから大きく外れて全くの予想外です。もうちょっとお笑い系を盛り込むように頑張ります。

ここまでお付き合い下さった方々、ありがとうございました。

第三十八話 よく考える。小田さん以外にもいるはずだ。

「原哲夫」

「……小田和正」

「さ？ さー……佐藤健」

「ルー大柴」

「馬場園梓」

「また さ ですか！？ ただの嫌がらせじゃないですか佐藤江梨子！」

「小島よしお」

「小田和正」

「ちよつと。衣翠ちゃん、さつき言いましたよ小田和正。何回私に さ を言わせたら気が済むんですか」

花札タワーを教室後方のロッカー上で建設しながら、意図的な「さ」の連続にイラついたチーが二人の参加者を睨む。チーに二人して「さ」をけしかけた沙夜と衣翠は素知らぬ顔で札を手に取り、タワーを建設する手を止めない。

当然ながら面白くないチーは唇を尖らせ、タワーの隣にひよいと腰掛けてから顔をしかめた。

「そんなに機嫌を損ねなくてもいいじゃない？」

「 さ が二回も来たら、誰だつてテンション下がりますよ！ しかも小田和正ですよ、小田和正ショックはいつか石油ショックでさえも超える大災害に発展しますよ！」

「お前の心の中だな」

冷静なツツコミを入れられ、チーはいよいよ面白くなって口ツカーの上で膝を抱えた。「あ、チーちゃんサービスショット」

と、他のクラスのやや天然気味の女の子に言われてからスカートを抱え込む。その様子を見ていた衣翠が、珍しく感情を込めた声で諭すように口を開いた。

「そんなにカリカリしなくてもいいでしょ。考えすぎ」

「考えますよそりゃ。何があつたのかさえも分かんないし、それに」

そこまで言うてから、チーは前髪の下で細めたライトブルーの瞳を緩慢に瞬かせた。

「少しは信頼されてるかと思つたのに」

シリアスなその口振りに、衣翠はちらりと横目で沙夜の方を向いた。全くこちらを向かない沙夜の無言の気遣いに軽く感謝しながら、衣翠は持っていた花札をチーの手の中に捻じ込む。怪訝そうな顔を上げたチーに、衣翠はあえて淡々とした言葉を返した。

「信頼してる人間に相談するのは気が引けるんですよ。違う意味での信頼だもの、それとも……」

花札タワーの方に目を移しながら、衣翠は小さな発見に自分の中で考えを巡らせていた。

「あんたが絡んだ問題なのかもしれないわよ」

「どーした色男。風邪でも引いたか？」

「誰が色男だ」

ケラケラ笑いながら赤みがかった栗色の髪を揺らす唯鶴に、くしやみをした総兵は仏頂面で言葉を投げ返した。保健室の中には二人以外に誰もいない。

ノースリーブの薄い黄緑色のシャツと、涼やかな色合いの服装がよく似合う唯鶴は面白そうな目で遠慮なく総兵を観察すると、いつもブルーのコンタクトが着けられている裸眼の左目を意地悪く眇めた。

「それにしても、今日はチー助を連れてないのね。いや、今日もか」
「あんたって、ホント性格悪いのな」

引きつった声でそう言われて、相手の痛い所を突いたと確信した唯鶴はまたケラケラ笑ってから、すらりとした脚を組んでからいたって中性的な笑みを浮かべた。

「生まれつきの性質は変えられないのは仕方ないのよ。けど、生まれつきの性質を既存のものコピーにすることは理論上可能」

唐突にそう言われて、総兵は怪訝そうな顔で眉をひそめた。その表情の変化を見た唯鶴は大袈裟に顔をしかめて、ひよいと肩を竦めた。いちいちオーバーリアクションをする、この保健師はどうにも掴み所が見えてこない。

「何だよ……俺の考えを肯定してんのか？」

「四十パーセントはね。戦神の争乱樹が噛んでるなら六十五パーセ

ントにしてやるわ。ま、どうせ噛んでたとしても尻尾は出さないだろうから、四十パーセント止まりだろうけど」

喋り終わってから、唯鶴は考え込むような顔になると視線を自分の膝に移す。

「それにしても非現実的な方に考えを進めたもんねえ。クローンなんて、SFの中の話じゃねえっつーのに」

「たしかにそうだけだよ。やっぱあいつに似てるんだ、顔とかちょっとした仕草とか」

「けど、その娘ナチュラルな金髪みたいなんでしょ？ もし噛んでるとしたら、戦神の争乱樹が特許レベルの染髪技術を磨いてると思えないけど。どっかの美容院か」

大真面目な顔で冗談交じりの憶測を呟く唯鶴に、総兵は呆れて溜め息をつく。

「そんなに戦神の争乱樹にかこつけなくてもいいだろ？」

「一番関連性があるのはそこだと思っただけだね。有益な情報も無いから、一旦ゼロにリセットしようか。はいリセット完了。リセット完了したついでに、その女の子の事を詳しく聞かせてくれない？ それと写真撮ってきて、なるべく体型とか分かる感じで。出来れば肌の質感とか髪質とかも確認したいから、風呂でも覗いて隠し撮りしてこい」

健全な男子高校生にする命令ではない命令をさらりと下すと、唯鶴は思考回路を停止させてから息を吐き出した。無理難題を突きつけられた総兵はしかめっ面のままで、座っていたソファから立ち上がる。

「あんたに相談したのが間違いだっただわ。もういい、他当てる」

「あーら。クローン説の確実性を高める為にはそれぐらいしなきゃ無理よ、それともロリコンになりたくないだけ？」

「間違っても性犯罪者にはなりたくねえだけだ」

それだけ言っただけ保健室から出ていった総兵の後ろ姿を見ていた唯鶴は、やれやれとばかりに首を振った。

「世界の半分は、あたしみたいな犯罪者だつての」

「こんなもんでいっつかあ」

胸元にギャザーの寄った、ひらひらとした淡いオレンジのワンピースに、踵が低めなものを選んだコルクのウエッジソールを履いてから夏希は玄関の姿見を覗き込む。お気に入り、雷をモチーフにした立体的な赤い髪留めで整えた金髪を揺らして自分の横顔を覗き込むと、自分でもわずかにあの面影が重なって見えた。

幼い頃からずっと、似ているだとか生き移しだとか言われてきた。

「ま、そりゃ当たり前前なんだけどね」

ぼつりと呟いてから、下まつげに付いたゴミを繊細な指先でつまみ取る。それから、こつこつとウエッジソールの底を鳴らして、姿見の中の自分を爪先から頭の上まで再度チェックした。最後に、光の輪が滑るロングヘアを後ろに流すと、銀色のドアノブに手を伸ばす。

「いつてきまーっす」

爆弾が、街に繰り出した。

第三十八話 よく考える。小田さん以外にもいるはずだ。(後書き)

ほったらかし星人ですみません。模試前にお送りいたします。

第三十九話 子どもって大体、お父さんお母さんに似てるって言われたら複雑に

「なんだかなあ、やっぱヒマだわ」

部屋を出て大通りへと繰り出した夏希は、早くも退屈したような顔で辺りを見回した。背中にはいつものようにワンショルダーのリュックを背負い、ガラスビーズの空っぽな瞳を二つ付けたアリスがぶら下がっている。

洒落た風合いの鮮やかなオレンジ色のワンピースにマッチしているとは思えないそのリュックサックを背負ったまま、夏希はこつこつとウエッジソールの底を鳴らした。きつくなってきた日差しに眉をひそめ、両側に立ち並ぶ建物が落とす四角い影に身を隠すようにして歩き続ける。

「……………けど。ここまで来たんだから、ちゃんとやんなくちゃ」

意味ありげに、夏希は大きな瞳を伏せたまま呟いた。華奢な肩に引っ掛かったリュックの紐をぎゅっと掴み、深く息をつく。勢い任せにがばつと顔を上げると、リュックにぶら下がったアリスがふらりと揺れた。

「やんなくちゃな・ん・だ・け・ど！ どうやればいいのか、見当もつかないし！ 全く、これっぽっちの手掛かりでどうやって尻尾を掴めばいいのさ？」

半ば投げやりな口調でそう喚くと、夏希は唇を尖らせたままでもリュックを背負い直した。

昨日の晩から衝突が続けている、幾つもの感情の波のせめぎ合いで、未だに気分が安定しない。晴れない心を抱えたまま喚いたとこ

るで、何も解決できやしないのだ。

もう一つ、溜め息をつく。

すっきりしない気持ちにピリオドが打ちたい。それだけで、少しは気が楽になる。

「ママに会いたい……」

ぼつりと。

そう呟いてから、夏希は意を決したように街中の通りを駆け出した。

「悪いことじゃないはずだもん」

「チーちゃん。お昼だぞコラ。あんたの好きな春巻きやるから、早く起きろ」

昼休み。

おもいおもいの昼食を口にしてしている生徒達の中に、一人だけあきらかに浮いた存在が混じっていた。生徒用の四角いロッカーの上で膝を抱え、掃除用具を入れる縦長のロッカーに背中を預け、陰気なオーラを身体中から解き放っている女子生徒。

出席番号が、小学校の頃から一番後ろである万大路さんである。

「……いらぬです」

限りなく低いトーンでそう返され、沙夜は箸の先で持ち上げていた春巻きを、弁当を食べ終えたばかりの衣翠の口に突っ込んでから席を立つ。特に疑問を持ったふうにも無く、もぐもぐと春巻きを口内に呑み込んで咀嚼している衣翠の傍を通り過ぎると、沙夜は座敷わらしのように自分の世界に引き籠もっているチーの頭に手を置いた。

「昼飯ぐらい食べるっつもの。いつつ食欲旺盛なくせして」

「あの頃、私は若かった」

「今でも若いだろうが。まだ十五歳でしょうが」

そう言いながら、沙夜はぐるりと教室を見回した。所定の位置、洋司と祐也の漫才チックなやり取りを傍観しながら、時たま相槌を打ついつもの姿が見当たらない。

そのことに若干の苛立ちを覚えると同時に、チーが膝を抱えたまままで不気味に笑った。

「ふへへ……だって、こんなマインドコンディションで何を食べろってんですか。こんな過酷な環境で、食傷気味のツツコミを喰らう毎日……正直耐えられない」

最近はずつとツツコまないで、代役として他の人間がキレの悪いチーの病み発言にツツコむのだが、やはりツツコミに関して総兵の右に出る者はいない。ボケるのがチーなら尚更だ。

軽く失礼なことをほざいている、万年出席番号最後のボケマシーンの有り様に、沙夜はがりがり頭を掻いた。衣翠は未だに春巻きをもぐもぐと咀嚼している。

「たしかに辛いのは分かるけど、せめてロッカーから降りなさいよ。教室の亡霊になってんじゃない」

「はは、たしかにみんなのツツコミも他と比べたらレベル高いですよ。……けど、みんな甘い！ 激辛からは程遠い！ 総兵君の、物理的攻撃と言葉の暴力が織り成すハーモニーには敵わない！」

「一回、ツツコミグルメ関連から離れる！」

がばつと顔を上げて叫んだチーの肩を掴んでひとまず落ち着かせると、沙夜はぶんぶん頭を振って、自分を落ち着かせるように大きく息をついた。総兵はいつも、こんなクレイジーマシーンを相手に学校生活を送っていたのだろうか。

「相当のタフよね、総兵って」

沙夜の心の内を見透かしたように、春巻きを飲み込んだばかりの衣翠が口を開く。

「わーもうヤダーっ！　こんなの耐えらんないっ！　総兵君のバカタレーっ！」

ついに、チーが限界値を突破して泣き出した。泣きすぎでウサギのような目がデフォルトになってしまった、三月末生まれのスライディング同級生の背中を疲れた顔で擦ってやりながら、沙夜は据えた目で肩越しに後ろを振り返った。

その視線を絡め取ったのは衣翠のみで、後の人間　　総兵を除く男二人組と、いつものように窓辺で煙草をふかしている担任はあからさまに目を逸らす。

「総兵の様子がおかしくなってから一週間と二日近く　　、そろそろここが潮時かしらね」

静かにそう言い放つと、洋司と桁也の肩がびくりと跳ねた。榊がやれやれとばかりに首を振り、衣翠はこくりと一つ頷く。

「明日の放課後、ひっ捕まえて査問会よ」

「何か、寒気がするな」

屋上。

昼の日差しが燦々と辺りを暖めている中、D組教室で燃えている方向不明の闘志を敏感に感じ取った総兵は、ぎくりとした顔で後ろを振り向いた。もちろん誰もいないのだが、振り向かずにはいられなかったらしい。

気を取り直し、一人で爽やかな風に吹かれていると、少しばかり心が和んだ。わずかに弛緩した心の糸が揺れて、その隙間からある一人の顔が浮かぶ。

「最近、ちゃんと話してねえからな」

何とはなしに呟くと、不意にその顔と、いきなり自分の前に現れた不思議な少女の顔が重なった。

やっぱり、似ている。

直感でいけば遺伝子レベルで。

よく動く目も、その瞳の色も。悪戯っぽい笑い方や、人の前を歩きたがるせつかちな癖も。

自分が知っているチーの癖に、何もかもがリンクしていく。

「クローン、じゃねえか」

そう呟いてから、立ち上がるうとする。。

「誰がクローン？」

不思議そうな声が、頭上から降ってきた。

見上げると、光の輪が輝いている、眩い琥珀色がかった長い金髪が視界に入った。

くりくりした、悪戯っぽいライトブルーの瞳。

「まさか、あたしのことじゃないよね」

第四十話 よく考えて。現実つて、意外と残酷だから。

「……なんつて、お前がここにいるの!？」

「何でつて。そりゃあ、紫賀総兵に会いに来たんだよ」

銀色に光る給水タンクの隣に寝そべって総兵を見下ろしている夏希は、悪びれた素振りも見せず、けろりとした顔で言葉を落とした。チーにそっくりな、ライトブルーを纏った瞳がころりと眼窩の中で一回転する。

白昼夢から抜け出てきたように、奇抜な登場を見せた夏希に、総兵は口角を痙攣させながら立ち上がった。

「冗談じゃねえぞ。さっさと帰れ」

「なんでえ? ここまで来るの、結構かかったんだよ。暑いし、大変だったんだから」

「じゃあ、何で来たんだよ!」

穏やかだった気持ちを乱されて、苛立ちに尖った声でそう訊き返すと、夏希はひよこつと頭を引つ込めた。かつかつ、という硬質な足音の後に、鉄製の梯子を降りているのか小さく金属音が響く。

そのまま屋上に降り立つと、夏希はリュックの肩紐に両手をかけたまま、怪訝そうな顔で総兵の前に出てきた。

「なんで、つて言われても。ねえ」

「いや、お前さっき俺に会いに来たっていつてたじゃん! 目的果たしたんだから、さっさと帰れよ!」

「たしかに目的は果たしたけどさ。何よ、さっきのクローン発言」「はあ?」

意味が分からないと言いたげな顔の夏希に、総兵は怪訝そうな顔で片眉を動かした。街中を歩いてきた格好そのものの夏希は、不愉快そうに唇を尖らせる。

「だつれがクローンなのよ、だ・れ・が。人間のクローンなんて造つたら、国中どころか、世界中で大騒ぎだつつの」

「おい、偉そうな御弁舌垂れてるけど、なんでお前は普通に靴履いてんの？」

「たしかに人間のクローンなんて造れたら便利だろうけどさ。臓器提供とか、ドナーを待ってる人間の遺伝子からまた人間を造れば解決しちゃう話じゃん？ でもそれじゃあ、ただの殺人だよな」

「おい、聞いてんのか。なんで靴履いてんだ。どうやってここまで上がってきたんだ。え？」

「でもさ、人としての道徳的理念に適わないからっていう理由で、本当にヒトのクローンを造るのをヒトが止めてると思う？ 絶対どこかで、こっそり造ってるよね。ロシア辺り、とか……うっわ、めっちゃくちゃホラー！」

「お前がどうやってここに来たのがホラー！」

興奮して捲し立てる夏希の声を遮ると、総兵は勢い良く立ち上がった。それから夏希の腕を掴み、頭をもう片方の手で押さえつける。

「痛いイタイいったい！ 何すんのさ！」

「いいかクソガキ。さっさと帰れ、さもないと家から閉め出すぞ」

夏希と一緒に暮らしていることがバレたら、間違いなく根掘り葉掘り、関係ないことまで連中は追及してくるだろう。前半はそれらしい尋問を保っていられるだろうが、後半は自分の性癖を中心とした質問による私刑になることは確定である。

その前に、会わせるべきではないと直感した。
チーと、外見も内面もリンクしている夏希が。この二人が出逢ったら、何が起こるか。それが一番に怖い。

「分かった！ 分かったから、離してーっ！」

夏希の金切り声に、はっとして我に返る。慌てて手を離すと、夏希は掻き乱された前髪をぶつぶつ文句を言いながら整え始めた。わずかに潤んだ瞳は、やはりチーに似ている。

不意に、午後の始業を知らせるベルが鳴った。

校庭に散っていたまばらな人影が、それぞれの足取りで校舎に吸い込まれていくのを横目で確認しながら、総兵は恨みがましい目線で自分を睨んでくる夏希に念を押しした。

「絶対、帰れよ」

「帰るもん。言われなくたって」

唇を思いきり尖らせて夏希がそう返すと、あの疑問が頭をもたげた。

「……お前、どうやってここまで上がってきたの？」

訝しげな声でそう訊いても、あからさまにそっぽを向かれた。「っーん」という効果音が聞こえてきそうである。露骨に機嫌が悪く度に見れるのもそっくりだと半分呆れながら、総兵は夏希に背中を向けた。

錆びたドアノブを握り、ドアを開く。おもむろに視線を横に逸ら

すと、じとつとこつちを睨んでいた少女が、驚いて顔の方向を変えて口笛を吹き始めた。

「帰れよ！」

可愛くない態度を取る夏希に、これもまた、彼女をカワイイと思っていない口調で怒鳴る。

そう言って、校舎の中に左足を踏み入れた瞬間。

ぴりつと、微かな音が耳の奥、脳髓の奥で爆ぜた。

「は」

歩き出そうとしていた足が、ぴたりと止まる。
時間が止まったわけではない。周りの環境は普通だ。なぜか、はつきりとそれだけは直感できる。その証拠に、今、自分の傍らを金髪の子が通り過ぎていった。

彼女の、華奢な肩に下がったワンショルダーのリュックに括りつけられた、空色のガラスビーズがきらりと光った。

やっと、足が動いた。

宙に持ち上げていたその左足で、思いきりリノリウムの床を蹴る。

「夏希

っ！」

「なんで一人いねえんだよ」

「さあ」

五限目、数学。D組教室にて。

怪訝そうに教室を見回した後の担任の言葉に、チーを除く全員が首を捻る。

「あいつ、こんな白昼堂々サボる奴じゃねえだろ。おかしいぞ、なんかあったのか」

「白昼以外だったら、堂々とサボれんのか」

誰かのツツコミに、そうだそうだと加勢が入る。それを全て無視して、榊はがりがりと同倒くさそうに頭を掻いた。

「おい、六人組。正確には五人組。どこ行ってるんだ、あいつは」
「知らねえよ、俺達。最近、昼休みはつるんでねえし」

洋司の拗ねたような口振りに、放課後もだろ、と必要ないカウンターを喰らわせて、榊の目線がチーを向く。

シャーペンシルを握ったまま、左耳から呑気そうな顔をした白い靄のようなものを出している万大路さんは、周りのクラスメイトを引かせながらエンスト状態である。

「……あいつもおかしくない？」

「今さら!？」

クラス総出で言葉を捻じ込まれても、平然とした顔を崩さないのがこの男。過剰に反応すんじゃないやねえよ、と物ぐさに呟きながら片目を眇める。

「じゃあ何なのよ。ったく、勘弁しろよ。煙草の値上がりで苛立ってんに、これ以上俺を苛立たせるな」

「全然苛立ってるように見えません、先生」

「知ってる？ お前が喋るだけで、結構イラっとくるんだよ。俺」

ケンタッキーのおじさん事件、正確にはチーの髪の毛ばつさり事件で、机の下から出てくる時にこれでもかといった感じで頭を打ちつけていた清冴に、榊はこれでもかといったばかりに毒舌を浴びせる。

「それなら禁煙すればいいでしょ。鳴の身体の為にも？」

「大丈夫だって。俺は、道連れにするのはお前達だけだって決めるから」

「訴えるぞ」

言葉の攻防戦が一瞬火花を散らす。長くなりそうだと全員が溜め息をついた時、文庫本を開いていた衣翠の聴覚センサーに、ぴりつと痛みにも似た小さなノイズが走った。

急激な加速を見せた毒舌合戦の隣で、衣翠は顔を上げ、目を開いたままでノイズの走った空間に聴覚を限定させた。途端に周囲の音が消え、衣翠の聴覚は、ここではないどこかの空間に響いている音を掻き集め始める。

怒鳴り声。男の声と、女の子の声。

男の方は、女の名前を呼んでいる。女の子の名前なのだろう。

女の子の方は、時たま反論するように叫ぶだけであまり喋っていない。学校の廊下でも走っているのか、リノリウムの床が擦れて、時たま鋭い音が混じる。

「近づいてきてる」

ぼつりとそう呟くと、衣翠はがたと音を立てて席を立った。教室が静まり返って、全ての視線が自分に集まっていることを気にもせずに、衣翠は教卓の前を通り過ぎて廊下へと出る。

端の窓に掛かっていた鍵を外し、窓枠に肘をかけて身を乗り出した衣翠の後を、いつものメンバーが追い、その後を榭と物好きなクラスメイトが続いた。

校舎から見下ろす景色は、第二特別棟と主棟、第一体育館とを繋ぐ渡り廊下。

人っ子一人、今はいない。

「来た」

「おりゃっ!」

渡り廊下。コンクリートの床を蹴飛ばし、最後の力を振り絞って、思いきり腕を伸ばす。空を掴みかけた右手でリュックの肩紐を乱暴に手繰り寄せると、夏希は尻尾を踏まれた猫のような悲鳴を上げた。そのまま左腕を首に回し、がっちりと固定すると、往生際も悪くばたばたと暴れ回る。

「あだだっ、痛いイタイイタイ誰か助けて　　っ!」
「さっさと帰れっつたろ、このド　　」

「なーに、やってんの」

はたと響いた声の主。

心当たりがありすぎて、最早冷や汗さえも出ない。

「……はあ？」

校舎をゆっくり見上げると、見慣れた面子が勢揃い。
冷やかな視線が、矢のように降り注いでいた。

第四十話 よく考えて。現実つて、意外と残酷だから。（後書き）

皆様、かなり遅れましたが、あけましておめでとございます。2
年目に突入しても、一学年も成長していない連中と作者ですが、今
後ともよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9209f/>

朱城高校1年D組！

2011年8月16日01時13分発行